
聖域の死神

九条 水菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖域の死神

【Nコード】

N3761T

【作者名】

九条 水菜

【あらすじ】

ハーデスとの聖戦後・・・黄金聖闘士達も生き返り平和が戻ったように見えた聖域で、突如現れ始めた怪物：虚。八番隊四席・六車アズマは上からの命を受け、聖域に向かい虚が現れるようになった原因と虚退治をすることになる。聖闘士からの評判も悪く、暗く心を閉ざしたアズマだったが：
一体なぜ虚が現れるようになったのか：？
また、死神の力を失った黒崎一護の元に魔の手が迫る。

この話はBLEACHと聖闘士星矢のコラボです。：設定はBLEACHの破面編後の3月上旬頃の話です。少し作者による捏造設定があります。

オリキャラ設定

六車 アズマ

外見年齢：19〜20歳

身長：161cm

六車拳西の妹。本作の主役にしてヒロイン。

現・八番隊四席

（入隊時は九番隊二十席
席）

数年後 六席に昇格

八番隊四

兄譲りの銀髪で長さは肩ほど。

目つきの悪さも兄譲り。

だが、筋肉質ではなく、細身。

斬魄刀は『御先狐』ミサキ

解号は『跳ねろ』

形状は柄の部分に九個の銀の鈴が付いている。

拳西の斬魄刀とは違い、完全なる幻術・鬼道系の斬魄刀。

卍解名は『羅刹御先狐』ロウシャミサキ

形状は錫杖。：映画版Bleach『MEMORIES OF

BODY』に出てきた『弥勒丸』に似ている

が、錫杖に大きな銀の鈴が二つついている。

斬魄刀の本体は、銀色の狐。

以前は活発で、やや短気な明るい性格だったが、拳西失踪後から影が見え隠れするようになり…

それから十年後、敬愛していた先輩であり、鬼道系の斬魄刀の使いこなし方を指導してくれた、

本作のオリキャラ…：五月雨 霖の反逆。

霖を自身の手で始末することになってから、性格がガラリと変わる。

大事なものを失って悲しむのはもう嫌なので、

任務・修行一筋で人との関わりを最小限にすることで、もう大事なものをつくらないようにしている。

そのため、相手に暗くて冷たい印象を与えてしまう。

（ちなみに、京楽が八番隊にアズマを引き抜いたのは、

そんなアズマを元のアズマに戻すためだが、あまり上手くいっていない。）

なお、キレた時のみ、元の性格に戻る。

友人…もとい、修行仲間は碎蜂。（…彼女の修行相手に勤まるのがアズマだけだからというのと、

以前、夜一に修行を一緒につけてもらったよしみで）

今回、尸魂界管轄外の地区…ギリシャの聖域周辺で虚が現れたため、その討伐&調査に派遣される。

本名は六車東アスマですが、読みにくいので、カタカナ表記でアズマと今後は書きます。

オリキャラ設定（後書き）

はい、以上オリキャラ設定でした。

あとは…三人、オリキャラ登場予定です。

誤字脱字・不明点がありましたら、知らせてくださると、うれしいです！

第一話：双極の丘で…（前書き）

はじめまして。九条と申します。

「聖域の死神」…ですが、死の神・タナトスとは関係ありません。
不定期連載ですが、よろしく願いします！

第一話：双極の丘で…

心はいらない。

自分は死神だから…

尸魂界の…現世の秩序を守る…

この手を血で染めることを恐れず…

秩序を乱す存在を淡々と消す…

それが…真の死神…

第一話：双極の丘で…

双極の丘に立ち、門の準備が出来るまで、ぼんやりと瀟霊廷を眺めていた。

こうしてみると、ところどころに灯る松明の火が、星が輝いているようにみえてくる。

「もう行くのかい？」

振り返るとそこにいたのは二人の人物。

一人は女物の羽織のはおり、編み笠を被った男…八番隊長・京楽春水。

もう一人はメガネをかけた細身の女性：同隊副隊長・伊勢七緒。

「それしか持っていないの？長期任務なんだよ？」

必要最小限の物しか入っていないペタンコに近い荷を見た京楽は、編み笠をくいとあげた。

着替えの死覇装と現世の服一着・夜一から貰った携帯型義骸・筆記具・高等鬼道書・非常食：
それくらいしか入っていなかった。

「多く持って行っても任務の邪魔ですから……。」

「……まあ……アズマちゃんがいいならいいんだけどね。」

「六車四席！開門準備出来ました。」

鬼道衆が叫ぶ。

京楽の傍らにいた七緒がメガネをあげた。

「気を付けてくださいね、六車四席。」

「……では、行ってまいります。伊勢副隊長、京楽隊長。」

一礼すると、穿界門の内側からあふれる光に一步踏み出した。

「行っちゃったね。」

京楽はふう……と息を吐いた。

「そついえば、なぜ彼女は隊長に就任しないのでしょうか？」

七緒は以前から思っていたことを口にした。

八番隊四席・六車東^{むくろのまあずま}…。

十番隊長の日番谷とはまた一味違う少し癖のある銀髪を肩まで伸ばしている。

そして実力はあきらかに同隊三席の円乗寺よりも…副隊長である七緒よりも…

はるかに高い霊力の持ち主だ。

隊長格とも同等…いやそれ以上に渡り合えるかもしれない。

「それに卍解を習得している彼女がなぜ…?」

「僕はね、あやういつて思うんだよ。」

「あやうい?しかし…彼女の業務実績は良好ですし…」

「それがあやういんだよ。」

もうとつくに閉まった門をながめている京楽。

「あの子は本当の自分を押し殺しているんだよ。」

僕の隊に引き抜いたのも…少しでもそれが変わるようになんだけれどね…

なかなか上手くいかないものだよ。

…今回の任務で元のあの子に戻れるといいんだけどね。」

京楽は普段のヘラヘラした顔ではなく、思慮深く…優しさがにじみ出るような顔をしていた。

「頼んだよ…戦女神さん。」

第一話・双極の丘で…（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました！

第二話：来訪者（前書き）

二話目です。黄金のお兄さん達が出てきます。
この回は彼らの視点です。

それでは始めます。

第二話：来訪者

第二話：来訪者

ギリシャ・聖域十二宮のさらに上に位置する教皇の間・・・

ここにズラリと勢ぞろいする十二人の黄金に輝く鎧をまとった青年達
・・・黄金聖闘士・・・

その前に立つのは白い法衣をまとった麻呂眉の男と、とても十三歳には見えない少女。

聖域を統べる教皇シオンと地上を統べる女神・アテナ：通称・城戸沙織・・・

全員そろっているのを確かめると、沙織は口を開いた。

「先日より、アテネ郊外を中心に謎の怪物が現れているのを、皆さんはご存知ですよね？」

「もちろんです。なんでも怪物の存在を見えるものと見えないものがあるとか・・・」

「それで討伐にでた雑兵が死亡・・・青銅聖闘士の誰かさんが大怪我したんだよな。」

「・・・獅子の蛮だろ・・・聖闘士の名前くらい覚えとけデスマスク。」

「そういうサガだつて偽教皇時代、側近の顔と名前が一致してなかったじゃねえか」

「うう・・・そ・・・それはそれだ。」

「なさけないのお・・・ワシでさえ顔くらいは覚えておったぞ。」

「ゴホン・・・よろしいですか？」

沙織が咳払いをするとシーンとなる教皇の間・・・

「その怪物の正体が蛮のおかげで特定できました。

『ホロウ』というそうです。」

聞いたことのない怪物名・・・ざわつく十二人。

「わかりましたアテナ！このアイオロスがそのホロウを倒して参ります！」

一歩前に出てひざまずく射手座のアイオロス。

しかし沙織は申し訳なさそうに笑った。

「すみませんアイオロス。あなたの好意は嬉しいのですが・・・

もう専門の方をお呼びしてしまったのです。」

「アテナ！！我々では力不足なのですか！！！」

アイオロスの弟の獅子座のアイオリアが前に出る。

「そんなわけありませんよ。」

ただ・・・ホロウは普段は絶対にこの地に出てこない怪物なので、専門の方をお呼びして、原因究明してもらわなければならないのです。」

「それで・・・いつくるのですか？」

「そろそろお付きになる頃なのですが・・・」

時計を確認する沙織。

その時だった。教皇の間に日本の『障子』のようなものが突如出現したのだ。

「危ない！お下がりくださいアテナ！」

山羊座のシユラと双子座のサガが彼女を守るように前に出た。他の者の警戒心を高める。

障子が開き、白い光があふれだす・・・

そこから現れたのは黒い蝶と・・・19〜20歳位で細身の女だった。

黒い着物をまとい、腰には日本刀といったサムライのような格好だったが

サムライのようにちょんまげ黒髪ではなく、肩程の長さの銀髪はおろされて風にそよいでいた。

「・・・ここが聖域・・・か？」

「その通りですよ。」

沙織がほほ笑んだ。・・・が、女は無表情のままだった。

「八番隊四席・六車アズマだ。」

「アズマさんですね。はじめまして。私、アテナと申します。・・・城戸沙織でも結構ですよ。」

「・・・そうか・・・」

「アテナ！こんな女に任せるなどどうかしています。」

「そうです！俺より年下じゃないですか！」

シユラと蠍座のミロが思わず口にする。

・・・が、アズマは無表情のままだった。

「ホロウなんて俺のスカートレットニードルで・・・」

「虚はこの斬魄刀でしか倒してはならない。」

アズマがミロを見て言った。・・・どこことなく冷たい感じで・・・

「へっ！でもお前なんか任せられるか！」

「ミロ！！いい加減にきなさい！！！」

沙織が叱る。ミロは苦虫を潰したような顔を見ると黙り込んだ。

「・・・いいですか？アズマさんは、この仕事が終わるまで、教皇の間に泊まってもらいます。」

つまり客人です！・・・失礼なマネはくれぐれもしないでください。

「

「・・・」

ペコリと少し頭を下げるアズマ。・・・が、それっきりだった。

自分らより明らかに年下の素性がはつきりしない冷徹女

・・・そんな奴を客人扱いしないといけないなんて・・・

黄金聖闘士達の印象は最悪に近いアズマだった。

第三話・山羊座の聖闘士（前書き）

三日坊主にならなくてよかった…。

第三話：山羊座の聖闘士

第三話：山羊座の聖闘士

・・・ここは不思議なところだ・・・。

教皇の間の屋根の上に寝そべっていたアズマは、手のひらを太陽にすかしてみた。

その手をゆつくりグーパーさせる。

・・・明らかに今の自分は実体化・・・つまり肉体をもっていた。

義骸：つまり仮の肉体に入っていないのに肉体をもっているということとは、

おそらく聖域全体に張られているという『アテナの結界』の効果・・・
・としか考えられない。

「六車アズマ。」

自分と呼ぶ声が聞こえる。起き上がると、少し離れたところに人がいた。

・・・確か黄金聖闘士の誰かだった気がする・・・。

あの後、一人ひとり紹介してもらったのだが、まだ顔と名が一致しない。

・・・この黒髪の男の名も思い出せない・・・。

昨日、ヤギみたいなツノのついたヘッドギアをつけていた気がするが・・・

「山羊座のシユラだ。・・・ついて来い、アテナ様がお呼びだ。」

それだけ言うとシユラは歩き始めた。

…そうか…山羊座か…

『私も山羊座！』

なんてことは言わないで、アズマは黙ってついて行った。

…続く沈黙…

先にこの重い沈黙を破ったのはシユラだった。

「あそこで何をしていた？」

「あんたには関係ない。」

「…そうか。」

そうか…で終わらせるのか！？とツツコミたくなった。

…まあ、深く突っ込まれるのも返答に困るが…とくに何をしていたわけではない。

指令が来ないからといって修行をする気にはなれず…ただ一人でボンヤリしていたかったのだ。

…こちらも気になったことを聞いてみることにする。

「…そういえば、あんたは何歳なんだ？」

シユラは一瞬、眉をひそめ、ややあつてから口を開いた。

「23だ。」

思ったより若かった。…他の聖闘士もきつと同じくらいなのだろっ。

「そうか」

とだけかえしておいた。

親しくする必要はない。ただ気になったから聞いたまでだ。

・・・この連中の戦闘能力は隊長格と同等かそれ以上・・・

ちよつとした仕草・・・例えば歩き方一つとっても、そのことが見て取れた。

もつとも、人間なので、実戦経験を比べると、聖闘士の方がはるかに隊長格より下だが・・・

だが、たった二十年の修行でこれほどまでの強さを得られるとは・・・

・
コスモというものは凄いものかもしれない・・・と頭の片隅で思った。

「お前はいくつだ？」

「……………女に歳は聞くものじゃない。」

まさか実年齢は言えない。

軽く二百歳は越えているなんて…言えない。

『死神は人間とは比べものにならないくらい長命だ。』

そう言えば簡単に済む。

・・・だが、何故だか知らないが、ここでは『人間』ということになっっている。

一応、依頼人の沙織は『尸魂界』や『死神』のことは知っているみたいだ。

が、ほかのメンバーは知らないらしい。

なんでも、『死神』といったら『タナトス』とかいう、別の人を連想させられるのだからなんとか…

他に話すことはなかった。

シユラは元々あまりしゃべるほうではないのだろう。

こちらもペチャクチャしゃべる気分ではないので丁度よかった…かもしれない。

続く沈黙の中、二人はバラの香る宮・・・双魚宮へ足を踏み入れた。

第三話・山羊座の聖闘士（後書き）

読んでくださりありがとうございます！

次回は双魚宮：すこしずつ主人公の心を溶かしていくつもりです。

第三話・バラ園の茶会（前書き）

この回はアテナ…沙織ちゃん目線です。

第三話：バラ園の茶会

「茶会・・・ですか？」

アズマは無表情のままだった。・・・それを見て心の中で舌打ちをする沙織・・・

アズマと比較的似たような境遇のシユラを使いに出したのが間違이었다のかもしれない。

もつと口のまわる蟹や蠍を使えばよかった・・・。

「せつかくですが私は・・・」

「さあさあ、こちらへどうぞー!!」

強引にアズマの腕を引っ張る沙織。ちよつと困った顔をするアズマ。

(アテナの名にかけて・・・きっと元のアズマさんに戻してみせますわ！)

第三話：バラ園の茶会

十二宮最後の宮・・・双魚宮・・・

『この宮の名物はバラ!』と断言できるほどバラ香る宮・・・
その中でも無害なバラ園の東屋に何人も人が集まっていた。

主催者のアテナこと沙織と宮の主、魚座のアフロディーテ。

蟹座のデスマスク・獅子座のアイオリア・天秤座の童虎・山羊座のシユラ

・・・つまり本日非番の黄金聖闘士達。

それから…先ほどから黙って座っているアズマだった。

「アズマちゃん、自由に食べなよ。」

アフロディーテがにっこり笑ってクッキーを進める。

「これは・・・？」

クッキーをしげしげと眺めるアズマ。

「はあ！？どうひっくり返してもクッキーだろうが！」

デスマスクが呆れ声をだした。

「一種の甘味か？」

「甘味？・・・ああ、菓子のことか。・・・まあ、そんなかんじだな。」

アイオリアが答えると、アズマがクッキーを一つ、口に含んだ。

…モグモグ…

「…甘い…」

「甘いのはお嫌いですか？」

沙織が心配そうな顔をする。

アズマは首を横に振った。

「そうですか…ではお茶もどうぞ。」

「これ…ですよね…」

ゴクリと唾をのむアズマ。

そして、覚悟を決めたような表情でカップに口をつけた。

「う…うまい!？」

心底驚いたような顔をするアズマ。

「これは…西洋の茶なのだろ？」

「まあ…東洋から見たらそうだね。」

私のお手製のローズティーだよ。」

「ローズ…だからバラの香りがするのか…。」

雀部のよりずつとおいしい…。」

「ササキベってだれだ？」

アイオリアがたずねる。

さつきよりずつと表情が柔らかくなったアズマが遠い目をした。

「一番隊の副隊長で、趣味がリーフとかいう草の栽培で…

以前、お兄ちゃんと一緒に紅茶というのを飲ませてもらったことが

あったが…。」

思い出したくもない味で…。」口がしびれるかと…。」

「アズマには兄がいるのか？」

童虎が眉をしかめると、アズマはハツとした顔になり…。」
たちまち元の無表情になってしまった。

「…まあるな。」

「…すみません、しゃべりすぎてしまいました。」

「いやいや、謝る必要ないんじゃないよ。」

ふむう…兄か…。」

何か思い出そうとするかのように考え込む童虎。

「どうしましたか老師？」

「いや…六車ってどこかで聞いた気が…」

ジュジュジュ…ジュジュジュ…

携帯の着信音のようなものが鳴り響いた。

アズマが携帯のようなものをいそいで開く。

「申し訳ありません。上司からの電話なので…少し席をたたせてもらいます。」

「どうぞ。」

一礼すると立ち上がり、東屋の外に出るアズマ。

「もしもし…」

「聞こえる？アズマンー!!」

幼女の声が漏れて聞こえてくる。

「なあ…あいつ、『上司からの電話』って言ってたよな？」

「ああ…」

「き…きつとアテナみたいに若い上司なのかもしれないぞ！」

「いや…それにしても幼すぎな気が…」

「というよりアズマンって…」

ひそひそと話す黄金たち。

「草鹿副隊長…一体なぜ…」

「あのね！そっちの珍しいお菓子たくさん買ってきてね！
命令だよアズマン！」

「あのですね・・・」

「じゃあ頼んだよ！」

「ちょ…切るんじゃないよチビが！！」

どうやら一方的に切られたらしい。

切れかかっている…というより切れているアズマ。

「すまない…アフロディーテといたか？」

すまないがクツキーとやらのレシピを教えてくださいませんか？」

「別にかまわないよ。」

…さっきの女の子のため？」

「まあな。」

相当イライラしているのだろう。

どさっと座るアズマ。

（よかつた〜元のアズマに戻ったみたいですね。）

喜ぶアテナだったが・・・

アズマはしばらくしてイライラが収まると、また元の無表情に戻ってしまっていたりする・・・。

第三話：バラ園の茶会（後書き）

〈死神図鑑ゴールデン聖域〉

プロローグ

コン「よお元気がてめえら！？みんなのアイドル、コン様だ！！
えっ？なんで俺がでてきたのかって？
気にするな！…まったく…考えてみやがれ！

もうJC25巻から本編で一度も登場してない俺の身にもなってみ
やがれ！

もう40巻以上も出てないんだぜ！

…ってことで少しでも出番を増やすために、ここに來たってわけだ。

次回から、〈死神図鑑ゴールデン聖域〉ってことで

十二宮を順々に訪問していくぜ！

両目見開いて待ってるよ！！」

第五話：修練場

「おゝい、アズマ!!」

にこやかに近づいてくるアイオロス。
少しアズマは顔をしかめた。

「何の用だ？」

「ちよつと付き合ってくれないか？」

「・・・はあ!?!」

間の抜けた声をだしてしまった。

「だって…相手いないんだろ？」

「だ…だからって…順序つてもんが・・・」

「さあ行くぞアズマ!!」

むりやり腕を引っ張られ…強制連行された・・・。

第四話：修練場

「・・・ここは？」

「黄金聖闘士の修練場さ。」

連れてこられたのは岩場に囲まれた殺風景な修練場・・・
そこには数人の黄金聖闘士がいた。

「おっ!?!お客人か。」

「ミロ！！失礼だぞ！！」

「その通りだろカミュ。」

「まあ・・・確かにそうだが・・・」

水瓶座のカミュが言葉につまる。

「もう一度紹介しなすと、俺は射手座のアイオロス。こっちは弟のアイオリア。」

んで、蠍座のミロに水瓶座のカミュと山羊座のシユラ。いや〜よかった〜人数足りなくて困ってたんだよ。」

にこやかに笑うアイオロス。

「...どうやら『修行に付き合え』ということらしい...」。

「まあ...しかたないな。」

「そうかそうか！じゃあ、シユラと頼む！」

「な！？待てアイオロス！俺はお前と組み手をしよう...」

「ん？だって俺は前々からリアと約束してたし...」

「いや...だが...」

「頼む！！今日は無理だが今度相手してやるから！」

「.....わかった」

やり取りを終えるとシユラとアズマは向き合った。

「刀は使わないのか？」

眉をあげるシユラ。：岩に斬魄刀を立て掛けるアズマ

「そっちもクロスっていう鎧着てないから...不公平だろ？」

「だが...お前の小宇宙と俺の小宇宙は違いすぎるぞ？」

霊力とコスモは違う。…ほとんどコスモに目覚めていないアズマとシユラを比較したら月とスッポンだ。

「問題ない。実戦の差でカバーする。」

シユラの十倍は生きているアズマ。

…もちろんシユラたちはそのことを知らない…

「ばっかじゃねえ？あんたよりシユラのほうが死線何度も踏んでるつての！」

ミロが馬鹿にしたように笑った。…無視するアズマ。

「背を地についたら負け…というのはどうだ？」

「…単純でいいな。…始めるぞ…」

二人の戦いが幕を開けた。

第五話：修練場（後書き）

（死神図鑑ゴールデン聖域）

一回目：白羊宮

コン「よお元気がてめえら！みんなのアイドル、コン様だ！
第一回目の今日はこいつだ！

『聖域の主夫・牡羊座のムウ』！」

ムウ「どうぞよろしくお願いします

…というより…主夫ってなんですか？」

コン「ん？だって子育てしてるじゃねえか」

ムウ「弟子の育成と言って欲しいですね。

…ところで…何を聞きたいんですか？」

コン「そうだな～まずはこれだな。

その眉毛はシオン（ムウの師匠であり教皇）
に無理やりされたのか？」

ムウ「これですか？これはジャミールの一族の伝統です。

（既読の方はわかるとは思います、女も男も老人もこの眉毛です。

」

コン「いやじゃねえのか？その麻呂眉…」

プチ（何か切れる音）

ムウ「まさか！！気に入っていますよ。

…そういえば…この間、ある新技を使えるようになったんですが…」

コン「なんだなんだ！？ちょっと見せてくれよ！！」

ムウ「（ニコリ）行きますよ…」

シオン様直伝！『うろたえるな小僧！！！！』」

コン「うぎゃあああ！！！！」

コンは金牛宮まで空中の旅を楽しむことになった…

（続く）

第六話：見切られた瞬歩

第六話：見切られた瞬歩

対峙しただけでわかる・・・

相手はクロスという鎧をまとっていないが

『アズマには勝てる』

と確信している…という自信が…

(…先手必勝かも…)

経験の差を見せてやる…という意気込みで瞬歩を使い背後をとる

…のだが…

「遅い！」

「!?!」

シュラがすぐさま…というより瞬歩で現れたのとはほぼ同時に振り返って手刀を放ったのだ。

…かろうじてダメージを直接負うのは避けられた…

だが、死覇装の袖に鋭利な刃物で傷つけられたような裂け目が出ていた。

「…ただの手刀ではないみたいだな。」

「ああ…これはエクスカリバー。」

岩をも切り裂く聖剣だ。」

「…もう一ついいか？」

なぜ瞬歩を見切った？」

…上位席官でも扱うのが困難な高速歩行・瞬歩…
霊圧を封印していたら副隊長でも使用をためらう程、
霊力を消費する代わりに
相当な速度を得ることができると言われる技だ。
シユラはニヤッと笑う。

「お前たちの間では速いのかも知れないが…
俺から見たら、その歩行術は遅いくらいだ。」

「…遅い…だと？」

「まあ…お前の歩行も青銅・白銀聖闘士相手になら勝っているがな。
だが…黄金聖闘士の速度…光速にはかなわん。」
「…そういうことか…」

少し思案顔になるアズマ…
瞬歩は限りなく光速に近い高速歩行術…
が、近いだけで、本当の光速にはかなわない。

(アレを使うしかないか…)
心の中で舌打ちをする。

…あまり使いたくない奥の手だが、使って互角のスピードが出せる
のなら…

ここで負ける気はさらさらなかった。
負けたらいけない…死神としてのプライドが傷つく…
(アレするなら隙をつくらないと…)

紙一重でエクスカリバーを避け続けるアズマ。

「！」
背中が岩にぶつかった。

三方が岩…となったら…

一気に地面を蹴って空高くへ跳ね上がるアズマ。

「もらった!!」

シユラが手刀を宙に跳ね上がったアズマに向けて放つ。
空中にいれば身動き取れない…はずだが…

「甘いな」

まるでそこに足場があるかのように宙を移動する。

一瞬、驚きの表情がシユラの顔に浮かんだのを見逃すアズマではな
かった。

「いまだ…瞬間!」

アズマの霊圧が一気に跳ね上がる。

高濃度に圧縮した鬼道がアズマの両肩と背を包み…

両肩と背の布がはじけてなくなる

「いくぞ」

霊子の足場を強く蹴り一気にシユラに接近する。

「速度が格段に上がった!？」

手刀を振り下ろそうとするシユラ…だが

「縛道の一・塞」

急に身体が動かなくなる。

「終わりだ!」

「ぐはあ!」

アズマの拳がシユラをとらえる。

聖衣を装着していないシユラは勢いよく地面に背を叩きつけられた。

第六話：見切られた瞬歩（後書き）

（死神図鑑ゴールデン領域）

二回目・金牛宮

コン「うう…ずいぶん遠くまで飛ばされたな…」
？「大丈夫か？」

コン「ん…てめえは…まさか！！」
『十二宮一の常識人+かませ犬
牡牛座のアルデバラン』！？

バラン「その通りだ。よろしくなコン。」

コン「（かませ犬って言われたこと怒らないのか？）
おう！よろしくなアルデバラン！」

バラン「ところで…空から降ってきたが…」

コン「ああ…実はムウの奴が…（説明中）」

バラン「…そうか…災難だったな…
だからボロボロなのか…」

コン「ん？…ああ！！コン様パーフェクト・ボディーが！！」

バラン「身体から綿が大量に出てるな…
よし、俺が直してやるう！」

コン「えっ？てめえ…洋裁できるのか？」

balan「もちろんだ。たまにぬいぐるみとか作るぞ。

…ほれ、元通りだ」

コン「！？ホントだ！はやしし完璧だ！

ありがとな、アルデ balan「！！」

balan「おやすい御用だ。」

…アルデ balanの意外な趣味が判明したところで、

コンは次の宮へと登って行った。

…続く…

第七話：69

第七話：69

「負けだ…」

すぐに立ち上がるシユラ。アズマも瞬間を解いた…が…

「くっ……」

視界がぐらりと揺れる。思わず片膝をついてしまった。

…霊力を使いすぎたようだ…

元々この技は、修行仲間の碎蜂と一緒に編み出した技で、完成度はアズマのほうが高い……

のだが、碎蜂のより…自身の正解よりはるかに霊力を消費してしま
う。

つまり…最後の奥の手ということだ。

(やっぱり斬魄刀ありにすりゃあよかった)

頭の片隅で、少し後悔するアズマ。

「大丈夫か？」

シユラが手を伸ばしてきた。

「…問題ない…」

少しふらつきそうになったが、平然と立ち上がるアズマ。

「す…すげえなアズマ。」

馬鹿にするように見ていたはずのミロが感嘆している。

「シユラは聖域で上位を争う体術の使い手だぞ。」

カミュも少し目を大きくしている。

「空を歩いているように見えたが…あれはいつたい？」
アイオリアが尋ねてきた。

「……霊子……目に見えない足場をつくっただけだ。」
「目に見えない足場かあ…なんかすごいな!!」
よしよしとアイオロスがアズマの頭をなでる。

…絶対年下にみられているな…とかんじた。
こんなことされるのは何年振りだろうか…

「……お前……強いな。」

シユラが手を伸ばしてきた。

「……お前も強いな。」

その手を握るアズマ。

アズマは相変らずの無表情だったが、シユラは少し口元が笑っているように見えた…が

その表情は『おや?』という表情に変わった。

「その腕の入れ墨……蟹座のマークか？」

「蟹座？」

シユラの視線をたどると…視線は瞬間のせいであらわになった右腕に刻まれた入れ墨に、そそがれていた。

「あっ！ほんとだ。アズマって蟹座生まれなのか？」

ミロがさつきとはうってかわった態度で聞いてくる。

…まあ…認められた…というわけなのだろうか…態度変わりすぎだ…

「蟹座…？これは69だ。数字の69。」

「69？」

「…そういえば69を90度回転させたら蟹のマークに似ているからな。」

でもなんで69？」

アイオロスが尋ねてきた。……さて…どこまで話しているのか……

『関係ない』の一言で済ましてしまおうか…

ピピピ…

伝令神機が鳴り響く。懐からあわてて取り出して内容を確認する。表情がさらに引き締まるアズマ。

「来たか…すまん、虚が現れたみたいだから行く。」

「大丈夫か？手合せの後で疲れているのでは…？」

アイオリアが心配そうに尋ねた。

「問題ない。…大きさから感ずるに……雑魚だ。」

岩に立てかけてあつた斬魄刀を手に取ると

アズマは一気に地面を蹴った。

…自身の任務を果たすために…

第七話：69（後書き）

〈死神図鑑ゴールデン聖域〉

三回目・双児宮？

コン「はあ…はあ…もうだめだ……」

ぺたんと座り込むコン

コン「ったく…どこまで歩いてても出口が見えてこねえ……

…はっ！まさか！これが噂の双児宮の迷宮か！？」

双児宮は小宇宙をつかうことにより、迷宮化することができるのである。

コン「おい！『13年間偽教皇として皆を騙し続けた双子座のサガ』

！！

さっさと解きやがれ！！」

……しかしシーンとしたまま……

コン「無視スナナ……！！

ああ…いいぜ。そっちがそのつもりなら、ここに座り込んで解くまで出ていかねえからな！」

ペタン……

第八話：第六十刃・来襲（前書き）

この回の本編に聖闘士は出てきません。

第八話：第六十刃・来襲

第八話：第6十刃・来襲

結界を抜けたとき、一気に身体が軽くなる。

…どうやら霊体にもどったようだ。

グオオオン

虚の声が聞こえる。

…そこにいたのは白い仮面をつけた、いかにも怪物面のやつ…
明らかにザコという感じだった。
これなら始解しなくてもいける。

すらりと斬魄刀を引き抜くと、そのまま果実を切るようにスッパツと一刀両断した。

「…こんな程度…か。」

鞘に納めようとした時だった。

「てめえが六車アズマか？」

空から声が聞こえる。…それと共に巨大な霊圧が現れた。

あわてて見上げるとそこにいたのは、水浅葱色の髪をした人

…いや…右あごの虚の仮面のなごり…それに腹部に空いた大きな空洞が、

それを『人ならざる者』ということをあらわしている。

「お前は!？」

「俺は第六十刃^{セスタ・エスパード}・グリムジョー・ジャガージャック。」

「十刃^{アランカル}…破面だと!？」

鞘に戻した斬魄刀をもう一度引き抜いた。

…まったく…今日は驚かされることが多い…

聖闘士とも戦った上に、破面…それも十刃とも戦うことになるなんて…

仮面をとる事によって、死神に近づいた虚…それが破面…そのトッ
プ十名が十刃…

先の戦いで全滅したと聞いていたが…まさか生き残りがいたとは…

「跳ねろ…御先狐^{ミサキ}」

斬魄刀…御先狐を開放するアズマ。

斬魄刀は一瞬光に包まれ、鈴が9個ついた形状に変化する。

「なぜここに現れたか…」

なんで私の名をしっているか…

吐いてもらうぞ十刃…」

「教えて欲しけりや…」

俺を楽しませてくれよ…死神!」

にやりと笑うグリムジョー。

…彼は斬魄刀を抜こうとしない…

アズマの霊力はあと少ししかなかった。

少なくとも正解をする程の余裕はない。

さっきの瞬間で霊力を消費しすぎてしまっていたからだ。

…御先狐の能力に頼るしかない…

覚悟を決めたアズマは、斬魄刀・御先狐をグリムジョーに向けた。

第八話：第六十刃・来襲（後書き）

〔死神図鑑ゴールデン聖域〕

四回目：双児宮？

現れたのは…長いボサボサ髪の聖衣を着ていない男…

コン「やつと来たかサガ！」

カノン「カノンだ。あの愚兄と一緒にするな！」

どうやら現れたのはサガの弟のカノンだったようだ。

コン「…ああ…『神をたぶらかして最後はカモメ眉と心中した男』」

カノン「その紹介はやめる。」

コン「じゃあ…『兄を墮落させて悪事の限りを尽くした男』でいいか？」

カノン「だ〜から〜！〜！なんでそんなに酷い紹介文なんだよ？」

コン「事実じゃねえか。」

カノン「ああもう！！こんな事するのは、だから嫌だったんだよ！」

コン「…なんか…やけにイライラしてねえか？」

カノン「ふん…」

あの愚兄…つまりサガの奴が

『すまんカノン。アイオロスの執務監視をしないといけないから客人の相手^{コン}ができない。』

代わりに相手してやってくれ。

一応、双子座の聖闘士予備だろ？』

とか言ってきたんだ。

だから、サガが帰ってくるまでお前をこの双児宮の迷宮に閉じ込めてサガに相手を押し付けようとしたのに…お前が騒ぐから面倒になっただじゃないか！！」

コン「イライラしてんのは俺のせいだよ！

サガのせいっていうか…アイオロスが日頃から執務やってればよかつた話じゃあねえか。」

カノン「…あの男に執務をやらせようとするのがおかしいのだ。

あの男には脳みそというものがないんだからな。」

コン「…ひどい言われようだなアイオロス…

でも…そんな監視なんて他の奴に任せれば…」

カノン「他の奴ではアイオロスを抑えられない。

あの脳みそ筋肉にかなうのはサガしかいないのだ。」

はあ…とため息をつくカノン。

カノン「聞いてくれよ…サガがさあ…」

コン「……………」

そろそろ巨蟹宮に行きたいなあ…

と思いつつ、エンドレスで続くカノンの愚痴を聞くコンだった。

〜続く〜

第九話：第六十刃・来襲？

第九話：第六十刃・来襲？

「エスパードって…なんだカミュ？」

「俺に聞くなミロ。」

いきなり指令がきて、修練場から出て行ったアズマを追いかけてきた一行が見たのは

白い仮面をつけた化け物を一刀両断するアズマの姿…

そして…空に浮かぶ『セスタ・エスパード第六十刃・グリムジョー』と名乗る謎の人物だった。

「Espada…スペイン語で『剣』という意味だ。」

シュラがつぶやいた。

へえーとうなずく一同。

「そっか、シュラはスペイン人だからな。」

…だが…あの男は確かに剣を持つてはいるが…」

「なんでエスパードなんだ？」

アイオリアとアイオロスが悩む。

「跳ねろ…ミサキ御先狐」

刀を引き抜いたアズマがつぶやく。

すると刀は一瞬光に包まれ、次の瞬間、刀に9個の鈴がついていた。

「なぜここに現れたか…
なんで私の名をしっているか…
吐いてもらうぞ十刃…」
「教えて欲しけりや…
俺を楽しませてくれよ…死神！」

「……」「死神!?!」「……」

聖闘士一同の声がはもってしまった。

「アズマが…死神なのか？」

「ん?…てめえら…俺たちが見えてるのか？」

グリムジョーが見おろしてきた。

「見えてるも何も…まさか…ふつうは見えないのか？」

カミュが目を見開く。

「…どういうことだアズマ?お前はホロウとやらを退治する専門家
ではなかったのか？」

「ハッハッハ!!それしか伝えてねえのかよ!!」

アズマを馬鹿にするように笑うグリムジョー。
アズマは眉間にしわを寄せる。

「…そいつらには関係のないことだ。」

「んじゃあ代わりに俺が教えてやるよ人間。」

こいつはこの世と尸魂界…つまりあの世を守る死神…簡単に言えば

幽霊の一種だ。

しかもこいつはその死神の中でも冷徹中の冷徹者。

なにせ自分の敬愛していた先輩死神を躊躇なく殺せるんだからな。」

「敬愛していた先輩を……」

シユラはアズマを見た。……相変わらず無表情だったが……先ほどより冷たい感じがした。

「……任務は絶対……それが護挺十三隊の掟だ。

……それよりも……なぜそこまで知っている？いい加減はかせてやる。」

チリン……と鈴を鳴らすアズマ。瞬間に姿が空に溶けて見えなくなった。

「消えた？」

ミロがあたりを見渡す。

が、どこにもいない。さらに浮かんでいるのはグリムジョーただ一人。

チリン……

グリムジョーの後ろのほうから鈴の音が聞こえる。

アズマの刀についていた鈴の音が……

ちらりと後ろを振り向くグリムジョー……その時、

「終わりだ。」

鈴の音が聞こえたところとは逆方向……

つまりグリムジョーの正面にアズマが現れ刀を振り上げ腕を切り落

とそうとしたが…

「ひっかかるかよ。」

「ぐはぁ！..！」

まるでよんでいたかのようにグリムジョーはニタリと口をゆがませ、拳を放つ。

腹にまともにくらってしまい、アズマは血を吐き…落下していった。

第九話：第六十刃・来襲？（後書き）

（死神図鑑ゴールデン聖域）

五回目：双児宮？

カノン「…で、そのときサガがな…」

コン「…あのさあ…わりいけどそろそろいいか？
まじで次の宮に行きてえんだけど。」

カノン「ん？心配ない。」

次の宮は巨蟹宮。…あの蟹の所だから少しぐらい行くのが遅くても特に問題は…」

コン「そういう問題じゃねえんだよ！

きつと読者の皆さんは

『まだ双子のところかよ〜おっせえなあ〜飽きた』
とか

『私は双子よりアイオリアやカミュが好きなんだ。
だから早く進め』

とか

『ムウや牛は一回だったのに双子…しかもカノンだけずるい！』
とか思ってるんだよ！」

カノン「…あのなあ、俺も好きでお前をここに拘束してるわけじゃないんだ。

ただ『サガが傲慢で露出魔でアンポンタン』ということを知ってほしくてな…」

サガ「…ほう…どこが傲慢で露出魔でアンポンタンなんだ？」

カノン「そりゃあ、数えきれねえけど…たとえば

『すぐ真っ裸になる』『裸で聖衣着用する』『風呂入りたいたがために
教皇の間及び十二宮に電気を通す』『ジャグジーに入りたくて、
資金集めのため経費を横領』『教皇になれなかったから妖怪爺を殺
す』『青銅に負ける』『強がっているくせに、すぐ鬱になる』『(…
…まあ黒の方だけど)暇つぶしに雑兵を殺す』『白は執務をこなす
が黒は蟹・山羊・魚に任せっぱなし』『無罪の弟を自分の腹いせで
スニオン岬に幽閉』『あとは…』

サガ「…ほう…まだあるのか？」

カノン「げえ！？サガ！？」

サガ「…しかも『自分の腹いせでカノンを幽閉』？」

そもそもお前が、机の上に置きっぱなしにしておいた私のプリンを
食べなければ

よかったことじゃないか。」

コン「…そんな理由で幽閉されたのか…」

カノン「そ…そんな呆れた目で見んな！

そもそも元を正せば、あのプリンを買ってきたのは俺じゃないか。
買ってきた俺が食べて何が悪い？」

サガ「しかし、買って来いと頼んだのは私だ。

…それに傲慢とは

第十話：第六十刃・来襲　？（前書き）

十話いきました!!

それから第一章が今回で終了。

次回の舞台はアノ町です。

第十話：第六十刃・来襲？

第十話：第六十刃・来襲？

何が起こったかわからなかった。
いきなり重い拳を腹に受けた。

そして…態勢を整えられないまま…地面に向かって…

ドサツ

何かに受け止められた。自分を見下ろしているのは黒髪の聖闘士…

「シユラ？」

「…大丈夫か…？」

「…問題ない。というより助けを求めた覚えはない。」

自分を抱えているシユラの腕から抜けるアズマ。

「アズマ！！！」

ミロたちがかけてくる。

「なあ、お前…ほんとに幽霊なのか？」

アイオリアが尋ねてくる。

「…嘘ではないな。」

「へえ〜そうなのか。」

俺さあ幽霊って巨蟹宮の趣味の悪い死デスマスクに顔みたいなのしか知らなか

つたぜ。」

「ミロ…失礼だぞ。」

「…まあ、関係ない。幽霊でも死神でもアズマは俺たちの仲間だろ？」

アイオロスがほほ笑んだ。一瞬ぽかん…としてしまった。

「仲間？」

「違うのか？どこかの組織の一員だが、今は聖域の一員だろ？」

「それに死の神『タナトス』の手先でもないみたいだしな」

「おいおい、そんな冷徹女を『仲間』って呼ぶのかよ？」

飽きた声で叫ぶグリムジョー。

『仲間』と呼ばれて啞然としていたアズマがはっとした。

「お前は破面…スピードは私と同等かそれ以下のはずなのに…」

「なぜ見切れたかか？そりゃあお前の始解を知ってるからだ。

御先狐の能力その一『騙し鈴』

自分の霊圧及び姿を相手の視界から消す。

んでもってでたらめな方向に鈴をとばし、音をならさせる。

相手がそれに気を取られている隙にグサリって技だ。」

「…なんで私の始解まで知っていたんだ？」

「それはだなあ…」

「そこまでだ」

突如現れたのは二人の人物…。

一人は白い布ですっぽり身体はおろか頭まで覆った男。

もう一人はタキシードの男。

にやにや笑うグリムジョーの表情は一遍した。

ちっ…と舌打ちを打つ。

「なんだよ…もう時間か？」

「ああ…遊びはここまでだグリムジョー。」

「…何者だ？」

白い布の人物はアズマのほうを見ないで答えた。

「これも計画のうち…また会おう六車アズマ。」

「じゃあな。死神さんよお。」

「待て!!」

「逃がさん！」

二人を追いかけようとするアズマ達だったが…

「おおっと、追わさねえぜ」

タキシードが小さな懐中時計を出すとポチッと押した。

「あれ…」

次の瞬間にはグリムジョーも白い男もタキシードも…いなくなっていた。

跡形もなく…霊圧の痕跡すらない…きれいさっぱり消えてしまっていた。

「くそ…」

「どこにいったんだ？」

「小宇宙の痕跡すらない…」

一同は追跡をあきらめざるおえなかった。

「…なあシユラ。」

尸魂界への連絡を終えたアズマはシユラを呼び止めた。

「なんだ？」

「コスモっていつのを教えてくれ。」

「……」

「奴は…私の始解…つまり私の力を知っていた。」

卍解…最終奥義は人前で披露したことはないが…念には念をいれな
いとな。

少しでも新しい力が欲しい。…教えてくれ。」

表情は相変わらずの無表情…だが、その眼には強い光が宿っていた。

「……だが、コスモは100人の子供がいても10人くらいしか目
覚めない。」

死ぬ可能性も高いが…それでも覚えるか？」

「当たり前だ。私は死神だぞ？死を怖がって何になる？」

口元がかすかに緩むアズマ。

「…後悔するなよな。」

シユラは少し笑った。

教皇の間まで返ってきたアズマは下を見下ろした。

蜜色の夕日が…十二宮を…聖域を優しく包んでいる。

その光景が瀨霊廷と重なった。

瀨霊廷も夕方になると、真っ白な瀨霊廷がこの時間だけ蜜色に染ま
るのだ。

『生きてるんだろ？嬉しいだろ？笑え！』

100年ほど前に行方知らずになった兄の声がよみがえる。

死神になって…初めての任務の討伐任務の後に…

鼻に残る血の匂いが怖くてしゃくりあげるアズマを

兄は双極の丘に連れてきてこう言ったのだった。

『生きてるんだろお前は。生きてるんだからこの景色も見られる。』
その時広がっていた蜜色に染まっている瀟霊廷の風景はいまだに鮮
明によみがえってくる。

『だから笑え』

そういつて兄はアズマの頭をくしゃくしゃと撫でたのだった。

「ごめんなお兄ちゃん。…もう笑えない。」

瀟霊廷と同じように蜜色に染まった聖域をいつまでも眺めるアズマ
だった。

第十話：第六十刃・来襲　？（後書き）

（死神図鑑ゴールデン・聖域）

六回目・巨蟹宮

コン「うう…気味悪いところだぜ…」

壁に彫られた顔共がうめき声を上げている。

デス「気味悪くて悪かったな。」

コン「あつ…『聖衣に見捨てられた男・蟹座のデスマスク』か？」

デス「…初対面でそりゃねえだろ？…にしてもボロボロだなあ…」

コン「気にするな…」

そうそう、前からきになってただけどよお、てめえの本名ってなんだ？」

デス「ああん？」

コン「だってよお、まさか子供に『デスマスク』ってつける親なんていねえだろ？」

デス「『悪魔』ってつけようとした奴は日本にいるらしいぜ？」

コン「…そうなのか！？」

…じゃなくて、お前はどなんだよ？

このつめいてる死に顔共のせいで『デスマスク』と呼ばれてるんだ
ろ?」

デス「…まあそうだな」

コン「じゃあ本名は?」

デス「……………忘れた。」

コン「んなわけあるかい!」

デス「あることにはあるけどよぉ、俺のイメージと離れすぎてるっ
ていうか…」

コン「…ヨハネとかか?」

デス「ちげえよ」

コン「じゃあジヨバンニ?」

デス「違う。」

コン「…まさか花太郎?」

デス「誰だよそれ?」

コン「んじゃあ岩鷲?」

デス「俺は日本人じゃねえ!イタリア人だ!!
っーか適当に言ってるだろ?」

コン「じゃあさっさと教えるよ。」

デス「断る。」

コン「なんで？けち臭い蟹だなあ。」

デス「ああもうウルセエ！

それ以上尋ねてみる！

冥界波で黄泉比良坂へ送った後に鬼蒼焔でそのぬいぐるみはおろか、魂ごと火葬してやるぜ！」

コン「…じゃあもう次の宮に行きまーす。」

さっさと次の宮に急ぐコンだった。

～続く～

第十一話・空座町の昼下がり（前書き）

しばらくアズマは出てきません。

少しの間、一護が主役っぽくなります。

第十一話：空座町の昼下がり

第十一話：空座町の昼下がり

「ありがとう！」

色素の薄いショートカットの髪を持つ少女：黒崎遊子はニッコリ笑って礼を言う。

ペアつと花が咲いたような笑顔に礼を言われた二人の少年は顔を赤らめた。

「ま：まあ、当然のことをしただけだ。」

「これからは、ひつたくりには気を付けてね。」

そう：この二人は、ひつたくられた遊子の鞆を奪い返したのだ。
：ちなみにそのひつたくり犯は、地面とキスをしたまま動かなくなっていた。

「うん！：あつ、そうだ、名前はなんていうんですか？」

私は黒崎遊子って言います。」

「遊子ちゃんか。俺は星矢！こいつは瞬：こつ見えても男だぜ。」

「えっ！？男なんですか！？」

「：うん。よく間違えられるけど：」

苦笑いする瞬。

「：ごめんなさい：失礼なこと言っちゃって：。」

「いいよ。気にしないから。」

あつ、そうだ。『浦原商店』ってどこにあるか知ってる？」

「うん。これからそこに、お菓子買いに行くところなんだ。」

星矢君と瞬君もお菓子買いに行くの？」

「ちょっとアル人から頼まれていることがあるんだ。まったく…辰巳か誰かに任せればいいのに…人使い荒いぜ。」

「まあまあ…」

「?よくわからないけど…一緒に行く?」

遊子は星矢と瞬と一緒に浦原商店へと足を進めた。

「あれ?遊子?」

通りをまがったとき、二人の人物が立っていた。

一人は高校生くらいのオレンジ色の髪を持つ少年。

もう一人は遊子と同じ年くらいの黒髪ショートカットの少女。

「あつ!夏梨ちゃんとお兄ちゃん!!」

「お兄ちゃん!?!」

思わずアングリ口をあける星矢。瞬も目が点になっていた。

「うん。お兄ちゃんと私の双子の妹の夏梨ちゃん。」

ニッコリと笑う遊子。

星矢と瞬は額を寄せ合った。

「ほんとにアレが兄貴かよ?

アイオリアとアイオロスは怖いくらい似てるのに…」

「でも、僕たちだって一応、兄弟だけど似てないじゃない。」

「でも母親違うからだろ?

それに双子なのに全然似てないぜ?

サガとカノンは瓜二つで一般人じゃあ区別つかない…って聞くのに。」

「それは…」

「なにコソコソしてるの？」

「う…うん。なんでもないよ。」

それより…ほんとに兄妹なの？」

少し上目使いに聞く瞬。

「…よく言われるけど、正真正銘同じ母親と父親から生まれたんだ。…で、その人たち誰？」

黒髪の少女が尋ねる。

「ひつたくられた鞆を取り返してくれた星矢君と瞬君。」

「そうか…ありがとな。」

俺は黒崎一護。こっちは妹の夏梨。」

「まあよろしく。」

…つてか、遊子たちはこれからどこ行こうとしてたの？」

「浦原商店だよ。私はお菓子を買いに行くんだけど、星矢君たちは別の用事があるんだって。」

「浦原さんのところか…最近行つてないな…。」

「ねえ、お兄ちゃん達も行こうよ。」

「…まあ…暇だしな。顔見せに行くか。」

「一兄が行くなら、あたしも行こうかな。」

…こうして一同は浦原商店を目指すことになった。

「はあ！？お前たち…中学生なのか！？」

信じられない…という顔をする一護…。

あはは…と瞬は力なく笑った。

「一護さんは16歳か…魔鈴さんと同じだな。」

「マリンさん？…まさか彼女か？」

「まさか！！俺の師匠だ。」

「何の師匠なの？」

「あ…えつと…」

答えに詰まる星矢。

「あ…師匠っていうより、星矢の育て親みたいな…感じかな？」

「育ての親？」

「ま…まあ…そんな感じだな？」

黒崎家は、なんだか人に言えない理由があることをさっして、何も聞かないことにした。

まだ冷たい風の吹く三月…

…東京都・空座町の昼下がり…

透き通るような青い空に亀裂がはしった事に、気づいた者はいなかった。

第十一話：空座町の昼下がり（後書き）

〔死神図鑑ゴールデン領域〕

七回目・巨蟹宮 ？

コン「うぎゃあああああ！！！！！！！！」

デス「な…なんだ？」

空からコンが降ってきた。

デス「…お前…獅子宮に行ったんじゃないのか？」

コン「ああ…でも…幸運というか…災難というか…」

― 問答無用に回想シーン ―

獅子宮にたどりついたコンが見たものとは…

ボン、キュッ、ボンと体のラインがしっかりとした女性。

コン「うっひゃあ〜可愛いぬいぐるみはどうですか？」

得意のジャンプで飛びつこうとしたのだが…

リア「魔鈴に近づくな！

ライトニング プラズマ！！」

コン「はぎゃあー！！」

光速拳を正面からくらい、ふつとばされるコン…
…ここまでならよかった…

？「！？」

パシイ

コンが何かにぶつかり…割れる音が聞こえた。

コン「…いてて…ん？」

地面にずり落ちたコンが上を見上げると…

結構きれいな顔立ちの女性…白銀聖衣を着た…

シャイナ「…みたな…」

コン「ひいつ！？」

シャイナ「サンダークロウ！！！」

ずかーん

ー回想終了ー

コン「…つてことが…」

デス「そりゃあ…なんとも言えねえな…

とりあえず、ほとぼりが冷めるまでここにいるか？」

コン「で…デスマスク…。恩にきるぜ。」

まじでデスマスクが神に見えたコン。

デス「まっ、皿洗いやってくれるならだけどな。」

コン「お安に御用だ!!」

…コンはまだ知らない…

洗うべき皿が、天井に届くくらいあるということに…

〈続く〉

第十二話：誘拐（前書き）

今日はサガとカノンの誕生日…ですが、全然彼らとは関係ある話ではありません…

次回、尸魂界と冥界の関係を書きます！
それでは、どうぞ。

第十二話：誘拐

第十二話：誘拐

「あああ！！一護…その人たちは…！！！」

やけに高いテンションの声…振り返るとそこにいたのは同じクラスの優男…

浅野啓吾がいた。

「なんだ啓吾？星矢と瞬知ってるのか？」

「しらねえのか一護！！」

前テレビでやってたじゃん『ギャラクシアン・ウォーズ銀河戦争』

アレに出てた 세인트 って人だよ！！」

「ああ…そういや…あつたなそんなの。」

「あつたな…って…」

あんだけ話題になったのに…という目で一護を見る星矢と瞬。

「わりい。どうせやらせかと思ってあんまり見てなかったから…」

「…まあ…そう思ってもしかたないよね…。」

苦笑する瞬…だったが…

「…なにあれ？」

空を凝視する瞬。

続けて星矢と啓吾と夏梨の表情が一変した。

「なんだ？」

「どうしたの夏梨ちゃん？」

そこに広がるのは、ただ、どこまでも青い青い空。
異変に気が付かない一護と遊子…だったが…

「ひゃっ!」「うわぁ!」

いきなり遊子と夏梨が空に浮かび上がる。…まるで何かにつかまれているかのよう…

その時、目に見えていなくても、一護は何が起こったかさとした。

「虚か!?!」

「な…なんかお前に言ってるぜ一護…」

「…どんな虚だ？」

「なんか…人型で目つき悪い水色の髪の男…あっ!?!ごめんなさい
ごめんなさい!」

目つき悪いなんて言ってますみません!」

空に向かってあやまる啓吾。

「くはっ!」

目に見えないものが遊子と夏梨の鳩尾を殴って気絶させたようだ。

…二人は動かなくなった。

「つてめえ…その二人を放しやがれ!

『ペガサス流星拳』!」

星矢の拳から億を超える拳が繰り出される…が、

遊子と夏梨の位置が急に空高く上がっていったところと、星矢の悔しそうな顔から判断すると、どうやら当たらなかったのだらう…。

「ちくしょー！！聖衣をムウのところ修理にだしてなければ…。」
「なんでその二人を…?」

悔しがる星矢と瞬。

：一方の一護はその光景を見ながら啓吾が教えてくれた虚の特徴を思い出していた。

「水色の髪で…目つきの悪い…人型の虚って…」

グリムジョーか!？」

はつと気が付く一護。眉間のしわが一層深くなる。

「し…知ってるのか?」

「ああ…あいつはやべえ…」

「まじで!？」

：ん?なんか言ってるぞ。」

「通訳してくれ啓吾。」

「え…えつと…」

『久しぶりだな一護。』

大切な妹を返して欲しけりや、このチケットをつかってアテナまで来い。

んで、そこにいる男の指示に従って力を取り戻したなら、返してやる『」

ひらひらと白い封筒が落ちてきた。

それをあわててキャッチする。：なかには手紙と飛行機のチケット

…。

「：わかった。妹たちに手え出したら許さねえからな!」

空に向かって叫ぶ一護。

「『ああ…約束するぜ。』

あばよ、元・死神さんよお。』」

遊子と夏梨が消えていく。

「遊子…夏梨…。」

悔しそうに…もう誰の目から見ても何も無い…青い青い空をにらみ、拳を握りしめる、黒崎一護だった。

第十二話：誘拐（後書き）

〈死神図鑑ゴールデン聖域〉

八回目・巨蟹宮？

コン「なあ…そういうえばデメエって山羊と魚と仲がいいんだよな？」

デス「まあな」

コン「…普段な三人で何やってんだ？」

デス「何って…ダべったりとか…酒飲んだりとか飯食ったりとか…ゲームしたりとか…」

コン「修行じゃないのか？」

デス「まさか！！俺たちの中で修行をまともにするのはシユラだけだ。」

実際、肉弾戦じゃあアイツに勝てる自信ねえしな。

…まあ…それ以外だと勝つ自信満々だけどな（笑）

コン「…それ以外？」

デス「いつもシユラが貧乏くじを引くからな。

罰ゲームも基本、アイツが毎回やってるし…。」

コン「へえー。んで、どんな罰なんだ？（わくわく）」

デス「たとえば『教皇の仮面に落書き』とか『シャカの沙羅双樹を切ってくる』」

とか『カミュの前で氷河の悪口百連発』とか…
くつくつ…そういえば…シユラの罰ゲームといえは…

まだ、妖怪爺が殺される前だから14年前…だな。

その時の罰ゲームでシユラがアイオロスに…」

シユラ「エクスカリバー！！！」

ズバツ

デス「あぶねえな！！もう二度と言わねえから小宇宙押さえろって。」

シユラ「…貴様は信用できん。…ちよつどいい…ここで二度と口が
きけないようにしてやる。」

デス「…ちよつとやべえ…」

おい、コン！ちよつと来い。」

コン「なんだ？」

ガシイ（頭をつかまれる音）

デス「すまねえな。

俺のために死んでくれ。」

コンをデスマスクが投げ飛ばすのとシユラが

シュラ「エクスカリバー！！！」

と叫び、手刀を振り下ろすのは、ほぼ同時だった。

コン「いやああああああ！！！！！！！」

コンの切ない叫び声が巨蟹宮に木霊した…。

〈続く〉

第十三話：尸魂界と冥界（前書き）

予告どおり、尸魂界と冥界の関係性を書きました。

…作者の捏造設定も入っています。

それでは、どうぞ。

第十三話：尸魂界と冥界

第十三話：尸魂界と冥界

「…そうツスカ…妹さんたちが…」

帽子に甚平姿の男…浦原商店店主・浦原喜助が腕を組んだ。

…啓吾は用事があつたので来られなかったが、一護・星矢・瞬は浦原商店に来ていた。

「…それで…グリムジョーは『アテネ』に来いって言ったんですよ？」

「ああ…啓吾が言うにはな…。」

「……そういえば…あなたたちは？」

浦原は星矢と瞬を見た。

「俺は星矢。こっちは瞬。」

「ああ…沙織サンの聖闘士ですね。」

これが頼まれていたものツス。渡しておいてください。」

そう言つて浦原は、懐から封筒を取り出した。

「わかったぜ…って…あんた聖闘士知ってるのか？」

「知ってますよ。話したこともありますし…。」

…で、話を戻しますが…実は数日前に、アテネでグリムジョーが目撃されてるんツスよ。」

「アテネって…ギリシャでか!？」

「本当かよ!？」

驚き目を丸くする一同。

「確かな情報ツス。…丁度すこしまえからアテネで虚が現れるようになったから、派遣された死神からの報告ですし…。」

「「死神い!？」」

思わず叫ぶ星矢と瞬。

「死神ってなんだよ!? タナトスか?」

「そうか…知らなくても無理ねえよな…」

死神っていうのは、良い霊を成仏させて、ホロウ虚っていう悪い霊を浄化して

この世とあの世のバランスを保ってる奴らだよ。」

「はあ〜? 聞いたことないぜ?」

「うん…死んだら余程のことがない限り、よもつひびと黄泉比良坂に送られて、皆、地獄に落ちちゃうんだから、死神はいらないと思うけど…。」

「待てよ! 地獄に落ちるのはシユリーカーみたいな悪い奴だけだろ?」

「説明しましょうか?」

パンパンと手を叩く浦原。

「実はあの世っていうのは二種類あるんですよ。」

一つは冥王・ハーデスの支配する冥界。

もう一つが霊王が支配するソウル・ソサイテイ尸魂界ツス。」

「ソウル・ソサイテイ?」「ハーデス? 冥界?」

首をひねる星矢と一護。…だまって聞いている瞬。

「死ぬ地区によって送られる死後の世界が違うんツスよ。」

この辺は尸魂界の管轄ですが、ちよつとずれると冥界の管轄です。人はものすごいたくさんいます。人だけでじゃない…犬も、猫も…すべての動物を合わせたら凄いだころの数ではありません。

管理するのが面倒なので、あの世は二種類にわけられたんです。

でも…死んだら後に転生するという概念は同じなんツスけど…そこまでの過程が全然違うんツスよ。」

「どう違うんだ？」

「尸魂界は黒崎サンも知つてのとおり、魂の故郷です。

基本的に長い寿命を持ち…生活の度合いこそ違いますが、基本的に老若男女混じった家族のような集団を形成し生活し、転生…つまり『死』を待ちます。

まあ…いうならば、もう一度人生をやり直すみたいな感じですね。

一方の冥界は、ハーデスが、人間たちを愚かしい存在と見なして絶望しきつて、

これ以上人間たちが墮落しないよう、死者に苦行を与えるとこころな
んツスよ。

血の池とか、氷地獄とかで…

その人の業によって転生時期は変わる…んですけど…」

「…ですけど…？」

「…ハーデスっていうのがとんでもない神なんですよ。」

はあ…とため息をつく浦原。

なぜか顔色の青い瞬…一護は少し気になったが、浦原の話の方が気
になったので、

可愛そうだが無視することにした。

「2000年に一度くらいの割合で、地上欲しさにアテナという地上
を統べる神に戦を仕掛けるんですよ。」

…ですが、地上の女神・アテナは別名・戦女神：勝てるわけがありません。

結局、負けて追放されて…、それなのに、またもこりずに2000年後に復活して戦を仕掛けるという神なんツス。

…でも、ハーデスがいない間、彼の部下が本来は仕事をしないといけないんツスが…

部下の双子神は遊んでばかり…ハーデスの戦士・冥闘士はハーデスがいないと目覚めないの

仕方なしに、尸魂界から死神を派遣して、代理統治をするんツスよ。ただ…死神は業を数えるのには慣れてないので、適当に2000年いた亡者から順に転生させていくんですよ。

そうじゃないと、永遠に聖闘士の亡者は冥界から出られませんよ。」

…確かに…ハーデスは聖闘士を敵視してるからな…。」

…宿敵アテナの戦士だからね…。」

はっはっ…と力なく笑う二人。

「…あと…決定的に違う点が、虚が現れるか現れないかです。」

「冥界の管轄内には虚はでないのか？」

「はい。基本的に冥界管轄内で死んだら、自動的に黄泉比良坂に送られるんツス。

尸魂界でいう断崖のようなところです。

…つまり、直接、冥界に送られるようなものなので、虚が現れるわけがないんですよ。」

「なのに今回は現れた…ってことか？」

「偶然ではないでしょう。」

おそらく人為的なもの…。」

「グリムジョーってやつのは仕事か？」

「いや…それはねえ。」

あいつはそこまで賢くねえよ。」

「同感ですね。…で、どうします？」

グリムジョーにしる、その背後にいる奴にしる、あなたの力を利用しようとしているのは明らかです。」

「関係ねえよ。」

きつぱりと言い放つ一護。

目に宿るは鋭い光。

「俺の力を利用してようとしてるなら、そいつは俺が叩ききる。

それよりも…遊子と夏梨を助けねえと…。」

拳を握りしめる一護。

「俺も手伝うぜ!」「僕も力になるよ!」

「星矢に瞬!?!」

「だってよお、アテネなんて庭みたいなものだし。」

「向こうにいる知り合いに援助も頼めるし…それに丁度春休みだからね。」

にこつと笑う二人…。

一護も少し笑った。

「ありがとう。」

第十四話・Stop your time(前書)

今回はちょっと長めです…。

第十四話：Stop your time

第十四話：Stop your time

「…すげえ…」

おもわず感嘆の声を出してしまうほど、青く澄んだ海が広がっていた。

「だろ？ギリシャの海ってきれいだよな。」

星矢が答える。

「…しかし…本当にここでいいのか？」

星矢の友人…隻眼で、金髪のロシア人と日本人のハーフ…氷河が尋ねる。

「うん。…ちゃんと『スニオン岬』って手紙には書いてあるよ。」

瞬が一護の持っていた手紙を覗き込んで言った。

一護・星矢・瞬・氷河の四人は、手紙の指令どおりに、『スニオン岬』に来ていた。

一護の友人達も力になりたいようだったが、彼らにはパスポートがなかったため、来ることができなかった。

「スニオンか…ポセイドンの仕業かなあ？」

「まさか…」

「おーい、星矢・瞬・氷河！」

声が聞こえる。ふりかえるとそこにいたのは、黄金に輝く鎧を着た変人が二人…。

今時鎧かよ…と一護がおもっていると…

「わが師カミュ！！！！！！」

「氷河！！！！！！」

さつきまでクールだった氷河が変貌。

黄金の鎧を着た赤い髪の男に抱きついた。

赤い髪の男も愛おしそうに受け止める。

まるでN R TOに出てくる『熱血ゲジ眉師弟』のようだ…と思
った一護は少し引いた。

…隣にいた星矢に耳打ちする。

「なあ…氷河の奴と、あの金ぴか鎧男ってどんな関係なんだ？」

「ん？カミュと氷河は師弟関係だ。」

…気にするなよ。毎回あんな感じだから俺たちは慣れた。」

「うん…もう慣れた。」

久しぶりアルデバラン。」

瞬が気まずそうに立っている…同じく黄金の鎧を着たデカイ男に声
をかけた。

「久しぶりだ星矢・瞬…ムツ？…ああ…お前が一護か？」

俺は牡牛座の黄金聖闘士・アルデバランだ。よろしくな。」

大きな手を出してくるアルデバラン。

「こつちもよろしく、アルデバランさん。」

「ハッハッハッハ！」さん”は余計だ。

…それより、紫龍はいないのか？」

「紫龍は病気になった春麗の介護で来れないんだってさ。」

「そうか。…なら仕方ないな。」

まあ、俺たちが一護のサポートを全力でするから安心しろ。」

「あ…ありがとうな、アルデバラン」

「ハツハツ、礼儀正しいな!!!」

バツシイバツシイ一護の背中をたたくアルデバラン。

…正直、背骨が折れるかと思っただ一護だった。

これから何が起こるかわからない。

死神の力を取り戻す過程で…もしくは取り戻した後に起こるであろうアクシデントに備えて、

星矢の上司(?)の城戸沙織が凄腕の聖闘士をボディーガードに付けてくれることになっていたのだ。

…そのボディーガードがアルデバランと…

「あいつか?」

「ああ…ほら、カミュ!!!」

一護に挨拶したほうがいいのではないか?」

いまだに氷河と挨拶をしている赤い髪の男…カミュに呼びかけるアルデバラン。

「ん…ああ。そうだな。…すまない氷河。」

「いいですわが師。一護に挨拶をしてください。」

「そうか…わかった。」

…人を気遣うとは…お前もクールに近づいたな氷河。

…よろしくな一護。私は水瓶座のカミュ。」

「(…氷河に対する態度とずいぶん違うな…

…つてかアンタ達全然クールじゃねえよ!)

…よろしくカミュ…て…つめてえ!!!」

カミュの手があまりにも冷たかったので叫んでしまった一護。

「わが師は『水と氷の魔術師』と呼ばれているから当然だ。」

「氷って…冬獅郎かよ…。」

どう考えても小学生にしか見えない白髪の死神を思い出す一護。

「トウシロウ？だれだそれは？」

「ああ…氷を使う死神だよ。白髪で小学生みたいな外見の。」

「氷を使う子供の死神か…一度みてみたいものだ。」

その者が望むのなら、氷の闘技を教えても構わない。

まったく…アズマではなくその少年が来ていればよかったのに…

そうしたら、氷の闘技を教えられたのに…

手刀など所詮、包丁代わりにしかならないのだ。

それに引き替え我が闘技なら、食糧保存や地球温暖化を防ぐことも

…」

なにやらブツブツ言いだしたカミュ。

「気にするな。…シユラに弟子のようなものができてな…

見学していたら指導者魂に火がついたらしく…

シユラの弟子に氷の闘技を教えようとしたらしいのだが、

そっちの才能がなかったらしく、危うく凍死させかけてから

あの調子なのだ…そっとしておいてやってくれ。」

「そっか…」

そのときだった。

何もかもが止まった。

肌をなでる風も…岩肌に打ち付ける波の音も…
カミュの独り言も…星矢と瞬の話声も…

すべてが止まってる…一護を除いたすべてが止まっていた。

「なんだよこれ…」

…口を半開きにしたままのアルデバランを見て言った。

「時よ止まれ…お前は美しい…」

不気味なほどの静寂に包まれた世界に声が響く。

「なぐんで、嘘だと思わないか？」

現れたのは、純白のペガサスに乗ったシルクハットにタキシードの
男…

「お前が黒崎一護だよな。」

「てめえは…」

警戒心むき出しで話しかけると、男はにやにや笑って言った。

「俺は杓馬。…迎えに来たぜ元・代行君。」

「…杓馬…悪いがこいつらが…」

「うごかねえんだろ？命に別状ないんだし、ほっとけほっとけ。
いらぬ役者は舞台には上がらせられないんだ。」

「…役者？」

「神から見たら人間なんざ役者よ。」

…さあいくぜ。もたもたしてたら…どうなるかわかってるよな。」

遊子と夏梨の顔が浮かぶ。

「すまねえ…みんな。」

動かない星矢たちに背をむけて…一護は杳馬について行った。

第十四話：Stop your time（後書き）

（死神図鑑ゴールデン領域）

九回目・獅子宮

リア「…てつきり、前回なかったから、お前の死で終わったのかと…」

コン「殺すんじゃねえ！！」

リア「だが…下の宮（巨蟹宮）からシユラの小宇宙を…」

コン「ああ…原型がなくなるくらい切り刻まれた…が、優秀なスタッフに直してもらったんだ。」

石田「…スタッフって…」

コン「紹介するぜ、『眼鏡ミシンの最後の滅却師』石田雨竜だ。」

石田「よろしく。」

本編では出てこないけど、こっちではでてくるから。

あまりにもコンがボロボロになるといふことで、

沙織さんから頼まれたんだ。

安心してくれ、君の出番を奪うつもりはない。

君の修理が必要ではないときは、雑兵の方々の使つ、十二宮の抜け道に待機しているから。」

コン「セリフなげえよ！！」

今回は本編が長いんだから、こっちはあんまり……」

リア「…指令が出たぞ。

『もつまとめに入れ』だそうだ。」

コン「ああ……ダメ眼鏡のせいで貴重な時間を……」

石田「いいからまとめな。」

コン「わかったよ。まとめりゃいいんだろ？いくぜ……」

ピンポンパンポン

コン「えっ！？ちょ……もう時間！？

待ってくれよ、あと数行でいいから……

俺今回にもやってねえ……！！！！」

コンの悲痛な叫びは青い空に吸い込まれていったのでした。

～続く～

第十五話：すべては妹達のため…

第十五話：すべては妹達のため…

「…いつまで待たせるんだよ…シルクハット野郎。」

一護はイラついていた。

”杓馬”と名乗る男についてきたのだが…変な森についたとたん

「すまねえ、ちょっとここで待っていてくれ。」

と言つて消えたつきり、もう一時間近く帰って来ない。

…あいにくと暇をつぶす道具はない。

手ごろな木に寄りかかり空を見ていた。

「わりい。待たせたな。」

「おせえよ!!…つて…何持つてるんだ?」

戻ってきた杓馬は大きな箱を担いでいた。

金属製で、馬の顔が描かれている…子供一人くらい座れば隠れられ
そうな箱を…。

「いいもんだよ。おーい、準備できたぜ!!」

「遅いぞ杓馬…。」

白い布ですっぽり身体はおろか頭まで覆った男がいつの間にか一護
の前に立っていた。

「つてめ…いつからそこに!?!」

「さっきからお前の隣にいたぞ。」

…そうか…気が付かなかったのか…」

男はフム…と手を口元に当てて思案している。

「…もう少しこちらに來い。」

「はあ？ここじゃあだめなのか？」

とはいいいながらも少し男に近づくと一護。

「…よし…じゃあ始めるか。」

男は全体的に赤い色の手袋をはめた。

見覚えのある手袋…悟魂手甲…ルキアや恋次が使っていた、肉体から魂魄を抜くための道具…

「よつと。」

ずかん

「うわあー!!」

前に倒れこむ一護。

…男によって魂が肉体から切り離されたのだ。

「いきなりやるなよ…って…あれ？」

自身の胸元を触ると一護。

「鎖が…ねえ？」

胸元にあるはずの、魂と肉体をつなぐ因果の鎖が跡形もなかった。死神の力以前に、霊力すらない一護は通常の魂魄のほずなのに…

「そりゃそうだ。今のお前は実体化しているんだからな。」

杳馬が疑問に答えてくれた。

「実体化？…そういえば、魂なのに身体が軽くないような…。」

「だろ？ここは女神様の結界の力で、霊的なものは実体をもっちゃまうんだ。」

…さてと…無事に実体化したところで始めるか。」

三人は少し森の中を歩いて行った。

「そのこの頂上の家に、血の入った小瓶がある。」

その瓶の血を一滴飲めば、力が戻る。」

「そのこの頂上だな。わかった…って…マジで？」

杳馬が指差した場所は…首が痛くなるほど見上げないと頂上が見えない、断崖絶壁…。

岩はゴツゴツとしていて…登れないことはないと思うが…途中で落ちたら…

「あつ、それから…これ装着して登りな。」

杳馬は笑いながら箱から取り出したのは…いかにも重そうな白い鎧…。

実際、装着してみたら想像を絶する重さだった。

「でも…力はもどさねえとな…。」

自分自身に向かってそう言った。
遊子と夏梨のためにも、ここでへこたれるわけにはいかない。

「すこし…条件をよくしてやる。」

一護の目に強い光を見た男が刀を引き抜いた。

「…卍解…」

刀が番傘状に変形する。

男が天空に向かって一振りすると…ポツリ…ポツリ…と雨が降り出した。

「この雨は、お前の小宇宙…つまりオーラのよつなものを消す。

…この雨が降っている間は、誰にも邪魔されないうで登れる。」

「サンキュー…えっと…白い人!!」

鎧で動かすのが難しい身体に鞭を打つ。

一護は岩肌に手をかけた。

…すべては妹たちのため…

それが今の一護の原動力だった。

第十五話：すべては妹達のため…（後書き）

〈死神図鑑ゴールデン聖域〉

十回目・獅子宮？

コン「ったく…前はメガネのせいで時間とられちゃったが…い
ぜ、

今回は『聖闘士一番の正統拳法の使い手

…ぶっちゃけ初登場時はそこまで偉く見えなかった人NO・1！

獅子座のアイオリア』だ！」

リア「よろしくな。

…というか…俺は偉くないぞ？」

コン「いや偉いよ！！最強の十二人の一人を偉いといわなかったら、
雑兵なんて雑魚中の雑魚。まさにキング・オブ・雑魚になっちゃう
じゃないか！」

リア「そうか？」

コン「そうだよ！！」

…まあ…それは置いておいて…なんで初回（原作一話目）の時、聖
衣きてねえんだ？

明らかに雑兵の服じゃなかったか？」

リア「なにか問題があるのか？…私服なのだが…」

コン「し…私服うう!?!」

リア「動きやすいからいいだろ?」

コン「そういう問題か?…本当に20歳か?もう少し見た目に気をつけるよ。」

リア「そんなに变か?」

コン「变つていうか…とにかく見た目に気をつけるよ。女は服装も見ているんだぜ?」

リア「そ…そうなのか!?!」

ま…まあ…アイツはそんな事気にしていないと思うが…ブツブツ…」

コン「アイツ…て…魔鈴のことか?」

リア「な…なんでそのことを!?!」

コン「いや…有名だし…」

ぶっちゃけ、いまだどこまで仲は進んでいるんだ?」

リア「…実は…よくわからないのだ。」

コン「ふりむいてくれないのか?」

リア「一応、後ろから声をかけたら振り返ってくれるぞ?」

コン「いや…それはわかってるから…。」

リア「…なんというか…数年前から一か月に一遍は告白しているのだが…」

告白ということ自体に気が付いてくれないのだ。」

コン「…頻度たかっ…って…あの女…気が付かねえのか？」

リア「ああ…『好きだ!』ってストレートに言ったら『そうか。ありがとう』」

『付き合ってくれ!』って言ったら『今日はどんな修行をするんだい?』」

ってかんじで…。」

しゃがみこんで、うるうるし始める黄金の獅子…

コン「大丈夫だって…いつか気が付いてくれるさ…」

ポンポンとアイオリアの背をたたき、ぬいぐるみ…コンだった。

〜続く〜

第十六話：偽の指令（前書き）

この回からまたアズマの登場です。
舞台は今回のみ尸魂界です。

それではどうぞ。

第十六話：偽の指令

「やっと帰ってきてくれたわね」
「だれだ。」

執務が終わり自室に戻った碎蜂は身構えた。
部屋の隅に人影が見えた。
シルエットからするに女性：だろう。

「ふふ…ちよつと駒になつてもらつわね。」
女はゆっくりと刀を抜いた。

第十六話：偽の指令

「四席・六車アズマ：ただいま帰還いたしました。」

ばたん、と執務室のドアをあけるアズマ。
そこに広がっていた光景に少し眉をひそめた。
隊長の京楽春水は、がっちり立ち上がれないように椅子に縛り付けられている。
もちろん縛つたのは、その傍らにいる伊勢七緒…。
京楽の前にある机に、どっさりと積まれた書類の山から察するに、
…どうせまた京楽が仕事をさぼったツケがきたのだろう。

「あれ？帰ってきたのアズマちゃん？」
「任務は終わったのですか？六車四席。」

きよとん…とする二人…アズマは困惑した。

「えっ…ですが、このように至急帰還命令が…。」

懐から伝令神機を取り出すアズマ。

昼の修行の休憩時間に唐突に届いた指令だったので、あわてて戸魂界に戻ってきたのだ。

「知らないよ。そんな命令…。」

「ええ。いたって平和ですし…。」

「じゃあ…ちよつと技術開発局に確認してきます。」

一礼すると瞬歩で消えるアズマ。

その時、丁度、技術開発局の方で爆音がした。ものすごい黒い煙が立ちのぼる…。

「まったく…どういっつもリダヨー!!」

青い髪に異様な風貌の男が斬魄刀を片手に叫んでいる。十二番隊長兼技術開発局局长・涅マユリだ。

「涅隊長…一体何が…」

「…思ったより早かったな…六車アズマ。」

感情のこもっていない声が煙の中から響く。

煙が徐々に晴れて現れたのは…

…らつきよ頭の太った男…

「二番隊副隊長…大前田希千代だと!？」

そう…マユリとやりあっていた人物は大前田だったのだ。
ありえない…なぜ、金と食べることで実家の経営しか考えていない
小心者が…

「涅隊長…一体これは…」

「こつちが聞きたいくらいダヨ…！」

そうとうイラついているらしいマユリ。…地団太を踏んでいる。

「ワタシが帰ってきたら、この男はワタシの特別実験室にいたんだ
ヨ…！」

この脳みそまで脂肪で埋まってそうな男が、ワタシの張り巡らせた
数々のセキュリティも突破してメインコンピュータにまで侵入し
てたんなんて

ありえないことじゃないカネ？」

「…たしかに…」

「…まあいい…これで時間稼ぎができた。」

「時間稼ぎ…だと？」

アズマは少し霊圧と小宇宙を高めた。

いつでも攻撃できるように手刀を構える。

「こんなところでモタモタしているのか六車アズマよ…」

せつかく出来た『大切なもの』が消えようとしているかもしれないの
に…」

「大切なもの…だと？」

「そうだ…大切なアテナの聖闘士達が…どうなっていることやら…」

少し顔をゆがませる大前田…

目に光がない…いや…もともとないが…とにかくものすごく虚ろだ

った。

「お前…聖域になにかしたのか!？」

「さあ…少なくともお前に偽の指令を送ったのは、この希千代様よ。」

高笑いをする大前田。

「淫隊長!!大前田の後処理を頼みます!!」

淫の返事も聞かないで、瞬歩をするアズマ。

(…なにを焦っているんだ?)

聖域と尸魂界を結ぶ準備を大急ぎでしている鬼道衆を眺めていた。

心はいらないって…あの日に決めたのに…

もう…大切なものをつくらないって決めたのに…

いつの間にか聖域が…そこに住む人たちが…

アズマにとって大切なものになっていた。

「くそ…」

唇をかむアズマ…。

誓いを破ってしまった自分に腹がたった。

第十七話：復活（前書き）

タイトル通りの展開です。

第十七話：復活

第十七話：復活

「はあ…はあ…やっと登り切ったぜ…。」
一護はゴロンとその場に大の字になった。
…空が近い…

今は、あの白い男の技で雨模様だが…きっと雲ひとつない夜は、この空一杯に星がちりばめられるのだろう…

「…さて、はやく探すか…」

意外とすぐに疲労は回復した。

この崖をのぼり始めた当初は、鎧の重さのせいもあり、身体が悲鳴をあげていたのだが…

途中から鎧が急に軽くなり…それと同時に、身体が軽くなったのだ。
…鎧の効果か…それとも…霊力が戻り始めた兆しなのか…

考えるのは後にして、一護は崖の上に建っている唯一の建物の中に足を入れた。

…もう何百年…いや…何千年と建ってそうな雰囲気があるのに…それだけに…

簡単に人が来れそうにない崖の上に建っているのに、不思議と埃は、それほどなかった。

大量の書物…大量の小箱…ずいぶん立派な望遠鏡のようなもの…

天体観測の施設なのかもしれない…

「…これか？」

探し物はけっこう早くに見つかった。

…赤い液体の入った小瓶…

赤い液体…血液とは聞いているが…血液にしては神聖な感じがする…。

「一滴…飲むん…だよな…？」

ゴクン…と、唾をのみこんだ。

いくら神聖なオーラを漂わせた血液だからと言っても…だれのものか分からないモノを飲むのには勇気がある…。

(…これも…遊子と夏梨を助けるためだ！！)

思い切って蓋をあけ、一滴…口に含んだ。

(ま…まじい…)

吐きそうになるのを必死でこらえる…。

そのときだった。

…身体の内からわきあがってくる暖かいような懐かしい感じ…

…端からだんだんと視界が暗くなっていく…

「1111は…」

目をあけると見覚えのある風景…

蒼空にむかつて背を伸ばすビル群に一護は立っていた。

「久しぶりだな…一護…」

そこに立っていたのは、黒髪で…サングラスをかけた中年男性…の風貌をした一護の一番の相棒…

「久しぶり、斬月のオッサン。また…力を貸してくれるか？」

「…一護…私はお前と共にある…」

暖かな光と赤い布が一護を包み込む…。

目をあけると、自分の着物が変わっていた。

あの鎧は着ているが…その下に黒い着物…死神が着ることを許されている死覇装を着ている…。

それから、自分の手の中には、身の丈程の、鞘も柄も鏢も無い、出刃包丁のような形状の巨大な刀身のみの刀が握られている。

「これからもよろしくな…斬月…」

死神代行・黒崎一護は、愛おしそうに己の斬魄刀…斬月をなでた。

第十七話：復活（後書き）

（死神図鑑ゴールデン領域）

十一回目・処女宮

コン「…ついに来てしまった…」

はあ…とためいきをつくコン…

…正直一番訪れられなかった宮…

ここには『神にもっとも近い聖闘士…』といわれる程、電波系で何を考えているか分からない人型の生物・乙女座のシャカ』が君臨しているのだ。

おそらく、何の問題もなく通過できると確信していた獅子宮でさえ、投げ飛ばされる…というハプニングがあったのだ。

生きてここを通過できる自信がコンにはなかった。

コン「…ええい！…さっさと通り抜けるぜ！！」

ダッシュで他の宮より暗い宮を通過するコン。

？「待ちたまえ」

呼ばれた気がする…が、無視することに決めたコン。

…出口はもう目の前だし…

？「君には耳がないのかね？」

再び、宮全体に反響するような声が響く。

…無視するコン。

？「…ほう…このシャカに逆らうというのかね？」

コン「ああもう！！うつせえよ！！

そんなに話してえなら姿見せてからにしろや！！」

思わず叫んだコン

シャカ「…そうか…なら来るがよい…」

コン「えっ…？」

出口まであと一歩なのに…自分の意志とは逆に、足が止まる。

ズルズルズル

コン「なっ！！」

一気に身体が後方に引つ張られていった。

目に見えない力によって…だから何も抵抗できない。

コン「やめてええええええ」

コンの悲鳴もむなしく…沙羅双樹の園へ強制連行されたのであった…

〈続く〉

第十八話：漆黒と黄金（前書き）

この回からバトル要素が強くなります。
それではどうぞ。

第十八話：漆黒と黄金

第十八話：漆黒と黄金

「…この雨…」

急に降り始めた雨にシユラは違和感を感じた。

…この時期は結構雨の降る季節だが、なんかいつもの雨とは違う…

…そう…まるでアズマの使う力…靈力に似た感じがする雨…

アズマの修行に付き合う内に、靈圧というものを少し感じることができるようになっていた。

…シユラは目を閉じて神経を研ぎ澄ませた。

(…この感じ…間違いなく靈圧…)

それもアズマのモノではない。…それにアズマは今、ソウル・ソサイティとやらに帰ってしまったている。

…では一体誰のものなのか…

シユラは雨の中へと飛び出した。

「おっ！？まさか気が付く奴がいるとはねえ…」

靈圧の元をたどりついた先にいたのは…シルクハットにタキシードの男と、全身白い布で覆った男…

「お前たちは確か…グリムジョーとやらと一緒にいた…」

「…覚えていたのか…めんどくさい奴だ。」

白い男がこちらをにらんだ…ような感じがした。

「その覆面を外してもらおうか。」

「それは困る…今はな。」

「どうする旦那…山羊座には退場してもらおうか?」

「…いや…使い道がありそうだ。なにせアズマと仲がいいようだからな。」

…そうでなければ、霊圧などわからないはずだ。」

「お前…何者だ?」

手刀を構え警戒心を強めるシユラ。

「…破道の三十一・赤火砲。」

「遅い!!」

白い男が放つ炎の玉を手刀で切り裂いてかわすシユラ。
ヒューとタキシードは口笛を吹いた。

「やるねえ山羊の兄ちゃん。」

…っつか旦那。なんで攻撃するんだ?」

「いや…少し痛めつけたくなくてね。」

だってアズマは僕のモノだし。」

「お前…アズマとどういう関係だ?」

「……………」

「答える気がないなら…無理矢理吐かせる!」

そのまま手刀…エクスカリバーを振り下ろすシユラ。

そのまま拳圧の直撃で白い男が倒れるか…と思ったが…

「月牙天衝！！！」

上空から漆黒の斬撃が拳圧を相殺する。

見上げるとそこにいたのはオレンジ色の髪を持った死神…ペガサスの聖衣をまとった…

「お前は…」

「俺は死神代行・黒崎一護。」

「…っか、それはこっちのセリフだ…って…あれ？それって…アルデバランたちの着ていた鎧か？」

「お前…なぜアルデバランを知っている？」

「知ってるっか…」

「おお、力が戻ったか、代行君。」

「ああ…こいつ杵馬の知り合いか？」

「…知り合い…ではないな…まあ、俺の台本の役者だけだよ。」

「…タキシード…杵馬はニヤリと笑った。」

「…なんだかわかんねえけど…とりあえず約束は果たしてもらっぜ。」

「…んじゃあ次のステージ開幕といきますか！」

「ポンつと手を叩く杵馬。」

「…そうだな…演目は聖闘士VS死神って感じかな。」

「…なっ！？…こいつと戦うのか？」

「…ああ。だって本当に力を取り戻したか知りたいし…」

「…本当の死神の力を取り戻していないのなら…妹さんたちは…」

「…くっ…でも…こいつは関係ないだろ…」

不敵な笑みを浮かべたままの杵馬。…苦しげな顔をする一護…

「…そうか…なら、妹は捨てるんだな？」

白い男が躊躇する一護を後押しした。

「…すまねえ！！！！」

苦悶の表情を浮かべたまま一護は斬魄刀をシユラに向けて振り下ろした。

苦悶の表情を浮かべているとはいえ、本気の一撃…

適当に相手をしていたら…こちらが死んでしまふと感じたシユラは一護とむきあつた。

「…くっ…仕方ない…山羊座のシユラが相手をしてやる。」

「シユラか…行くぜ。『月牙天衝』！！！！」

「エクスカリバー！！！！！！」

強大な漆黒と強大な黄金の光がぶつかり合い…その場が光に包まれた。

第十九話：霧雨の能力

「まったく…俺の聖衣どこだよ!!」

星矢は雨の中を走っていた。

…急に目の前からいなくなった一護を探すため…とりあえずムウに預けておいた聖衣を受け取りに行った。

…が、瞬のアンドロメダの聖衣はあったのだが、星矢のペガサスの聖衣が無くなってたのだ。

一体どこにいったのだろうか?…ということで、星矢・瞬・氷河…そしてムウの弟子の貴鬼の四人で手分けして急に降り出した雨の中を探していた。

「てめえが星矢か?」

上から声がする。見上げるとそこにいたのは水色の髪の男が浮かんでいた。

「…!? 確かてめえは…グリムジョー!?!」

「おっ? 覚えていたか…まあいい。」

ちよっくら来てもらっぜ。」

第十九話：霧雨の能力

「月牙天衝を…手刀で相殺した!?!」

ありえない…卍解状態のこの技は、十刃の鋼衣イエロという外皮に傷を負わせるくらいの威力があるのに…。

「くそ…」

さっさと終わらせたい…。早く遊子と夏梨を助けないといけないのに…

「…とつとと終わらせるぜ。」

右手を顔の上に持ってきた…時だった。

「待て、黒崎一護!!」

鋭い声がとぶ。…そのまま一護が振り返るとそこにいたのは…

「アズマ!?!」

「アズマって…たしか浦原さんが言っていたこの地区担当の死神…か?」

死覇装をまとった女性…アズマが、はあ…はあ…と肩で息をしている。

顔色が…少し悪かった。

「虚化は使つな黒崎一護…それから…シユラは敵ではない…攻撃をするな。」

それから…その白い奴…お前、何者だ?」

冷やかな目でアズマが白い男を睨みつける。

「この雨は私が知る限り斬魄刀『霧雨』の卍解の力…

霧雨の生み出す雨にふれた者は、幻術にかかってしまう…。

おそらくその力で小宇宙の気配を隠していたんだ。

…だから誰も一護の小宇宙とシユラの小宇宙がぶつかり合っていることに気が付かないんだ。」

ああ…と、シユラは納得した。

そこまで小宇宙を押さえているわけではない…むしろ結構フルでやっている…

なのに、誰も来ないのはおかしいと思っていたのだ。

「なら…どうしてアズマは…霊圧で分かったのか？」

「霊圧を感じたのも理由だが…この雨に降れないように、一定量の小宇宙と霊力を放出し続けているんだ。」

たしかに、傘も雨合羽も着ていないのに、髪の毛一本も濡れていない。

「…さて…だが、その斬魄刀の持ち主は、数十年前に死んだはずだ…なぜその力を使っている？」

斬魄刀に手をかけるアズマ…

「…さすが六車隊長の妹だな…」

白い男は覆面に手を伸ばす…

「ちよつと待ってくださいよ旦那あ。」

杓馬が白い男の腕をつかんで制した。

「杳馬…」

「もう少しかき混ぜた方が、きれいなマーブル模様が出来上がるっ
てもんですよ？」

それに…グリムジョーの任務も終わったみたいですし…。」

「…ほんとだな。…なら、ここは退散しよう。」

ついてこい、死神代行よ。」

「待て!!!」

「おおっと、アズマちゃんはいかせないぜ…まだな。」

杳馬はポケットから時計を取り出すと、カチリ…とボタンを押す。

「…まただ…」

アズマが斬魄刀を抜きかけたままのポーズで止まっている。

シユラも走り始めた瞬間のポーズで止まっている。

…動けるのは一護と杳馬…そして白い男…

「いくぜ死神代行君。」

「まっつてくれ杳馬!!!俺は…うわあ!!!」

杳馬の傍らに現れた純白のペガサスが一護の襟を啜える。

そして雨の止んだ空にむかっ飛び上がった。

三人が消えてから時間が動くようになるまで…そこまで時間はかか
らなかった…。

第十九話：霧雨の能力（後書き）

〈死神図鑑ゴールデン聖域〉

十一回目・処女宮　？

シャカ「…さて…さっそくだが…

大地に額をこすり付けて私を拝みたまえ。」

コン「いやいや…誰が拝むかよ…」

コンは沙羅双樹の間に（強制的に）連れてこられていた。

シャカ「…ほう…この私にさからうというのかね？

せっかく招待してやったのに…」

コン「…いや…俺様は来たいなんて一言も言っただけ…」

シャカ「照れなくてもよいのだぞ。

さっさと拝みたまえ。」

コン「…どんだけ拝ませたいんだよ…！

っ！か、何着てるんだよ！？」

シャカが着ているのは…袈裟…

シャカ「…なにが問題でも？」

コン「ありありだよ!!」

ここはギリシャ神話の女神・アテナの治める聖域だぞ？

その中でも上位に位置する十二宮だぞ？

仏教徒が堂々としていい場所じゃねえんだよ!!」

シャカ「フツ…何をいいだすかと思えば…

安心したまえ。…私がいる場所はたとえアテナの聖域であろうとも私の国となるのだ。」

コン「『星でんか』かよ!!」

フーか、ぜつたいコイツが『神にもっとも近い』っていつの嘘だよ。ただの『自己中』じゃねえか!!」

シャカ「…いくかね…ポトリと?」

コン「へっ?」

シャカ「私の力をその身をもって確かめ…

己の無力さを味わうがいい。」

コン「ちょ…まて…何やるんだ?」

シャカ「まずはその口からだ!」

シャカの両眼が見開いた。

…コンはシャカによって五感剥奪され、沙羅双樹の園にパタリ…と倒れこんだまま動かなくなったのであった…

…続く…

第二十話：修道女の誘い（前書き）

R15外すことにしました。

よく考えてみたら、そこまでグロイ描写は今後もなさそうだし…

凍ったり片腕失ったりとかは『残酷描写あり』で充分OKですよ？

…たぶん…

第二十話：修道女の誘い

第二十話：修道女の誘い

「…つたく…どこへ行ったんだ？」

聖域から出たアズマは目を開いた。

…黒崎一護の霊圧はどこにも感じられない…

突然、一護だけじゃなく、白い男とタキシードも消えたのだ。

…もともとそこにいなかったみたい…蒸発してしまっていた…。

「…おそらく時を止めたんだろうな…。」

消える直前、タキシードが持っていた時計を思い出すアズマ…。

「おーい、アズマ!!」

下から声が聞こえる。

霊子を足場に空に立っていたアズマは頭を下に向けた。

…そこにいた人たちを見て、嫌そうに眼を細めた。

「…十二宮からでいいのか？」

そこにいたのは、黄金に輝く鎧…黄金聖衣を着た男たち…

蟹座のデスマスク・獅子座のアイオリア・蠍座のミロ・山羊座のシ

ュラ・水瓶座のカミュ・魚座のアフロディーテ…そして…

「？カノンは聖闘士だったのか？」

兄…サガの双子座の黄金聖衣を着ているカノン…

カノンはムツつとしたような顔をした。

「俺も一応、双子座の聖闘士だ。…もっとも、サガのせい、ほとんど活躍の機会はないがな…」

…星矢と一護を探しに行くのだから？」

「…アンタ達には関係ない…これは私の任務だ。…ついてくるな。」

「それは無理だなあアズマ。」

デスマスクがニヤニヤ笑う。

「俺たちも任務だからさ。『ペガサスと一護を助ける！』ってな。」

「……好きにしろ……ん？」

下を見下ろして気が付いたのだが、少し離れたところに流れる川…

その真ん中に黒い穴が開いている…確かアレは…

アズマは川に近づきながら、懐から伝令神機を取り出した。

「…技術開発局ですか？八番隊の六車アズマです。」

…現世の管轄外地区にて虚圏ヴェコムントに通じると思われる

黒腔ガルガンダを発見…周囲に虚の気配は…」

「虚はいないわよ。」

川にかける橋にもたれかかっている修道女の姿をした妖艶な女性が答えた。

…いや…資格好は女性だが、声はどう転んでみても男のモノ…

…つまりオカマだった…。

「お前…私が見えるのか？」

「ええ。…あの穴に入りなさい六車アズマ。」

あの先にある虚圏に黒崎一護とペガサスの聖闘士はいるわ。」

「…何者だ？」

「私は天究星・ナスのベロニカ。」

「ナス？ナスってあの紫の野菜か？」

追いついたミロが言った。はあ…とため息をつくカミュ…。

「ナスというのはドウルジ・ナスというゾロアスター教の悪神の一つ。」

複数の女悪魔と考えられ、アルズーラ山峡にある地獄とつながる洞穴から、ハエの姿で飛んで来るといふ。そして腐敗した死体を温床とし、世界に不浄をまき散らす…らしい。」

「美しくない…とりあえず私はアテナに、この現象を伝えてくる。」

アフロディーテは手で鼻を覆いながら聖域に戻っていった。

「よくご存知ですこと。…さあ、アズマさん、とおってくださいな。」

「……ということですよ。とりあえず侵入します。」

伝令神機の向こうの相手にそれを告げると、ベロニカのわきを通り抜け、黒腔へと飛び込むアズマ。

「よし、俺たちも…」

「あなた達はいかせないわよ。」

ベロニカが口をガバリとあける。

すると大量のハエがあふれだし、聖闘士達に襲い掛かった。

ハエの攻撃をよけると…その部分の地面がごっそりえぐれている…。

「ハエでかよ…えげつねえな…。」

「くっ…これでは先へ進めん…。」
「どう？この子たちは私の可愛い僕…。
私が命じれば守りにも…攻撃にも転ずるのよ。
…今度こそズタズタにしてあげるわ…色男さん。」

ベロニカはデスマスクに向かって言う。

「おいおい…誘ってるのか？
わりいけどアンタは好みじゃねえんだ…っーか男だろ？」
「フフフ…答えもあまり変わってないわね…
今度は私あなたが躍らせてあげる…蟹座さん。」

ベロニカは意味ありげに笑った。

第二十一話：いざ、虚圏へ！！（前書き）

新章突入です！

：バトル傾向が強い話が多いとおもいますが、よろしく願います。

第二十一話…いざ、虚圏へ！！

(ついてくる気配がしない…)

虚圏に向かつて、暗闇をひたすら目指して走り続けるアズマは、一回振り返った。

…黄金聖闘士達の気配がしない…

あのベロニカとかいうオカマに足止めを食らっているのだろう。

…なぜ…自分だけを通じたのか…

「考えても仕方ないか…」

頭に手をやり、ふう…と息を吐く。

「死ぬんじゃないよ…」

アズマは再び前をむき走り始めた。

…暗闇にむかつて…

第二十一話…いざ、虚圏へ！

「…めんどくさい…」

『フリージング・コフィン』！！』

カミュが小宇宙を高め、八エの一団を凍らせる。

あっという間に、氷の棺に閉じ込められた八エの一団…だが…

ビシリ…

徐々に氷にひびが入り…そして…

バリン！！！！

氷の棺の内側からハエの一団が飛び出してきた。

「ば…ばかな！フリージング・コフィンを破るだど！？」

「私のハエを甘く見ないで。」

さあ…死と絶望の世界へお招きしましょうか？」

ハエが一段と勢力を増して襲い掛かる。

…とくになぜかデスマスクを重点的に…

「ちっ…めんどくせえ…

『積尸気冥界波』！！！！」

指先にためた小宇宙で作った淡い光…燐光をベロニカにむけて放つ
デスマスク。

「しまっ…」

ベロニカに冥界波があたり…ベロニカは動かなくなった。

デスマスクの技…『積尸気冥界波』は相手の魂を冥界の入り口…

…つまり、黄泉比良坂へと飛ばす技…

魂を失ったベロニカの身体はドサツと音を立てて倒れ、ハエはピタリ…と動きを止めて…土にかえった。

「んじゃあ、今からこいつの魂消しに行くから、

「テメエらは先に行けや。」

返事を聞かずにデスマスクは、ベロニカの魂を追い、自身も黄泉比良坂へと飛んだ。

「…大丈夫か蟹のやつ…」

「ミロがつぶやく。」

「たぶん平気だろ。」

紫龍との戦いでは調子に乗って負けてたが…あんなオカマに負けるはずがない…」

「シユラがそう言った。」

「…自分が聖闘士になってからだから…もうデスマスクとシユラの付き合いは13年以上…」

「一見すると、のらりくらりとだらしない、いい加減な奴だが…やるときはやる男だ…」

「…たぶん…」

「…じゃあ先に行くか。」

「…この穴に飛び込むんだよな？」

黒々として先が見えない穴を覗き込むカノン…

「たしか…ガル…なんだっけ？」

「ガルガンダ黒腔…虚圏に通じる道で、より暗闇をめざせばいい…とアズマが以前話していたが…」

「…そのためには、霊圧で足場をつくって進まないといけならしい…。」

「

「霊圧か…私の氷の道ではダメ…みたいだろうな…」

「じゃあ、小宇宙の応用でよくな？」

「まあ…なんとかなるだろう。」

「いや…なんとかならないと…って待てお前ら!…」

シユラが制したが、構わず穴に飛び込むミロとカノン…

…悲鳴も叫びも聞こえてこない…

「み…ミロ!？」

なるべく大きな声をだすカミュ。

…だが…もちろん返事は…

「心配したか、カミュ!？」

…あつたりする…。

ミロがこちらに顔を出した。

「いけるぞ!早く来いよ、シユラもカミュも!」

ミロの顔が引つ込んだ。

はあ…とため息をついた二人も…虚圏を目指して走り始めた。

…アテナの命のために…

…ペガサスと一護という少年の救出のために…

先ほどアズマも通ったであろう道なき道を…

第二十二話：真紅と金色の衝撃（前書き）

オリキャラ登場です。

あと…もう一人は最低でもだす予定です。

それではごっご。

第二十二話：真紅と金色の衝撃

第二十二話：真紅と金色の衝撃

空には白い月のみが輝き…地にはどこまでも続く白い砂漠…
虚が住まう黒白の世界…虚圏…
そこに響くは…

「ちくしょ〜！キリがねえ〜！」

次から次へと現れる虚にいい加減うんざりしてきたミロの叫びだった…

無事にたどり着けてホット…したのもつかの間…

次から次からわいてくる虚共…倒しても倒しても尽きることがない。

…雑魚は雑魚でも大量にいるとそうはいかない。

他の聖闘士達も苦戦しているようだ。

「ん？」

視線を感じた方を見る。

そこにいたのは眉毛以外は三口好みのボンツキュッボンとしっかり身の詰まった体系の女…

「（麻呂眉？…ムウの親族か？）…だれだ！？」

「あら…気が付いたの…困ったわ…」

女は指を口元に添えて考えている。

「私はレイナ。…悪いけど今は暇じゃないのよ。
この子と遊んでくれる？」

パンパンと手を叩くと現れたのは、黒いノースリーブを着た小柄な少女…。

「じゃあ碎蜂。あとは頼んだわよ。」

レイナはそういうと去って行った。

碎蜂の目には光がなかった…まるで傀儡のよう…

ミロは、この女を倒さないと先に進めないことを悟った。

「しかたねえ…いくか。」

ニヨキッとミロの真紅の爪が伸びる。

碎蜂も刀を構えた。

「じんてきせつ 尽敵螫殺 『雀蜂』」

碎蜂の刀が、右手中指に付けるアーマリング状の金色に輝く刃に変化した。

…そして…

次の瞬間、碎蜂の刃がミロにおそいかかった。

…死神にしては早い…

すくなくとも、瞬間をつかっていない状態のアズマよりもずっと…
あわてて後方へ飛びのいた…が…

「なんだこりゃ？」

刃がかすめた場所に黒い華のような刻印が刻まれている。
…痛みはないが…いやな感じがする。

「蜂紋華ほうもんか…死の刻印だ。」

「死の…刻印？」

「私の雀蜂の能力は弑撃決殺にげきけつさつ…」

蜂紋華にもう一度攻撃を加えることで必ず相手を死に至らしめる…」

抑揚のない声で淡々と語る。

「へえ〜じゃあ俺の技の方が慈悲深いな。」

ミロは走り出した。

そして爪を構えると…必殺技・スカーレット ニードルを四発碎蜂に打ち込む。

「くっ…」

碎蜂は痛みあまり、片膝をついた。

「俺の技…スカーレット ニードル…」

この蠍の真紅の針は人間の中枢神経に激痛を呼び起こす。

蠍座の星の数と同じ15発…すべてを打ち込む間に『降伏』か『死』かを迫る…

非常に慈悲深い技だ。」

「……………」

碎蜂は多少ふらつきながらも…しっかり立ち上がった。

「俺が残りの十一発を撃ち込むのが先か…」

てめえーがそのホーモンかってやつを同じところに打ち込むのが先か…
競争しようじゃねえか!！」

蠍座の三口は真紅の爪を…

二番隊隊長の碎蜂は黄金の刃を…

第二十二話：真紅と金色の衝撃（後書き）

〈死神図鑑ゴールデン聖域〉

十二回目・処女宮 ？

コン「……………ん…うん……………？…あれ？」

がばりっ！！と起き上がるコン。

コン「なんでしゃべれるんだ！？」

互換剥奪されたはずなのに…」

シャカ「……………ふん……………感謝するがよい。

まだ本編に一度も登場していないのでな…

少しでも出番をふやそうと思ったまですよ。」

コン「ん……………あっ！ほんとだ。

まだ一回も登場してねえ……………」

シャカ「どうやら九条（作者）のやつが忘れていたのだと。」

コン「それ、ウソだろ！？」

こんな濃い……………いや……………濃いどころじゃない異質キャラを忘れるわけねえだろ？

ただ書きにくかったんじゃない……………っついてえ！！！」

突然、天から降ってきたタライにあたるコン。

シャカ「天罰がくだったようだな。クスッ……」

コン「なんかむかつくなあ……」

じゃあ俺はこれで……」

シャカ「待ちたまえ。」

せめてもう二回は私の宮をやらせたまえ。

絶対に原作では蟹や山羊より出番も役柄も100倍いい私が、ここで冷遇されていいとでもいいと思っっているのかね？」

？「どうかんですね」

コン「お…お前は！？なんでムウがここに！？」

ムウ「私も本編では一回も登場してませんからね。

こっちでも一話のみの登場になるところでしたし……。」

コン「……いや……それはお前が俺をふつとばしたから……。」

ムウ「さて、では今回はそろそろ時間のようですね。」

シャカ「次回も私とその他大勢の活躍を楽しみにしているがよい。」

コン「知るか！つか、次回も処女宮かよ……！

勘弁してくれ」

コンのさびしげな遠吠えが十二宮に響いた。

〜続く〜

第二十三話：増援

第二十三話：増援

「キリがないな。」

軽く舌打ちをするシユラ。

「まったくだ。次から次へと湧いてくる！」

めんどろだ。『ライトニング プラズマ!!』」

アイオリアが自慢の光速拳を放つ。

一瞬、いくつもの閃光が奔ったかと思ったら、虚のほとんどが消滅していた。

「よし、いいぞアイオリア！」

カノンがふう…と額の汗をぬぐう。

…しかし、ここは虚圏…虚の世界…

せつかくライトニングプラズマで大量に消したのに、次から次へと新たな虚が襲い掛かってくる。

「おい、そういえばミロとカミュはどうした？」

「そういえば…いないな。」

シユラがあたりを見わたす。

「そういえば、まだデスマスクの奴も戻ってこない…ん？」

空を見上げるシユラ。

先ほど、自分たちが抜けてきた穴がまだ残っている。

…そのなかからこちらに近づいてくる巨大な霊圧…

「ハツハツハツ！！！！」

一人の男が穴を抜けてきた。

「なんだ？雑魚ばかりじゃねえか…

強え奴はどこだ！？」

右目に眼帯、顔の左側には大きな傷があり、髪の毛は11本に束ねてあり1つ1つのまとまりに1個ずつ鈴が編み込まれている男…

「ねえねえ剣ちゃん！あの人達キレーな鎧着てるね！」

男の背中に張り付いている、ピンク色の髪をした幼女がシユラたちを指差して言う。

「ああそうだな。…おい、テメエらの中で一番強えのは誰だ？」

ニタリと残忍な笑みを浮かべる男…

「その人たちは味方だよ更木隊長。」

編み笠を被り、女物の着物を羽織った男が制す。

いつの間にか続々と人が穴から飛び出してきていた。

「死神…？」

容姿…性別…性格…全員異なっていたが、一つ全員共通しているのは…
死神だけが着用を許される死覇装を着ていた事…。

「君たち…先に進みたいんでしょう？だったら、ここは僕たちに任せ
てくれないかなあ？」

編み笠を被った男が、のほほんとした感じでいった。

「虚を倒すのは、僕たちの本業だし。

ほら、ルキアちゃんも阿散井君も聖闘士達といきなよ。

—護君を一番助けたいのは君たちでしょ？」

編み笠は黒髪で小柄な死神と、赤髪で変な眉毛の死神に向かって言
った。

グオオオン

高層ビルくらいの大きさの黒い虚たちが、
まるで「先に行かせない！」とでもいうかのように、前方に立ちふ
さがる。

「道は俺たちが作る。」

「その隙に進みなさい。」

小学五年生ほどの死神が刀を引き抜く。

その後に続くように、金髪に巨乳の死神・禿の死神が刀を抜いた。

「霜天に坐せ『氷輪丸』！」

「唸れ『灰猫』！」「伸びろ！！『鬼灯丸』！！！」

氷の龍が…灰のように形状をなくした無数の刃が…三節根が巨大な虚の群れを襲う。

「邪魔だ！失せやがれ！！」

「剣ちゃんゴーゴー！！！」

眼帯の死神もズバリズバリと切り刻んでいく。

「行くぞ！！！」

アイオリアがわずかに開けた道を走りだす。

続けてシユラ、カノン…阿散井にルキアの順で通り抜ける。

グオオオオオン

巨大な虚の口に集まる赤い光…

「まずい！虚閃だ！！」

ルキアの顔が蒼くなる。

「ここは俺に任せていけ！！」

アイオリアが列から抜け、小宇宙を高める。

「アイオリア！！」

「星矢とアズマを頼んだぞ！

ライトニング ボルト！！！！」

後方でする激しい爆発音。

(待っている…アズマー!!)

シユラは遠くで感じるアズマの小宇宙と霊圧に向かって走り続けた。

第二十四話：理由

第二十四話：理由

「お前：六車四席の仲間か？」

自分たちから少し遅れて走っているルキアという少女が尋ねた。

「…まあな。」

「まあなっというか、お前の弟子で思い人だろ？」

冷やかすようにカノンが言った。

「…ほう…そんなに細切れにされたいか？」

気の弱い人なら逃げ出したくなるような冷ややかな目でカノンをにらむシユラ。

「でもよお、お前…何人かの聖闘士見習いの指導してるけど、アズマだけ甘くないか？」

「それは彼女が女性だからだ。」

「あれを女と認識しているのか？ろくに胸もないし…
……からかって悪かった。」

シユラが急速に小宇宙を高めているのを感じたカノンはあわてて謝った。

「それにしても…なぜ死神たちがここに…？」

「私たちは一護を救いに来たのだ。」

「まあ、上の連中は違う目的で派遣したんだろうけどよ。」

「「違う目的？」」

カノンとシユラの声がはもる。

「ああ…なんでも、六車からの報告にあつた斬魄刀『霧雨』の持ち主は、

数十年前に王族の宝を持ちだし処罰された…らしいんだけどよ、

その宝『王鏡』が行方不明になったままなんだ。」

「つまり…それを探すためという名目で私たちは派遣されたのだ。」

「まあ、俺たちはそんなモンより、一護が心配だな。

あいつは俺たちを変えてくれた仲間だ。」

真剣な表情の阿散井…だったか…

「そついや、あんたらの名前なんだ？」

俺は六番隊副隊長・阿散井恋次。こつちは十三番隊の朽木ルキアだ。

「

そつえば、まだ紹介してなかった…。

「山羊座のシユラだ。」

「俺は双子座のカノン。短い間だがよろしくな。」

簡単な自己紹介をすませると、一同は走ることに再度、集中した。

目的地をめざしてひたすらに……

……一方その頃……

「……構える…松本…」

ルキア達の後を追っていた小学五年生サイズの十番隊隊長・日番谷冬獅郎は立ち止った。

自分のモノとは違う…冷ややかな冷氣……

「お前…聖闘士か!？」

目の前に現れたのは……虚ろな目をした赤髪の男……

「水瓶座のカミュ……ここから先にはいかせない……」

第二十四話・理由（後書き）

（死神図鑑ゴールデン聖域）

十三回目・処女宮 ？

シャカ「……ということだ……つまり……となる。また……」

コン「……（正座）……」

シャカ「…分かったかね？ 煩惱の塊よ。」

コン「（やっと終わった！）あぁ。もちろん聞いていたぜ！」

……コンは永遠とシャカの説法を聞く羽目になっていた。

ムウ「シャカ。騙されてはなりませんよ。

このエロぬいぐるみは途中で目がポケモンのヤド みたいに
離れていました。」

コン「なっ！！？ そんなわけ……」

シャカ「……どうやら私に対する畏敬の念が足りないようだな……」

コン「ひいひい……」

逃げたくても逃げられない……どうせシャカの速度にはかなわない
し、

出入り口にはムウの張ったバリアー……クリスタルウォールが張られている。

シャカ「大地に額をこすり付けて私を拝め!!」

コン「ぐほお!!」

地面とキスさせられるコン……だったが……

シャカ「？」

…コンは動かなくなっていた。

ムウ「……死にましたね？」

コンを振ってみるが、何も起こらない。

シャカ「つまらん。」

シャカはコンをほっぴらかして瞑想（つまり睡眠）に入ってしまった。

ムウ「……これはなんでしょうか？」

拾い上げたのは薄緑のあめ玉……

ムウ「……とりあえず……食べさせますか。
もったいないですし。」

私は食べる気しませんし、貴鬼にあげるのは不衛生ですし……」

飴玉をシャカの口に無理やり押し込むと、ムウは帰って行った。

シャカ「ふふふ……ありがとなムウ……」

あやしげに笑うシャカ……一体なにがおこったのか!?

〈続く〉

第二十五話：氷結の魔術師VS氷結の獅子

第二十五話：氷結の魔術師VS氷結の獅子

「水瓶座の…聖闘士だと？」

「隊長…セイントってこちらの味方なんじゃないんですか？」

「……もしかしたら……大前田と同じ現象かもな……。」

日番谷の脳裏に浮かぶ大前田…

…まるで誰かに洗脳されているかのように別人になってしまった彼…

「あのカミュという男の目には光がない。

…おそらく、大前田と同じように洗脳されている可能性が高い。

……先に行け松本。」

「！？でも隊長…」

「……代々、水瓶座は氷を扱うと聞く…

一度、手合せしてみたかったからな。」

斬魄刀・氷輪丸を構える冬獅郎。

カミュも小宇宙を高めている。

「行け松本！！…卍解！！！」

…冬獅郎の周囲に渦巻く冷気の嵐…

乱菊はそれに紛れる形でその場を走り抜ける。

「大紅蓮氷輪丸。」

冷気の嵐が収まり…冬獅郎の姿がはっきりとあらわになった。

「氷の翼か…」

カミュがつぶやく。

冬獅郎は巨大な氷の翼をまとっていた。…それだけではない。彼の後方に浮かぶは三つの氷の華…

「…（なんだ…あの華は…）…『オーロラエクスキュージョン』！」

手を前に伸ばし冷気を放つカミュ。

「『氷竜旋尾』！！」

対する冬獅郎も氷輪丸を振る。

氷で形成された斬撃がカミュのオーロラエクスキュージョンと宙でぶつかる。

「なっ!?!」

斬撃が軽々とカミュの攻撃の前に散り…

冬獅郎は氷の中に閉じ込められた。

「……………終わったな……………」

目を驚きで見開いたまま氷漬けにされている冬獅郎に背を向けるカミュ。

先に行った乱菊を追おうとしたとき…

「…さすが通り名が『水と氷の魔術師』というだけはあるな」

冬獅郎の声が響く。
まさか！！と振り返るが…彼は氷の中に閉じ込められたままの状態だった。

「縛道の六十三『鎖条鎖縛』」

「くっ！」

太い光の鎖が蛇のように巻きつき、身動きを封じられるカミュ。

「縛道の七十七『九曜縛』」

カミュの周り縦方向に八つ、胸に一つの黒い鬼道の玉のようなものが現れ縛る。

…完全に身動きを封じられたカミュ…

…なんとか首を後ろにまわすと…そこには平然と立っている冬獅郎。

「なぜ…」

「『残氷人形』…氷で自身の分身を作り出す技で、死覇装の皺など、細かな部分も精巧に作成可能だ。

…洗脳されているようだから命を奪いはしない…」

そついうと、カミュのまわりに出現する何本もの巨大な氷柱…

「これは…いつの間に…」

「…俺の氷輪丸は氷結系最強の斬魄刀…大気中のわずかな水分から氷を作り出すなんて動作もない。

…そこでおとなしくしてくれ…『千年氷牢』」

鍵をかけるように氷輪丸を回すと、カミュを取り囲んでいた氷柱が

一斉に重なり…

巨大な氷塊となり、カミュを閉じ込めた。

「お前の敗因は洗脳されていて冷静な判断が出来なかったことだ。」

…容姿こそ（認めたくないが）子供だが、仮にも隊長格…

この程度で負けるわけがないと本来のカミュなら判断していただろうが、

洗脳されていたので、そこまで頭が回らなかったようだ。

「…出来れば…この戦いが終わった後、もう一度、手合せを願いたい相手だな。」

中から出てくる気配がないことを確かめると、卍解を解き、先に進んだ部下を追う冬獅郎だった。

第二十六話：美しいものは…

第二十六話：美しいものは…

…黄泉比良坂…

…この世で苦しみ疲れ果てた亡者たちが、ズラリと並び、冥界へ通じる穴へとフラリフラリ歩いていく…

…この先に待っている更なる苦しみも知らずに…

…自身の意識もなく…ただ穴へ向かって歩く音だけが響くはずのこの空間に、響く人の叫び声…

「ぎいやあつあああ！！！」

「へっ！よく燃えてらあ。」

デスマスクは青白い炎で身体を焼かれているベロニカを楽しそうに見ていた。

…ベロニカは不死の肉体をもつオカマ…だが、ベロニカは積尸気冥界波の能力で、魂だけ連れてこられていた。

いくら肉体が不死でも、魂は不死ではない。

殴る・蹴るなどしていたぶつてもよかったのだが、さっさと地上に戻りたかったデスマスクは、

てっとり早く『積尸気鬼蒼焰』をベロニカにつかった。

小宇宙で燐気を操り生み出した…一見すると怪しげに青白く燃え輝く…

…見る者の心を奪う鬼火…

…それは魂を糧に永遠と燃え続ける…

デスマスクがこの術を魂のみのベロニカに使用した瞬間、このオカ

マの命運はすでに決まっていたのだった。

「ま…また…こんな蟹にいいいい！！！！」

奇声を上げるベロニカはみるみる間に灰と化していく。

…青白い炎が消えたとき…黄泉比良坂に静けさが戻った…

「…燃え尽きたか…相性が悪かったな。」

肩をまわすデスマスクだったが…一つ、疑問が芽生えていた。

(…なのであのオカマはあんなことを…)

奴は確かに『また』と言っていた。…それにこの戦いが始まる前にも、まるでデスマスクを知っているかのように話していた。

…八工の攻撃の時も、なにか恨みがあるかのように、デスマスクばかり狙っていた。

…だが、デスマスクはベロニカのことを、これっぽっちも知らなかった。

「まっ…気にしてもしかたねえか。」

そうつぶやくと、地上に戻った…

「……………」

皆と別れた橋に戻ったデスマスクは、あっけにとらえていた。高層ビルほどの高さもある、頭から黒い布状のものをすっぽりかぶり、鼻の部分がとがった仮面をつけている虚の軍勢に囲まれているからじゃない。

「意味わかんない！だいたい『バラ』美しい』という考えが古いんだよ！！」

「私も理解しがたいね！とくに君のその眉毛…正直うっとうしいよ。」

「理解出来ないだろうね！僕の優れた美的センスは。

「だいたい戦士なのにチャラチャラ髪の毛のばしちゃってさあ…邪魔でしょ！！！！」

「私の髪にケチつける権利なんて君にはない。

「君こそ、おかつぱ頭…何とかならないのかい？しかもツラみたいだし。」

「うぐう…これは事故だ事故！！」

「破道の三十一『赤火砲』！！」

「ドツカアン！！！！」

「ちっ…かわしやがったか…その髪をチリツチリにしてやるうと思つたのに…」

「危うく当たるところだったじゃないか！！」

「君の髪をきれいにカットしてあげよう…『ピラニアン ローズ』！！」

「ズババババン！！！！」

「人の好意を無駄にするのか！？」

「うわあ…ひくう…黒いバラをハサミ代わりにするなんて…」

…何やら虚そつちのけで言い争いをしている二人組…
片方はデスマスクの友人・魚座のアフロディーテ…もう一人は知らない死神…

「おい、あいつらどうしたんだ？」

そばで縮こまっている、これといって特徴のない死神に尋ねてみた。

「す…すみません！！なんかすみません！！」

命だけは御助けを！！！！！！」

「俺は蟹座のデスマスク。…あの聖闘士の友人なんだけどよお…そんなに怖がらなくても…」

「あつ…僕は四番隊の山田花太郎です。」

今回はまあ…いわば治療要員でここに来て、綾瀬川五席と一緒にこの橋で待機をすることになったまではよかったです…

…その時、あのアフロディーテと名乗るセイントが来て…

最初は友好的に情報交換をしていたんですが…

…互いの『美意識』が合わなかつたらしく…

そうこうしている間に、あそこの虚圏につながる穴から大量の大虚が現れて…

でも、言い争いは止まるどころかエスカレートしちゃって…

…まあ…大虚倒しているからいいんですけどね…あはは…。」

そう花太郎が語っている間にも、綾瀬川にむかって放たれたアフロディーテの黒バラが避けられて、大虚数体を切り刻み、

反対にアフロディーテにむかって綾瀬川の放った鬼道も避けられ、こちらで大虚数体を滅していた。

「…まあ…ああなったら止められねえな。」

あっちで、のんびり見物してるか。」

「うわぁー!!」「」

デスマスクは花太郎の襟をつかむと喧嘩の被害が及ばないところまで退却をすると、

黄泉比良坂に隠しておいた秘蔵の酒とつまみを片手に、まるで芝居を楽しむかのように、喧嘩を眺めていた。

第二十七話：再会

第二十七話：再会

「やっと会えたねアズマ。」

白い覆面の男がたたずんでいる。

アズマは斬魄刀の柄に手をかけながら、男が佇んでいる水たまりに足を踏み入れた。

「何者だ？」

「僕を忘れたの…アズマ？」

覆面をとる男…そこから現れた素顔を見たアズマの目は大きく見開かれた。

「バ…バカな…先輩は…いや…お前はあの時…私が殺したはず…」

「そう…僕は五月雨 霖…」

数十年前に君に殺された男…でも生きてたんだ。

言ったでしょ？『また、会おう』って。

僕は、君に会うために戻ってきたんだ。」

ニッコリほほ笑む霖…。

アズマはジロリとにらむと一気に斬魄刀を抜き放ち、刃を霖に向けた。

「任務は失敗してたとういことか…」

なら、ここでお前には死んでもらう。」

「君には僕を殺せないよ。
破道の四『白雷』」

霖は指先から一条の雷を放つ。
アズマは瞬歩を使いよける。

「縛道の二十一『赤煙遁』」

両手を地につけるとポワンッと赤い煙幕が周囲に広がった。

「…目隠ししても無駄だよ…」

破道の五十八『?嵐』」

竜巻をおこし、煙幕を吹き飛ばす…が、アズマの姿はどこにもなかった。

ぐるりとあたりを見わたす霖。

「縛道の六十一『六杖光牢』!」

「!?!」

後方から鋭い声がとんだと思ったら、
六つの帯状の光が、霖の胴を囲うように突き刺さり動きを奪う。

「…なるほど…御先狐の力で姿を消していたのか…」

いつの間にか後ろにいたアズマの斬魄刀…御先狐が始解状態に変形しているのを見て、苦笑をこぼす霖。

「その通り…終わりだ。」

躊躇なく御先狐を霖に深々と刺す。
ピチヨン…ピチヨン…と斬魄刀を伝い、真紅の血が足元の水たまりに落ちる。

「ア…ズマ？」

血の滴り落ちる口から発せられる言葉…

「…なぜ…」

「えっ…」

その時、アズマは始めて気が付いた。

その事実気づいたとき、アズマの目がこれまでにないほど大きく開いていた。

なぜなら、六杖光牢で動きを封じ、たった今、致命傷を負わせた相手は…

「シ…シユラ！？」

そんな…さつきまで…」

「僕の斬魄刀の力…忘れたの？」

おそるおそる振り返ると、そこには平然とした霖が立っていた。

「僕の霧雨が生み出した水たまりだよ。…幻術作用がないわけがないだろ？」

「君がいままで僕だと思って戦った相手は、彼だったんだよ。」

「…いや…」

シユラの全体重が斬魄刀にかかり、一気に重みを増した。

彼の目はもう、何も見ていない…ダラリと聖剣の宿る腕も垂れてし

まっている。

「…いや…」

もう、大切なものはいらなくなって…兄を失って…犯罪者となった霖を切ったときに心に固く誓ったのに…

数十年間、ただひたすらに、感情を押し殺して、かわりを最小限にして生きていたのに…

こんなにも簡単に崩れてしまうなんて…

「いやああっああ!!」

壊れたように叫び声をあげるアズマ。

「よし、いまだブレン。」

「了解だ、旦那。」

ぴょんつと飛び跳ねてアズマと霖に近づく一人の少年…ブレンの手には弥生時代を思い浮かべるような鏡を抱えていた。

「いけえ王鏡!!その悲しみを吸い取れ!!」

すると、叫び続けるアズマから現れる黒いオーラ…それはみるみる間に王鏡の中へと吸い込まれていった。

「きれいな黒だったね…アズマ。」

すべてのオーラが吸い込まれると、糸の切れた人形のようにバタリ…と倒れるアズマ。

…あたりが静まり返った…ただ、遠くで争う音だけが聞こえてくる…

「…もう一応、君は用済みだ。…行くよブレン。」

倒れたまま動かないアズマを残し、霖はブレンを連れて、虚圏のさ
らに奥へと消えて行った。

第二十七話・再会（後書き）

〈死神図鑑ゴールデンin聖域〉

十三回・処女宮 ？

シャカ「フッフ…ありがとなムウ…」

これで…この体は俺のモノだぜ！！！！」

シャカがそう叫ぶ…いや…正確にいうならば、シャカの身体を奪ったコンが叫んだ。

コンの本体は丸薬の形状をしている。

その丸薬が肉体に入った時のみ擬似人格を持つ魂魄として作用する特殊な道具なのだ。

…ちなみに、シャカは瞑想のため、魂だけが別次元にいつている。

だからやすやすと体の支配権を手に入れられたのだ。

コン「さてと…まずはっと…」

コンが向かうのはシャカの寝室…

コン「実は二十歳でアルデバランやアイオリアと同じ年のシャカ。アイツの化けの皮を剥いでやるぜ。」

「ごそごそ…と探そうと思ったが…」

コン「……これが二十歳男の部屋か…？」

…中学生の五つ児が余裕で寝れるような巨大ベッドを三つ置いても、まだスペースがかなりあまるんじゃない？つてくらいある部屋…

しかし…

コン「なんで仏像しか置いてねえんだ!？」

奈良の大仏のような仏像がデンっと中央に置いてあるだけの質素な部屋…

…布団もタンスも机もない…

コン「っーか、この状態でどうやって生活しているんだ!？」

…もちろん、だれもないのだから、この問いに答えてくれる者はいない。

コン「しかたねえ…次の宮に行くか…」

シャカが帰ってきたときに、コンが身体にいたら、シャカがどんな行動をとるか…考えたくもない!!

シャカの身体を脱ぎ捨て、自身のぬいぐるみに戻るコン…

目指すは天秤宮!…不在じゃないといいな…

〈続く〉

後日談…

一輝「…通るぞシャカ…!？」

城戸沙織に呼ばれて十二宮を通過していた不死鳥座の聖闘士・一輝。彼が処女宮を通過しようとしたときに見たモノは、屍のように横たわるシャカ…

一輝「あのシャカが死んでる！！」

シャカ「死んでなどいない。」

丁度魂の戻ったシャカがムツクリと起き上がる。がっかりした顔をする一輝だったが…

シャカ「そうだ一輝よ…そろそろ我が乙女座の聖衣を継ぐ気になったのかね？」

一輝「断る！！！」

シャカ「そう嘘をつくな」

一輝「ウソなどついていない！！ええい離せ！！」

シャカの強引な勧誘（？）にホントに死んでればよかったのに…と
思っ一輝だった。

第二十八話：集い

第二十八話：集い

「あつ！終わったの？」

岩の上に腰をかけていた女：レイナの顔が、近づいてくる二人の人物を見た瞬間に、明るくなった。

「ああ…とりあえずはな。」

大事そうに王鏡を抱えるブレンが答える。

「…まだ生きてるじゃん。」

霊圧を探ったレイナが顔をしかめた。その顔を見た霖がフツと笑みを浮かべる。

「本当にしぶといな。吸い取れきれないとは…

あと数刻もしたら目覚めるだろう。」

「どうしますか？殺しますか？」

ブレンが霖を見上げる。

「…そうだな。それはお前たち姉弟の判断に任せる。

僕は同志になりそうな奴のところに行かないといけなからな。

…ハリベル！！」

大きく通る声を出す霖。

「…お呼びでしょうか、霖様」

現れたのは金色の髪に褐色の肌をもつ女性破面がひざまずいた。

「今から一緒に来てもらう。いいか？」

「はっ！霖様！！」

「ありがとう。」

じゃあ、ここは僕がいない間、よろしく頼むよ。

くれぐれも、僕が帰ってくるまで、ここに死神と聖闘士を近づけないように。

いいかい？」

「了解！！」「」

霖がハリベルを連れて去っていく。

「…で、どうする？アズマって女。」

「…判断に任せる…か」

まあ保留ということだ。…もともと、僕たちが命じなくても、誰かが殺っちゃうかもしれないけどね。

…そういえば、姉ちゃんの手駒って、あと何人？」

「…実は一人なんだわ。…まあ、イケメンで強いけど、こいつに負けるくらいだからね…」

自分の後方にある柱をコンコンと叩くレイナ。

柱に縛り付けられているのは、全く動かない黒崎一護…

ちなみに、その隣の柱には、同様に縛り付けられて気を失っている、星矢の姿があった。

「じゃあ、ソイツをこっちに向かっていている死神・聖闘士の足止めに向かわせて欲しいな。」

「ちよつと!!じゃあ何!?私はまた、新しい手駒を探さないといけないくなるじゃない!!」

ブレンにつめよるレイナ。ブレンは困ったように笑みを浮かべる。

「実は、姉ちゃんが餌を家に帰しに行った間に、ある人たちを呼び出したんだ。

…もつとも、杵馬やベロニカとは違って、従えさせるために旦那の力を借りたけど…

そいつらは、本気でここを護る事に命を懸けてくれる…はず。

だから、連中があんまりにも暴れるようなら…自主的に動いてくれる。

…実際に、もう動いているみたいだしね。」

レイナは目を閉じ…小宇宙を探った。

「…確かに…新しく加わった小宇宙のうち…二つが、アズマが倒れている地点に向かっているわね。

…なら、しばらくは問題ないか…」

「おい!!麻呂眉姉弟!!」

グリムジョーがものすごい剣幕で怒鳴りこんできた。

「俺は、一護ともう一度、戦えるって聞いたから協力してやったのに…なんで縛り付けられてるんだ!？」

「ああ…そのことか…」

なるほど〜という顔をするレイナ。

「……こちらの計画に使ったら、すぐにこいつは解き放つ。だからもう少し協力してくれ。」

「ちっ…仕方ねえ…もう少しだけ待ってやる。」

唾を吐くと、グリムジョーは去って行った。

「……ほんとに約束まもるの？」

「まさか！！……使えなくなったら……処分するだけだよ。」

「意地悪いな……」

「姉ちゃんに言われたくないな。」

二人の姉弟の笑い声が、響き渡っていった。

第二十九話：桜吹雪を越えて…（前書き）

第三章終章です。

オリキャラもつくしました。

次の章は……まだ、最終章にはならないと思います。

これからも、よろしくお願いします。

それでは、どうぞ。

第二十九話：桜吹雪を越えて…

第二十九話：桜吹雪を越えて

「兄様！？」

ルキアが思わず叫んだ。

…一同の前に降り立った、肩にかかる程度の長さの黒髪死神の男性を見て…

「兄…なのか？」

カノンがそつと尋ねる。

「ああ。こいつの義理の兄で六番隊隊長…朽木白哉…

隊長！そこを通してください！！」

「……………」

恋次の問いに何も答えない白哉…

目が虚ろで…光がなかった。

「……………散れ…千本桜……………」

白哉の手にした斬魄刀…千本桜が…まるで桜が散るように消えていく…そして…

「あぶねえルキア！！」

ルキアを押し飛ばす恋次。

「ぐわあ!!!」

恋次の身体が瞬時に切り刻まれる。ルキアの顔が蒼くなった。

「恋次!!!」

「一体…なにが…」

「…隊長の千本桜…能力解放と共に刀身部分が無数の刃となって舞い散り、対象を斬り刻むんだ。」

「なるほど…その刃が光に当たっていたから、桜が散るように見えるたのか…」

納得するシユラ。…思いつきり恋次が白哉を睨みつけた。

「隊長!!!なんであんたはルキアを狙ったんだ!?あんたの義妹でしようが!!!」

「…兄けいには関係ないことだ。」

刀身を元にもどす白哉は冷たくそう言い放つと…刃を下に向けた。ドキリつとするルキアと恋次。

「なんだ?なにをするつもりなんだ!??」

当惑するカノン。シユラも何が起きるか分からないので小宇宙を高め、手刀を構えた。

「やめる隊長!!!卍解!!!」

ものすごい渦が恋次を包む。

そして、渦が収まったとき、斬魄刀は巨大な蛇の骨の様な形状に変化し、恋次自身は狒狒の骨と毛皮を身に纏っていた。

「狒狒王蛇尾丸…恋次の卍解だ。」

ルキアが解説をする。

「行け！！ルキア・シユラ・カノン！！」

「しかし…」

「さつさと行きやがれ！！ここで俺は、副隊長として…隊長の目を覚まさせねえとなんねえからな！」

怒鳴りに近い声を上げる恋次。ルキアは少し唇をかんだが…

「すまん、恋次！！」

ルキアが真っ先にかけて始めた。それに続くはシユラにカノン。

「…縛道の…」

「させるかよ！！」

鬼道を白哉が放つ前に蛇尾丸を操り、白哉につっこませる恋次。

「…………邪魔だ…………卍解…………」

すつ…………と手を放し、地面に向かって放り落とす。

刀は地面に吸い込まれるように消え、それと同時に足元から巨大な千本の刀身が立ち昇った。

ゴクリ…と唾を飲む恋次。

「…来たか…」
「……千本桜景厳……」

巨大な千本の刀身が、一斉に舞い散り、桜色の洪水のようになって、恋次に襲い掛かる。
とっさに蛇尾丸でガードしようとするのだが……

ズバアッ

一歩間に合わず、蛇尾丸ごと恋次を、数億の桜色に染まった刃が切り刻む。

「ちくしょ……」

唇を噛みしめる恋次…足止めになかなかなかった自分に腹が立った。
それから…あの頃から全然成長していない自分にも…

「終わりだ……」

桜色の濁流が襲い掛かってくる。思わず目を閉じる恋次だったが…
一向に、何も起こらない。

「平気か、変眉。」

目をあけるとそこに映ったのは…黄金の光…
双子座のカノンだった。

「なんで……」

「なんか気になつてな。」

それに、あいつってサガに似てる気がするから、ぶっ飛ばしたらス

トレス発散になりそうだしな。」

ゴキリ…と腕を鳴らすカノン。
それを冷ややかに見るめる白哉…。

「……やれ……千本桜……」

「いくぜ、ギャラクシアン エクスプロージョン!!」

桜色の濁流と隕石がぶつかりあう。

恋次はただ、巻き込まれないように、遠巻きで見ていることしかできなかつた。

――その頃――

「おっ！あんなところに倒れてる死神がいるぜ？」

一面の水たまりが広がる一角に、倒れている銀髪の女死神…

「待て、あの水がどうにも怪しい。……容易に近づくのは危険だ。」

「なら、どうすんだ？」

「……こうするしかないだろ。」

スッ…と手を前に出す…そこから出るは凍気…

みるみる間に、水が凍りついていく…

「さて…これで近づくか。」

「ああ。」

カッン…カッン…二人の足音が氷の上を移動していく…

第三十話：水の眷属と鬼の降臨（前書き）

この回からLの聖闘士登場です！！

水の眷属っていつても、この回で登場するのは二人だけですが…

鬼というのは、カノン島の鬼ではないです。

尸魂界の鬼です。

これからもよろしく願います！！

第三十話：水の眷属と鬼の降臨

第三十話：水の眷属と鬼の降臨

…寒い…非常に寒い…

…まるで…雪の中に埋もれているような…

「…いい寝顔じゃねえか。」

「…お前なあ…。」

頭上から…声が響いてきた。

「…カミュ？ミロ？」

うつすらと目を開けると、そこにいたのは…水瓶座の聖衣を着た人と蠍座の聖衣を着た人。

小宇宙の感じがカミュやミロとそっくりだが…どこかが違う…

「おっ！目が覚めたか…死神。」

「…ミロ…じゃないな。誰だお前…。」

力の入らない身体を無理矢理起こすアズマ。

震える手で斬魄刀を握り込む。

「へえ…やるのかい、お前。」

「質問に答える。なぜ、黄金聖衣を着ている？」

「そりゃあ、黄金聖闘士だからに決まってるんだろ？」

ミロにそっくりな…でも、髪の色が少し違う男が言った。

「俺は蠍座の黄金聖闘士・カルディアだ。んで、お前はなんていう名前だ？」

「まあ、どうでもいいや。さっさと吐かせてやるぜ…アンタらの黒幕をな！」

「!？」

カルディアの目が光ったのを見たアズマは、とっさに後ろにはね飛んだ。

「すばしっこいな。」

赤い爪をピクピク動かすカルディア。

「…スカーレット ニードルを食らうのはもう、こりこりだからな。」

苦笑するアズマ。…シユラとの修行の合間に、暇だったからミロとした模擬戦…

アレを6発もくらってしまい、最終的に瞬間を使うはめになってしまった。

碎蜂とやっていた組手で、『同じところ』に当たらないように避けるのは得意だったのだが…

「へえ、知ってるのか？俺の技…誰に聞いたんだ？」

「聞いたも何も、あんたにそっくりな黄金聖闘士が使ってるんでね。」

「偽物の俺の技ってことか…じゃあ、本物の真紅の衝撃を味わってみるか？」

「…俺を熱くしてくれよ、死神!!！」

「くっ!!」

的確に打ち込んでくるカルディア…小宇宙全開で避け続けないと…
少しでも気を抜いた瞬間…終わってしまう…

「縛道の六十一『六杖光牢』!!」

六つの光でカルディアの動きを止めるアズマ。

「…お前…何者だ?偽物だの…黒幕だの…霖の手先なんだよな?」

「リン?だれだそれ?…俺達が仕えるのはアテナ様だけよ。」

「その通りだ。」

「!?!?」

背中に感じる冷気…次の瞬間、氷の輪がアズマを捕えていた。

…氷の輪…カリツォー…水瓶座の聖闘士・カミュの技だ。

「…カミュ…いつの間に染めたんだよ…」

赤髪ではない、浅葱色の髪をした水瓶座の聖闘士がいた。

「カミュ?…誰のことだ。…私の名は水瓶座のデジエル。」

…一体…何が起きている?…まだ、霖の幻術の中なのか?

「おい!デジエル!!俺の獲物をとるなよな!!」

カルディアが力づくで縛道を解いていた。…本来、死神でも解くために腕を一二本、折ることを覚悟しないといけない…それを気にすることなく、無傷で解いてしまう聖闘士…

もう、驚かなくなっていた。…奴らは人間の規定外なのだ。

「…カルディア…ただ、拘束しただけだ。逃げられては困るからな。」

「…まあ…そつか。んじゃあ、楽しい拷問の時間だ。」

「拷問は嫌だな。」

手に小宇宙を集中させて…思いつき振り上げる。

パシィン！！

カリツォーを破るアズマ。デジエルは驚いている。

「おいおい…いまの技ってエルシドの…」

「いや…彼の手刀は、もっと研ぎ澄まされている…本気で行くぞ、カルディア。」

「言われなくても行っちゃらあ！！」

「面倒だな…」

右手に斬魄刀…左手は手刀を構えて二人の攻撃を待つアズマ。今にもカルディアの攻撃が迫ってくる…

「アズマ！！」「六車四席！！」

後ろから聞こえる声。一同の動きが止まった。

「十三番隊の朽木！？それに…シユラ！！？」

「大丈夫ですか？六車四席。」

「ああ…つてか…なんで生きて…」

「？何を言っている？」

「…そうか…たく…趣味の悪い幻術だったんだな…」

ハハハ…と力なく笑い、手を頭にさせるアズマ。ルキアとシユラは状況がつかめずポカン…としている。

「おい！エルシド！！何話してんだよ！！」

「…よく見る…あれはエルシドではない…おそらくアテナ様のおっしゃっていた、私たちの偽物だ。」

カルディアとデジエルがなにやら話している。

「…シユラ…あれって本物の黄金聖衣か？」

「…ああ…本物だ。…一体どうなっている？」

思案顔のシユラ。ルキアが刀を引き抜く。

「考えるのは後ではありませんか？…向こうはこちらを攻撃する気です。」

「…まあ…そうみたいだな。痛い目合わせてから、霖のことを吐いてもらう。」

「！？五月雨と会ったのですか！？」

「…まあな。…ん？…この霊圧…」

大気を震わす巨大な霊圧が迫ってくる。

他のメンバー…霊圧を感じられないデジエルとカルディアでさえ、巨大な何かが、ものすごい勢いで近づいてくるのを感じた。

サアーとアズマの顔が蒼くなる。…間違いない…この悪寒を呼ぶような霊圧は…

「見つけたぜ…強そうな奴…」

チリン…とその者の髪の毛の鈴が鳴る。

眼帯をしたそいつは、ボロボロになった斬魄刀をデジェルとカルデ
イアに向けた。

「ひさしぶりだな、六車…てめえとも殺りあいてえが…いまは後回
しにしてやる。

…強えのは…どっちだ？」

尸魂界の鬼…十一番隊・更木剣八がニタリとした不敵な笑いを浮か
べた。

第三十二話：氷上の乱舞（前書き）

今日はデッちゃんの誕生日…で、番外編を考えていたのですが…
ムリでした…オチが思いつかなかったです…。

フツーに本編に入ります…。

第三十二話：氷上の乱舞

三十一話：氷上の乱舞

「更木…隊長…」

…身体が震えているのが、分かる…

これは…恐怖だ。…そう、以前、彼の目の前で、絡んできた十一番隊隊士数名をまとめて始末したのが原因で、よく追い回されているのだった。

…隊士を倒した恨みではない…ただ、強い奴と命の取り合いをしただけ…

前十一番隊隊長の鬼蔵城剣八より、この更木剣八の方が恐ろしい…『鬼』が降臨…いや、地獄から這い上がってきたモノが人の形をしている…とても現したらいいかもしれない。

とにかく、『戦いたくない奴』の分類に間違いなく入る男だ。

「…アズマ…どうした？」

今までにないほど、ひきつった顔をしているアズマを心配そうに見るシユラ。

「え…ぜ…全然大丈夫。…それより…ほんとに任せていいんですか？」

「ああん？お前が先に殺りあいてえのか？」

「滅相ありません！…！」

ブンブンとものすごい勢いで頭を振るアズマ。

「わ…私は先に行かないといけないし…ここはお願いします…ね、シユラにルキア!!」

同意を求めるアズマ…

「まあ…だが、二人相手にしても大丈夫なのか？仮にも黄金聖闘士だぞ？」

「…それならば、私も残ろう。」

「ルキア!？」

覚悟を決めた顔のルキアが、斬魄刀を引き抜いた。

「…霖とやはらは六車四席が、油断すると負けてしまう程の手練れ…四席のサポートをしやすいシユラ殿が先にすすんだ方がいいに決まっている。」

…構いませんか？更木隊長…片方は私がやります。」

「…ツち…好きにしる…ただ、邪魔になるようだったら殺す。」

「いいなあ…その考え…俺も同感だぜ。」

カルディアが笑った。赤い爪を剣八に向ける。

「おい、デジエル!!あの眼帯鈴野郎は俺がやる!!」

「…はあ…好きにしる。」

「なんだ？てめえか…楽しませてくれるんだろうな…聖闘士!!」

「そつちこそ、俺を熱くさせてくれよな…死神!!」

「じゃあ…死ぬなよ…朽木」 「……ここは頼む……」

氷の道を振り返らずに走り抜けるアズマとシユラ。

「…舞え…『袖白雪』」

ルキアの刀が、刀身も…柄も…柄頭に先に付いた長い帯も…まるで雪を思わせる純白に変化する。

「次の舞…『白漣^{はくれん}！』」

刀で地面を四ヶ所突き、そこから強大な凍気を一斉に雪崩のようにデジェルにむけて放出する。

「…なるほど…お前も氷か…『オーロラエクスキューション』！！」

両腕を前にだし、まるでオーロラを連想させる冷気を放出するデジェル。

ズバアアアン！！！！

冷気と冷気がぶつかり合い、相殺され、あたりが白い霧のようなモノに包まれる。

「あつちは始めたか…んじゃあ来いよ。」

刀は抜いたが、攻撃のそぶりをまったく剣八は見せてない。

「…なめてんのか？」

「んなこったあ、どうでもいい。それよりさっさと来いよ。腹でも頭でも、てめえから先に来いや。」

「…後悔すんじゃねえぞ！！」

いきなりスカーレット ニードル、十五発の内、五発を撃ち込む。

「くっ…なんだこりゃ…」

突然開いた、小虫が開けたような五つの穴…膝をつきたくなるくらい痛みが奔った。

「どうだ？俺の技…スカーレット ニードル…」

この蠍の真紅の針は人間の中枢神経に激痛を呼び起こす。

蠍座の星の数と同じ15発…すべてを打ち込む間に『降伏』か『死』かを迫る…

…まあ、てめえにはそんな選択あたえなくてもいいか？」

赤い爪が光る。…が…

「へえ…面白れえ技じゃねえか！」

剣八は…笑っていた…

「つまりは、かわしててめえをブツ斬ればいいだけの話だ。」

「お前…正気か？」

ゾクリ…としてしまうカルディア。

剣八という男は、カルディアが放った技に気が付いていなかった。つまり、どう考えても、カルディアのほうがはるかに上の速度…なのに…なぜ不敵にも笑ってる？…奥の手でもあるのか？

「…っ…なめるな…！」

一瞬感じてしまった恐怖を消すと、
カルディアは笑みを浮かべたままの剣八に向かって行った。

三十二話：二人の天才児（前書き）

LCの天才児とBLEACHの天才児の戦いです。
…それではどうぞ。

三十二話：二人の天才児

「大丈夫なのか？」

「更木隊長と朽木か？」

走りながらうなずくシユラ。

「朽木は…隊長に巻き込まれない限り死なないよ。運は強い奴だからな。」

「そうなのか？…だが…あの更木という隊長は、頭に鈴を…それに眼帯もしている。」

視界が悪いうえに、鈴のせいで相手に位置を悟られて…」

「大丈夫だ！！」

きつぱりと言い放つアズマ。

「…問題ない…あの化け物は死なん！！！」

「…根拠はあるのか？」

「…以前、『どつからでもいいから斬れ。罪にはとわねえしな』って言われたから斬った…が、斬っても斬っても…倒れなかった…あゝ逃げるの大変だったなあ…」

あはは…と力なく笑い、遠い目をするアズマ。

…アズマにこういわせる更木って…と思い、背中がゾクツとしたシユラだった。

第三十二話：二人の天才児

「あゝあ、なんで感じられないんだ？」

少年の声を聞いたような気がした日番谷冬獅郎は立ち止った。

「確かに、あの時は大地を感じられたのに…」

「やっぱ、肉体があるからかなあ…でも、死ぬわけにはいかないし…」

見ると、向こうの岩のふもとで何やら思案している少年がいた…黄金聖衣を着た…

「（…洗脳されている…わけではないな）…何者だ？」

「ん？…死神か？」

少年は冬獅郎に気が付いたみたいだ。

「…獅子座の黄金聖闘士は…先程見たときは20位の男だったんだがな…」

大虚にむかっていった聖闘士が脳裏に浮かぶ。

キョトン…とする少年…

「何言ってるんだ？俺はずっとこのままだぜ？」

…何て名前なんだ？俺は獅子座のレグルス。」

「（…嘘はついてないみたいだな…）…十番隊隊長…日番谷冬獅郎だ。」

…そこを通してほしい。」

「それはダメ。死神は通せない！」

「…なら…力づくで行くまでだ。」

すでに始解状態だった氷輪丸を振り下ろすと、氷の龍がレグルスを襲った。

「デジエルみたいだな…いくぜ!!」

拳を放つレグルス。…あつというまに氷の龍は粉々に散ってしまった。

「…やはり黄金は一筋縄ではいかないか…卍解! 『大紅蓮氷輪丸』
!..!」

さっさと片付けたかった日番谷は卍解をした。目を丸くして卍解を見つめるレグルス…

「すごいな…氷の翼かあ…」

「感心していると…死ぬぞ。『千年氷牢』」

突如現れた巨大な氷柱が一斉に重なって…氷塊となりレグルスを閉じ込める。

これで終わったか…と思っただが…

…ビシイ…バリイーン!!

内側から黄金の光が輝き始めたかと思うと、一斉に氷が砕け散った。

「馬鹿な…どうやって…」

「俺のライトニング プラズマでね。」
拳を見せるレグルス。

「いやあ…あんだ、強いな…でも、俺はあんたを越える。
今までの奴も戦いの中で越えてきたんだ。」

レグルスの脳裏に浮かぶはバイオレート…ラダマンティス…名もなき冥闘士達…

「俺を越えるか…出来るかな。」

「やってやるさ。…可能性は無限大なんだから！
…それに…もうすっかりアンタをみたしな。」

小宇宙を高めるレグルス…さっきのライトニング プラズマを撃つ
た時とは違う高まり方をしていた。

……小宇宙に目覚めていない冬獅郎は、言い知れない不安感を抱いた。

「…何をする気だ…」

「いっただろ？…俺はお前を越えるって！！」

そう言ったとき、あたりを冷気が包み込む。

「バ…馬鹿な…！？」

冬獅郎のまわりを囲むのは…巨大な氷柱…

「ほら越えた！！」

冬獅郎がしたように鍵を回すような動作をする。

すると…一斉に氷柱が冬獅郎を閉じ込めた。

「…終わったみたいだね…ん!？」

後ろから襲い掛かってくる氷の龍を避けるレグルス。

みるとそこにいたのは…閉じ込められたはずの冬獅郎…

「へえ〜抜け出したんだ。」

「いや…あの中にもいたのは俺の残像…とでも言っておこうか。それよりも…なんで…」

「だから！越えたんだってば!!」

あんたの力…なんとなく水瓶座のデジエルの能力と似てたから、デジエルの小宇宙を思い返して、

マネして高めて…あとはあんたのマネしただけ。」

「マネをしただけ…か…」

簡単に言ってくれる…冬獅郎は氷輪丸を握りなおすと、チラリ…と後ろの氷華を見た。

…すでに半分が散ろうとしている…

仕方がない…やるか…

「…それなら、もう、お前は俺を越えられない…」

「なんでだ？」

急に二人の上空だけ、灰色の雲が発生し、月を隠していく…。

「なぜなら、この技は、氷輪丸の最大の特徴にて、この刀が氷結系最強と謳われるゆえんだからだ。」

…それから…この技が発動してから…生きていた奴は一人しかいない…。

…もつとも…そいつは自身の力で生き残ったとは言い難いがな。」

冬獅郎の緑色の凍てつくような目がレグルスをじっと見た。

「…『氷天百華葬』…」

技の名を唱えると、粉雪がはらはらと降り始めた。

「シロちゃん…」

その光景を遠くから見ている人影があることに、まだだれも気が付いていなかった。

第三十三話・冬の華・夏の華・春の華

「お前：アズマの上司なのか!？」
「そうだよ。」

まじまじと女物の羽織をまとっている死神：京楽を見るアイオリア
…。
二人はあらかたの虚を倒したので、その場を副隊長格にまかせて、
先に進んでいた。

「アズマちゃん、元気？」
「まあ…元気だな。だいたい修練場で修行している。
…一回、凍死しかけたこともあったが…まあ平気だ。」
「凍死?…ってことは、水瓶座の聖闘士の仕業？」
「ああ…って…知ってるのか？」
「ちよつとね。…ん？」

少し向こうに灰色の雲がかかっている。
それを見た京楽は少し編み笠を下げた。

「なんだ?さつきまで、雲一つない夜空だったのだが…。」
「安心しなよ。あれは日番谷隊長の技だから。」
「…つまり、お前の仲間か…ん？」

少し驚いたような顔をするアイオリア。

「どうしたんだい？」

「いや…丁度あそこから感じる小宇宙が俺のとそっくりな気が…気のせいかな。」
「そこで止まってもらおう。」

鋭い声がとぶ。声の主がまっすぐこちらに向けて矢を構えている。

「お前は!?!」「君は!?!」

アイオリアと京楽の表情が変わった。

第三十三話：冬の華・春の華・夏の華

「なんだこれ…!」

急に広がり始めた灰色の雲を見上げるレグルス。

「『天相從臨』てんそうじゅうりん…氷輪丸が氷結系最強と言われる由縁だ。

天候を操ることができるとも、もっとも、まだ完全に制御はできないが…後ろの花弁が半数になっていて助かった…。そうじゃねえと、周囲を巻き込むかもしれねえからな…!」

「…つまり、奥の手ってやつか…来いよ!俺はそれを越えてやる!」

「残念だが…それは無理だ。」

灰色の雨雲に穴が開き、そこからちらほら降り始めた粉雪…その雪がレグルスの足にあたった瞬間…

「なんだよこれ!？」

当たった場所に咲く氷の華…

氷をはらおうとするレグルスだったが、量を増す粉雪に当たった場所に次々に氷の華が咲いていく。

「…その雪に触れた瞬間、咲く氷の華…百輪の氷の華が咲き終える頃には相手の命は消えている…」

「つつ!」

「氷天百華葬ひょうてんひゃっかそうとはそういう技だ。

…悪いな獅子座シオ…先に進ませてもらう。」

氷の華で作られた塔のようなモノに完全に埋もれたレグルスを見届けた冬獅郎は、卍解を解いた。

「!?!」

突如、空気が震えた気がした。あわてて振り返ると、百輪の氷の華の中心からあふれ出す金色の光…

「ったあああ!!!」

パライイイイイン!!!!

黄金の光に包まれたレグルスが氷の華を弾き飛ばした。

「はあ…はあ…どんなもんだ。」

レグルスは、肩で息をしている…が、目は爛々と夏の太陽のように輝いていた。

「なるほど…小宇宙というのを全開にして弾き飛ばしたか…」

しまいかけた斬魄刀を握りなおす。…もう、あの技をやるだけの靈力は残っていない…

…さて…どうするか…

「シロちゃん？」

後方から聞こえる声…はつと振り返ると、そこにいたのは…お団子頭を布と紐でまとめている小柄な死神の少女…

「雛森…？なんでここにいるんだ？」

「うん…王鏡を取り返すことが、今の十三隊の第一使命だから…

…藍染隊長のいない今、私は…五番隊の隊士をあずかる者だから…それに、いつまでも十二番隊の人に迷惑かけられないよ。」

少し笑顔を見せる五番隊副隊長・雛森 桃…だが、顔色が悪く、目も少し充血していて、クマまであった。

「…まだ、本調子じゃない。休んだ方がいい。」

「ありがとう…でも、シロちゃんには悪いけど、私も戦わないといけないから…」

そう言うとレグルスの方を向く雛森…足が少しふらついている…

「（…今、雛森を戦わせたらずい…）…霜天に坐せ『氷輪丸』！」

柄尻に鎖で繋がれた龍の尾のような三日月形の刃物が付いた形状に斬魄刀を変化させると、レグルスに突っ込んでいく冬獅郎。レグルスも拳を構え…小宇宙を高める…

「「!?!?」」

その時だった。黄色く光る網のようなものが、レグルスと冬獅郎のまわりに張り巡らされていた。

「これは…」

「ごめんね…シロちゃん…」

蜘蛛の巣のように張り巡らされた糸の先端は…雛森の肩についている、副官証についていた。

そこに刀を当てる、泣きそうな顔をした雛森…

「弾け…『飛梅』」

…七支刀のような形状に変化する斬魄刀…
その刀から生み出される炎が糸に触れ…

「「ぐわあああ…!」」

一気に編み全体に広がり、爆発を起こす。

「「ごめんね…シロちゃん…」」

「…雛森…ごうして…」

とつさに氷輪丸からだした氷を、炎の熱で水に変え、なんとか大火傷を免れた冬獅郎が雛森に近づく……
「ちなみにレグルスは火傷を負っていたが、黄金聖衣のおかげで、あまり大火傷にはなっていないかった。」

「私だってやりたくてやってるんじゃないよ。」

「霖さんとアノ人のせいだから……アノ人が『やれ』っていつから……」

「アノ人？……誰だソレは？」

「……それは言えない……でも……ごめん……もう、シロちゃんを殺さない
と……。」

「……お前に俺は殺せない……霊圧の差がありすぎる……」

「……また……その刀で私を斬るの？」

ビクツとする冬獅郎……瞼の裏に、空座町上空で……藍染の能力にひっかかり、間違つて雛森を刺したことが浮かぶ……自分の姉のような……大切な人を……守るって誓つた人を……

「ぐはあっ！」

一瞬のすきを突かれ、グサリつと飛梅が冬獅郎に刺さった。

「くっ……！」

刺さる刀を無理矢理抜き、後方へ跳ね退く冬獅郎。

ポタリ……ポタリ……と血が滴り落ちる。

氷輪丸を振り下ろそうと力を込める……が……

雛森の充血した眼の奥に、深い悲しみの色を見てしまうと、氷輪丸を下ろしてしまう。

「ごめんシロちゃん！弾け！飛梅！！」

雛森の刀から放出される大きな炎弾が冬獅郎に襲い掛かる。冬獅郎は迫りくる炎弾を見ることしか出来ずに…

「！！？」

一瞬で風景が少し変わった。

「なんで避けられないんだ！？」

レグルスが冬獅郎の襟をつかんでいった。

…少し離れた場所で爆炎が上がっていることから推測すると…

「助けた…のか？」

「そうに決まってるだろ？なんつーか…悪い奴には見えないし…
つてか、なんで避けられないっていうか…攻撃しないんだ！？

あの女はお前のことを…」

「俺は…雛森を…攻撃できない…もう…あいつを苦しませたくないんだ…」

沈鬱な顔をする冬獅郎…レグルスはどうしていいのか分からなかった。

…おそらく、あの死神の少女が、この冬獅郎という死神の『護りた
いもの』だったのだろう…

でも、…なぜか攻撃されている…

…このままでは、負ける…でも…攻撃をしていいのだろうか…

…人の感情に疎いレグルスだったが、この死神の表情を見ると、自
分も攻撃するのがためらわれた。

「飛梅!!」
「!?!」

ものすごく至近距離から迫りくる炎弾。

さすがのレグルスも避けることが出来に距離だった。

これは…

「ライトニング…」

「やめてくれ!!」

「ツチ…ガキ共が」

目の前に割り込むように現れた人影…

その人物が作り出した三角形の空間に、炎弾が吸い込まれていく…

はたして…敵か…味方か…!?!?

第三十四話：伝説の魔拳

第三十四話：伝説の魔拳

「あ…アンタは…」

「アスプロス？」

「誰だソレ？俺は双子座のカノン。…ん？」

カノンはじいゝとレグルスの顔を見た。

「アイオリア？縮んだのか？」

「誰だよ？俺は獅子座のレグルスだって！」

「…ったく…何が起きてるんだよ…」

つといいながら、とんできた炎弾を片手ではじいた。

「ウソ…」

「お前みたいなの、お嬢ちゃんの技はきかん。」

すうつと、そのまま手を雛森にむけるカノン。ゆっくりと小宇宙をたかめる。

「ま…待ってくれ！！雛森は…」

「…なら、お前…このまま死ぬのか？」

あの娘の赤くなった目…あれは伝説の魔拳…『幻朧魔皇拳』の仕業だ。

その技をくらったものは、脳内を操られ、洗脳されてしまっ…

…目の前で人が一人死なない限り、解くことが不可能な魔拳よ。」
「人が…一人死なないと…だと…？」

冬獅郎の目が大きく見開かれた。

…雛森を元に戻すには、誰かが死なないといけない…なんて…

「…なら…お前たちの内のどちらかが、俺を殺してくれ。」

冬獅郎は絞り出すように言った。

「な…なに言っただよ死神!？」

なんで自分を殺そうとしている奴のために…」

「雛森を…苦しめる原因をつくったのは…俺かもしねえからだ。」

…俺は雛森には攻撃できない…それは、影狼佐の事件の時に、すでに証明されていることだ。」

…俺は…もう、雛森を苦しめたくない…」

悲痛の色がにじんでいる…カノンが軽く舌打ちをした。

「まったく…めんどくさいな…『ゴールドントライアングル』!！」

「きゃっ!！」

急に開いた三角形の空間…そこへ雛森は吸い込まれていく…

「雛森!！」

「安心しろ。送ったのは日本のどっかだ。」

日本なら治安もいいし、こちらまで来るのにも時間がかかるはずだ。
…さて…もう手駒はいない…そろそろ姿をあらわせ!！」

誰もいない空間にしゃべりかけるカノン…

「…くつくく…気づいていたか…さすが我が弟よ……」

空間が開き、そこから現れたのは…髪の毛のいろこそ黒で、なんか目が変な感じだが、それ以外はカノンと瓜二つの男…

「あいつは……？」

「あれは俺の愚兄…サガの中にいる黒い人格…通称…黒サガだ。
…アテナの力で消滅したと聞いていたが…」

「あんな小娘の力で私が滅びるとでも？」

「…もつとも、ずいふんと力は弱まっていたがな……」

先程、霖という死神に霊力を与えられて、生き返ったのだ。

…ウォーミング アップで、霖が連れてきた、さっきの小娘に使った技も万全だったしな…。」

「お前が…雛森を……！？」

凍てつくような空気があたりに立ち込める……

「いい目だな…死神……」

「黒サガとやらは…俺が…倒す！」

「なにいつてるんだ？」

カノンが冬獅郎の隣に立った。

「あいつは、教皇を殺した男だぞ？それに、銀河を砕く力を持っている…」

俺もやる。…それに、一応、愚兄の身体だからな…。」

「なら俺も。二人より三人の方がいいでしょ？」

レグルスも笑いながら二人の横に立った。

「それなら俺も忘れてもらっちゃあ困るぜ！」

レグルスの隣に立つのは…

「阿散井！？なんでここにいるんだ？」

「いや…ほんとは朽木隊長と戦ってたんですけど、このカノンって人が、

『ええい！めんどくさい！！』って言って、さっきの雛森みたいな感じに……」

「何人集まっても結果は同じよ！俺は銀河を砕く男だ。

俺の二番目に過ぎない男と獅子座のガキと手負いの死神なんかにはせん。」

黒サガがニタリと笑った。

「いつてくれるな……行くぞお前ら。」

「「「お前が仕切るな！！」「」」

――その頃――

「…くっはっ！」

半分身体が氷に埋まったルキアが乾いた咳をする。

凍えた手は、もう斬魄刀をつかめない…

袖白雪は氷の上に転がっていた。

「終わりか？」

「くっ…破道の三十一『赤火砲』!！」

近づいてくるデジェル…ではなく、自身にむかって放つが…

「バ…バカな…」

ほとんど、氷に傷がついていない…

「炎の術のようだが…その『フリージングゴフィン』は、天秤座の道具でしか壊すことができません。

…終わりだ…」

「くそ…すまん…一護…」

その時だった。

少し離れたところに立ち上る、黄色の光の柱…

「あれは…カルディアのいる所ではないか!？」

「あの霊圧は…更木隊長!？」

…二人の耳に、鬼が笑うような声が聞こえた気がした。

第三十四話：伝説の魔拳（後書き）

（死神図鑑ゴールデン聖域）

十四回目・天秤宮

童虎「ほう…ようやくたどり着いたか…」

コン「…当たり前だ…
つてか…ついてよかった」

シヤカに感づかれる前に身体に戻った…のまではよかったのだが、
まだ、あの宮でのんびり勝手にシヤカの茶を飲んでいた、ムウに
何度も気づかれそうになりながらも、なんとか宮を脱出。
少し休んでから、この宮へと階段を上ったのだ。

童虎「それは大変だったのお…すこし茶でもいれるから、待ってお
れ。」

コン「さんきゅー童虎…」

童虎が茶を入れる…

童「ほれ、どうじゃ？」

コン「…ゴクン……
うめえ〜〜」

さすが、長生きしてるだけあるな…

『240年以上も生きて、実は肉体年齢18歳のままだった妖怪ジ
ジイ一号
天秤座の童虎』だよな…」

童「ワシが一号ってことは、二号はシオンじゃな？」

コン「そうに決まってるだろ？」

童「ほっほっほ…たしかに妖怪に見られても仕方ないのお〜
脱皮したし。」

コン「…自分でみとめるのか？」

童「真実は偽ってはならんものだからな。

…さて、どうやら疲れているようだから
ゆっくりしていくがよい。」

コン「マジで!？」

久々に聞いた気がする良心的な言葉!!

皿洗いとかしなくていいのか!？」

童「しなくていいに決まっているではないか？」

にっこり笑う童虎…

貫禄…とでもいうのだろうか……

弟子（紫龍）を育て間違えた男にはとても見えない…

言葉に甘えることになった、コシなのです。

〜続く〜

第三十六話：悪魔と死神

第三十六話：悪魔と死神

「あの光は!？」

更木の発する光を見ていた者は他にもいた。

「…あれは更木隊長の『本気モード』…つてとこだな。

……可哀そうだな…あの蠍座っぽい聖闘士……」

敵なのに、心からの同情をするアズマ…。

222

「……そんなに更木という死神は危ないのか？」

「ああ！危なすぎる!!」

あれを野放しにしておく上はおかしい！」

「……お前がいうのなら、相当だな…!？」

小宇宙の気配を感じて立ち止るシユラ。

ワンテンポ遅れてアズマも立ち止った。

「…この小宇宙…あのタキシード!？」

「よく気づいたなあ、アズマちゃん」

純白のペガサスにまたがり、どこからともなく現れるシルクハットにタキシードの男…杳馬。

すらりとアズマは斬魄刀を引き抜いた。

「……シユラ…さつき言ったこと…覚えている？」

「？…ああ…『霖の技は幻術系…水に触れると落ちるから気をつけろ』」

「というやつか？」

「なぐに、こそこそやってんだよ。」

あんたら二人は舞台から、もう退場よ。これからの主要役者は、『聖域のお花ちゃん』と『神殺しのペガサス』、『死神代行』に『神に喧嘩を売ろうとしている死神』なんだからよお。」

杳馬がため息をつきながら言う。

「へえ…霖の奴…神様に喧嘩を売ろうとしてるのか…ほっとけないな。」

「…聖域の花とは…アテナのことか!？」

シユラが、鋭い目で杳馬をにらむ。…杳馬はニヤリと笑うと、指を二人に向けた。

「さあな。どっちにしろ、この後の台本にゃあ、あんたらの名前はないんだ。」

「とつとと消えな、『マーベラスルーム』!！」

「なっ!？」

アズマとシユラの身体が徐々に消えていく…突如現れた空間に吸い込まれるように…」

「その先は時間も物質もない世界…吸い込まれれば量子レベルで分解され、その世界にバラまかれる…」

これで終幕だな。」
「させるか！卍解！！」

白銀の風がアズマの斬魄刀から立ち上り、アズマとシュラを包む。

「何をするかはしらねえが、俺のマーベラス…あれ？」

杳馬の目が点になった。

そこにいたのは、五体満足のシュラとアズマ…。

「それが卍解というものか？」

「ああ…私の卍解『羅刹御先狐』」

日本刀が銀色の錫杖に変形していた。

しゃらん…と、錫杖の上の方についている、大きな二つの銀の鈴を鳴らす。

「じゃあ、先にいかせてもらうな。」

杳馬を無視して、アズマは先に向かって走り出した。
シュラもワントンポ遅れて走り出す。

「…ちっ…面倒な相手だな…さっさと終わらせるとするか！」

ポケットに手をつ突っ込む杳馬。それを目の端でとらえた途端、アズマは急ブレーキで立ち止ると、グルグルと錫杖を回し始めた。

「あとは頼んだむ、シュラー！！」

「アズマ？」

「行け！！私もすぐに追う！！」

「させるか！止めさせてもらっぜ…この時間を！..」

カチリ…と懐中時計を押す杓馬…だが…

「ありゃ？」

いくら懐中時計を押して、時を止めようとしても、シユラはどんどん先へ走っていく…

「…まさか…お前の仕業か！？」

錫杖の回転を止めたアズマは不敵な笑みを浮かべた。

いつの間にか、一つの教室くらいの広さの足場のみを残して、アズマと杓馬は異次元にいた。

「その通り。私の斬魄刀は時空間を操る…

いつしか大霊書回廊で読んだことがあるんだ。

銀河の膨張の果て…光速度の観測は個々で異なる不変のもの…

つまり光の速度は観測者それぞれによって違っってこと…

私達が今いる空間は切り離されて、異次元を光の速度で移動している…

つまり、ここでは、時間自体が一定に機能しないんだ。

つてとは、もうお前は時間を操れないし、どこにもとべない…

これでお前は終わりだ！」

杓馬は目を大きくしばらく見開いていたが…突然笑い出した。

「いいねえ…たまには他人の舞台上が上がってみるのも…

でもム力つくんだよ。…そのセリフ…あの双子の兄ちゃんを思い出

すじゃねえか。」

杓馬の目に映るのは深い憎しみの色…

「双子の兄ちゃん？…カノンの兄のサガのことか？」

「違う。…まあアズマちゃんには関係ないって。」

んじゃあ、冥闘士・天魁星てんかいせいメフィストフェレスの杓馬が、

お前をぐるぐる躍らせてやるよ！…きれいなマーブル模様になるまでな。」

「出来るかな？私の作り出した舞台だぞ？」

踊るのはお前の方だぞ…メフィストフェレス悪魔。」

第三十七話：時の神

第三十七話：時の神

「…つたく…：…気に入らねえお嬢ちゃんだなあ…
俺の技封じちまうし…」。
まっ、いつか。お前はここで死ぬんだからな！」

悪魔のしつぱみたいな漆黒の金属が、何本も杵馬の背中から現れ、
ビリビリと杵馬の服を切り刻んでいく。

…全裸になる気か！？…と思ったアズマだったが、その点の心配は
無用だった。

タキシードの下に着ていたのは、聖闘士の着る聖衣に似た、漆黒の
鎧…それはまるで、クモのよう…

「！？これは…」

杵馬がアズマに指を向けると、アズマの背側に現れた時計盤…とて
つもなく、いやな予感がする…

「そりゃあ、テメエの中の時を具現化したものさ。」

杵馬の手前にも小さな時計盤が現れる。その針に指を乗せている。

「時間つてのは、場所だけに流れているんじゃない…
テメエの身体自体も時の積み重ねよお。」

それを全部…もとに戻しちまったら…：…どうなる？」

カチ…カチ…と音を立てていたアズマの中の時計…
アズマの表情に電気が奔った。

「『リワインド バイオ』!!!」

小さな時計盤を勢いよく回す杵馬。それと共に、アズマの身体は…
縮み…だんだん幼くなり…そして…

「消滅しまうのさ。…胎児以前にもどつてな。」

もう、アズマの姿はどこにもなかった。…最初から…いなかったよ
うに…

「じゃあな、アズマちゃん。」

去ろうとした…その時!!

「!?!」

赤い光が、杵馬を縛り付けた。

「これは…」

「縛道の九『撃』…さてと、拘束完了かな。」

そういつて杵馬の前に現れるアズマの姿があった。

「馬鹿な…お前は確かに消滅したはず!?!」

「あのさあ…私は死神だぞ?」

「死神でも、時は積み重なり…いずれは死を迎えるだろ!?!」

「……さあな。…まっ、あなたの力は私には通用しないということ

で…

これで終わりだ。

…君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼
火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ…」

「まつまで！」

「破道の七十三『双蓮蒼火墜』そうれんそうかつい！！！！」

アズマの両掌から放出される蒼い炎が杳馬を襲う。

「ぐああああー！！」

「火加減はしないぞ…あっけない幕引きだ。」

炭になっていく杳馬に背をむけて…ほつと息をつくアズマ。

…携帯用義骸とソウル*キャンディーをもっていてよかった…と心底思った。

この異次元に連れ込んだまではよかったが、まだ奴が奥の手を隠している気がした。

だから自身は『曲光』で姿を隠し、義骸にソウル*キャンディー…つまり仮の魂を入れて、
様子をうかがっていたのだ。

…案の定…恐ろしい力を隠していた。

あのままフツーに戦おうとしたら…アズマは消滅してただろう…

「…キャンディーと義骸の申請書かくのめんどくさいな…ん？」

耳障りな時計の音…それと共に、灰になったはずの杳馬の小宇宙が
消滅するどころか、

ますます増していつている…その小宇宙は…人間のものとは思えな
いほじ…

まさに…神のような…小宇宙…
ふりかえると、そこには大きな怪物…の幻影の前に立った杓馬がいた…

「な…なんで…!？」

「ったく…まさか、こんなガキに俺の真の姿を見せるとはな…」

「真の…姿？」

「そう…俺は神話から消された神…」

時の神・クロノスの弟…カイロスだ!」

「カイロス? ……ポ モン？」

白羊宮にいた貴鬼という子供がやっていたゲームを思い出す。

「違う!ギリシヤ神話のもう一人の時の神よ。

…俺はあんたのことが気に入くわねえ…

なんで入れ墨いれるまで、兄を崇拝してるんだ？」

なめるように右腕の入れ墨をみる杓馬。

ぎゅっと錫杖を握ってない方の手で、入れ墨を抑えるアズマ。

「兄貴なんてろくなもんじゃねえのにな。

現に、お前の前から蒸発しただろ!？」

…お前を裏切つてな。」

「…あんたに…兄ちゃんの良さが分からなくてもいい…」

…もしかして…霖に力を貸しているのは、兄…クロノスへの復讐のためか？」

口の端をゆがませる杓馬。

「…そうだな…教えてやろう…」

俺がしたいのはクロノスへの復讐…及び、神様への宣戦布告よお。
霖は同志ってかんじだな。」

「同志?...詳しく...」

「おおっと。いまはここまでだ。」

しいいとやるように、一指し指を口の前に当てる杓馬。
アズマは錫杖を構えなおす。

「仕方ない...無理にでも聞き出してやる!...」

第三十七話：時の神（後書き）

〔死神図鑑ゴールデン聖域〕

十五回目・天秤宮　？

コン「まさか、記念すべき十五回目を、ここでむかえるとは……」
お茶をすするコン。

コン「そいいえばさあ、本編のほうでも前聖戦の聖闘士や冥闘士がでてくるようになったけど……
なんか思い出きかせてくれねえか？」

童虎「……そうじゃのお……ふむ……いろいろあるのお……」

コン「じゃあさあ！童虎が聖域に来た日の思い出！
お前は中国で修行してたんだから、文化とか違って大変だったんじゃないねえか？」

童虎「まあの。……まあ……一番あの日の事で思い出深いのは、あれじゃ。」

ペットの持ち込みが許されなかったことじゃの。」

コン「ペットお？」

なんだなんだ？犬か？ネコか？」

童虎「トラじゃ」

コン「……………はい？」

童虎「トラじゃよ。」

五老峰で修行の合間に育ててたんじゃ。可愛いメスでのお…

聖域まで連れてきて、天秤宮で飼っていたんじゃが、

天秤宮を抜けようとした、

蟹座のマニゴールドや蠍座のカルディアに怪我をおわせてしまったの

お…

どうやら、ワシのトラは『危険人物』と、二人はみなされたみたいなんじゃ。」

コン「……………御気の毒だな……………」

童虎「まあ、腕がちぎれそうになるくらい、かみつかれた程度の怪我だったんじゃがの。ほっほっ。」

コン「笑い事じゃねえ！！」

一歩間違えれば大惨事じゃねえか！大怪我だよ！！」

童虎「何を言う。聖闘士たるもの…そのような怪我で参っているようでは勤まらん！！」

コン「……………聖闘士って化け物かよ……………」

童虎「……………じゃが…最後は……………牡羊座のシオンに……………」

コン「シオンって…今の教皇じゃねえか！！そいつに……………」

童虎「シオンに『せめて首輪をつけた方がいい』

といわれてつけようとしたのじゃが、うまくつけられず……………」

……気が付いたら、ワシの腕の中で動かなくなっていたわ
い……」

コン「それ、お前が殺し……」

童虎「おのれ！！シオン！！許さないぞ！！
春麗の敵は必ず……」

コン「待て待て待て……春麗って……龍座の紫龍のガールフレンドだ
ろ！？」

童虎「あの子は、わしが拾ったんじゃよ。それで、あまりにもかわ
いかったので、
同じ名前をつけたんじゃ。

ええい！！コン！！ワシはシオンの所へ行つて今から、春麗の敵を
とつてくる……」

童虎は光の速さで駆け昇つて行つた。

コン「……俺がたどりつくまで、シオンがいきいているといいな……」

……残りの宮は5つと教皇の間……
たどり着くのはいつになることやら……

〈続く〉

第三十八話：約束をしたから…（前書き）

今回の後半に、青銅くんたちがちらつと登場します。
そして次回は……あの最強の聖闘士の登場です！！

あと、一部セリフを変更しました。（7/04）

第三十八話：約束をしたから…

第三十八話：約束をしたから…

「『リアル マーベラス』」

「つく…ぐわああ！！！」

杵馬…改めカイロスが繰り出す、大量の悪魔のしっぽを模した鉄の矢…

戦闘向きではない錫杖を左手に持ち変えると、右手の手刀で裁いていく。

…が、やはり数が多すぎるせいだろう…刻みきれない矢が身体に突き刺さる。

(まずい…)

本気で『死』という文字が頭によぎった。

…この状況を打破できる技は…瞬閃しか思いつかない…

だが…もし、ここで発動させたら…確実に自分はスタミナ切れだ。

ただでさえ、卍解使用中なのに…あんな大技をつかつたら…

(…卍解中…?)

その時、ひらめいたことがあった。

…でも…それをするには…時間が必要だ。

アズマは、自分より少し高い位置に浮かんでいるカイロスをにらむ。

「しぶてえなあ…」

つま、役者がぐるぐると良いタップを踏むのは嫌いじゃねえが…
そろそろ目障りなんだよ。」

「目障りで結構。縛道の二十一『赤煙遁』」

地面に手を置くと、赤い煙があたりを包む。

「…神の御前で醜いな。」

まあ、てめえには逃げられないことはわかっている。
足場となる全体に、この矢を放てば…死ぬだろ。」

そついうと、カイロスは矢を足場全体に向けて放つ。

「串刺しだな…ん？」

そこには…誰もいない…

突き刺さっている影もなければ、矢を避けた痕跡すらない…

「縛道の六十三『鎖条鎖縛』！ 縛道の七十九『九曜縛』！！」
「なっ！？」

上空からくる光を避けられなかった。

カイロスは光の鎖でとらえられ、周り縦方向に八つ、胸に一つの黒い鬼道の玉のようなもので出し縛られてしまっていた。

カイロスは目を凝らす…が、上には誰もいない…

さすがに、上に向かって攻撃するには、相手の位置を知らなければ無理だ。

下手をすると、外れた技が落ちてきて、自分に自分の矢が当たると
いうへま展開になってしまう。

「私は『曲光』で姿を消して、霊糸を足場に空に立っている……
これで終わりだ。」

「終わりだと！？ふざけるな！俺は……霖にしたがつて本当の神にな
るんだ！！」

「……滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂気の器……」

「無視するなよ！！俺は……俺様は……また死にたくねえ！！！」

ぐるりぐるり……いくら、まわっても俺を知る奴のいねえ世界なんて
耐えられねえ！！

だから、そんな世界をぶっ壊して、俺たちが頂点に立とうと……」

「……湧きあがり・否定し 痺れ・瞬き 眠りを妨げる 爬行する鉄
の王女……」

カイロスを見無視して……何やら唱え続けているらしいアズマ。

「絶えず自壊する泥の人形 結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無
力を知れ！！」

破道の九十『黒棺』！！！！！！」

黒い棺のようなものが、カイロスを覆う。

「ぎあああああ！！！！！！」

「……その中は重力の渦……」

詠唱破棄ですら、隊長格を戦闘不能にするこの技に、私の正解の力
が加われば……

中の重力は、通常の黒棺の十倍以上……

……… 終わりだ……なりそこないの神様……」

しやらん…と鈴を鳴らすアズマ…
悲鳴が途絶え…黒い棺も消えた…。
棺があつた場所には、何も無い…カイロス…杳馬は原型をとどめな
いほど、切り刻まれていたのだった。

「…くっ」

卍解を解いたアズマは、杖にもたれかかるように、斬魄刀に全体重
を預けた。

(…霊力が…少ない…でも…)

パンパンッと頬をたたくアズマ。
ふらつく足取りで先に向かって歩む。…後から行くつて約束したか
ら…

――その頃――

「に…兄さん？」

星矢を追って走っていたアンドロメダ座の聖闘士…瞬はあつけにと
られた。

隣にいる白鳥座の氷河も、クールに驚いている。

二人の前に立ちふさがつた二人の人物…

…一人は死神…

…もう一人は…瞬の兄にそっくりな冥闘士…だったからだ。

「兄さん!!どうして…」

「……お前はあっちの、女みたいな聖闘士をやれ。俺はあの金髪をやる。」

手のひらに黒い炎をともす、兄そっくりな冥闘士…

「一輝…なぜ冥闘士になつたんだ？」

とうとうパンドラと身を固めることを決めたのか？」

「…あの女と身を固めるだと…笑止。」

それに俺の名は一輝ではない……」

炎の勢いが強くなる。

「おれは天暴星・ベヌウの 輝火かがほ!!」

殺伐と…されど、どこか悲しそうな眼をした男…輝火はその炎をまっすぐ、氷河に向けた。

第三十九話：金盞花（きんせんか）と不死鳥

？（前書き）

なんかすぐに兄さん出す予定だったのに…思ったより長くなってしまった…。

？に続きます！…！

第三十九話：金盞花（きんせんか）と不死鳥 ？

第三十九話：金盞花きんせんかと不死鳥 ？

「お願いです！僕たちは星矢と一護と一護の妹を助けたいだけなんです！」

片目が隠れたクリーム色の髪をした死神に話しかける瞬。しかし、彼は一向に聞き耳を持つ雰囲気はなかった。

「…おもてをあげる…『侘助』」

死神の斬魄刀の刀身が、中程から鉤状に変化する。瞬は星雲鎖ネビュラチェーンを持つ手に力を込める。

「…どうしても、やる気なんです。でも…なんですか！？あなたは死神なんですよね？それに…」

横目で氷河と向き合っている、兄の一輝にそっくりな冥闘士…輝火を見る。

アノ人はいったい誰なのだろう…

「よそ見している暇はないですよ。」

死神が襲い掛かってくる。

「破道の三十三 『蒼火墜』！」

死神は左手から蒼い爆炎を放出させた。（斬魄刀を右手に持っているため）

「アンドロメダ星雲！」
ネビュラ

自分を中心に鎖を渦巻状に張り巡らせ、攻防一体の鉄壁の防御陣を敷く。

爆炎は星雲鎖に当たり、霧散する。

「！！！」

爆炎が完全に消えない間に、死神が星雲鎖を何度も何度も斬りつけている。

「無駄です。この鎖は……つつ！？」

ズシンつと今まで宙に浮いていた鎖が、地面に這いつくばるように落ちる。

鎖を持っていた瞬も身体が前かがみになった。

……小宇宙で操っているのに……重い……非常に重い……

聖闘士は人間規定外の力持ちと言ってもいい……それは一見すると女性に見える瞬にも言えることだ。

軽々と20kg以上もする聖衣箱を軽々と、まるでランドセルのように背負えるほどなのだ。

それなのに……重いと感じるなんて……

「終わりですか？」

「……でも……まだ僕は終わりません！」

右手の攻撃用の鎖を繰り出す瞬。
死神はその鎖を刀で受け止めると…

「破道の十一『綴雷電』」つづらいでん

「うわああああ！！」

刀に沿って電撃を流す死神…もちろん、同じ鉄製の鎖にも電撃は伝わり、瞬にも届く。

電撃が収まると、今度は攻撃用の鎖を何度も斬りつける。

…もう一つの鎖も持ちきれないくらい重くなってしまった。

「一体…」

「君は何度、僕の斬撃を受けましたか？」

「？……確か……十回以上ですよね？」

はあ……はあ……言いながら答える瞬。

「……僕の『侘助』の力は、攻撃を加えた回数分だけ対象の重量を倍々に重くする能力を持ちます。

二度斬れば倍…もう一度斬れば、そのまた倍というように…

そして…相手は重さに耐えかね、詫びるように自らの頭を差し出す、
ゆえに侘助…。」

重さに耐えかねて頭を差し出した瞬に、死神は侘助の鉤状の刃に首を引っ掛けられる。

先程の電撃のせいで、少し麻痺気味で…そのうえ、聖闘士といえども持つことが不可能な重さの鎖を二本も持っているのだ。

……さすがの瞬も動けなかった。

「……終わりだよ……聖闘士…」

絶望に満ちた虚ろな目で瞬を見下ろす死神……
その時だった。

「そこまでだ!!」

死神は動きを止める……そこに現れたのは……

「来てくれたんだね、兄さん!!」

いつも弟（+）が危機に陥ると、どこからともなく現れる、額に傷を持つ男……

そこにいたのは、不死鳥座の一輝だった。

「この世で最も清らかな弟を傷つけた罪は重いぞ……」

「……目障りですね……」

激しい熱を帯びだまなざしと、絶望に満ちた虚ろなまなざしが交差した。

第四十話：金盞花（きんせんか）と不死鳥　？（前書き）

…書き忘れてましたが、念のため…金盞花きんせんかとは三番隊の隊花で、花言葉は絶望です。

ついに四十話…長いなあ…って思います。
次の章にはもうすぐ入る予定です。

あと…先に謝っておきます…この回…ギン様のファンとイズルのファンの方…
先に謝っておきます…すみません…！

それでは、どうぞ。

第四十話：金盞花（きんせんか）と不死鳥 ？

第四十話：金盞花きんせんかと不死鳥 ？

「……新手の聖闘士ですか…そこでおとなしくしててください。
縛道の六十三『六杖光牢』」

死神は、一輝を捕えようと、すばやく縛道を放つ。
一輝は軽々とそれを避けると、指先から閃光を放った。
その閃光は死神の額を通り脳をも貫く。

「これは…」

額を抑える死神：一輝はニヤリと笑う。

「それは、『鳳凰幻魔拳』。

さて…俺の弟を傷つけたお前の心の中を見せてもらおうぞ…
…操れた経緯も一緒にな…」

死神の意識は沈んでいった。

死神…三番隊副隊長・吉良イツルが目を開けると、そこは虚圏では
なく、見慣れた執務室だった。

必要な書類のみが置いてある殺風景な空間…そこは自分が一番落ち

着く空間であり…罪の意識にさいなまれる空間…

いまにもあの扉が開いて、アノ人が入ってきそうな気がする…

「旦那様も何を考えているのかしら…こんな根暗な死神なんて…手駒にしなくてもいいのに…」

「!?だれだ!?!」

後ろから感じる気配…吉良は斬魄刀の柄に手を置く。

見ると、机に腰を掛けていたのは、見慣れぬ女…

乱菊みたいな女性らしい体系の…麻呂眉の女…現世の流行っぽい服を着ている。

一見すると死神ではなさそうだが…明らかに手に持っているのは斬魄刀だった。

「…何者だ?」

「私?レイナっていうの。…ちょっと私の手駒になってもらうわ。」

そう言うとスラリと斬魄刀を引き抜く。

「…操れ…『マシオネット魔術人形』」

おもわず吉良は引きそうになった。

斬魄刀自身は、少し横幅が増えたくらいだったが…

斬魄刀の刃についているのは…口…。

「さて…あなたの大切なものをもらうわよ。」

吉良の懐が光る。そして…雛森や恋次と撮った、死神の学校…真央霊術院卒業時の古ばけた写真が懐から飛び出てきた。

「あつ！！！」

「ふ〜ん…写真ねえ…絶望を味わう前の自分…ってことかしら？」
「返せ！面を上げる『侘助』！！」

侘助を始解させる吉良。

「おそいつての！」

写真をレイナの魔術人形がムシヤリと喰らう。
その時だった。

ズキン！！！！

「ぐわああああああ！！」

信じられないような激痛が頭に走った。

……それからの記憶は……ない……

自分が何をしていたかは、なんとなくわかっている。

レイナという女に操られて……虚圏に来て……

あの…黒炎を操る少年（？）につき従うことになった。

そして…聖闘士の二人の少年の前に立ちふさがったのだ。

聖闘士は敵じゃない…なんとなくそれはわかっていた。

星矢という少年は知らないが…一護…黒崎一護は仲間だから…

でも、吉良には何もできなかった。

それらの出来事は…まるで…半分寝かかった状態で、遠くから映画
を見ているみたいに映っていた。

身体はもはや、自身の意志では操れなかったから…

「最低だ…僕は…」

遠くで愛しい人…大切な人が傷ついているのを感じていたのに…
何もできなかった。…深まっっていくのは絶望…

「イズル…なに泣いてるんや？」

暗い空間に立っていた吉良は、もう二度と聞くことはない声に反応する。

そこにいたのは…

「市丸隊長！！」

死んだはずの上司だった。市丸ギンは、いつもの何を考えているか分からない表情を浮かべて…ただただ不気味ともとらえられる笑みを浮かべている。

これは…夢？

そう思いながらも、側に駆け寄り、ひざまずく吉良。

市丸は吉良の頭にポンっと手を乗せた。

「元気そうで何よりだわ。」

「隊長……」

「まあ…僕はもう死んでるんやけどね。…羨ましいやあ……」

その時だった。

市丸の手が熱を持ったかと思うと…ドロリッと溶けだしたのだ。

「た…隊長！？」

市丸の顔…手足…服…すべてがドロドロに溶けていく…
そして…

「う…うわあああああああ！…！」

吉良自身の顔が熱を持ったかと思うと、ドロリ…と半分、焼きただ
れるかのように溶け始め…
それは全身に広がっていく…

吉良は絶望で叫ぶことしか出来なかった。

「……いつも思うけど……やりすぎじゃない？」

冷や汗を浮かべて苦しんでいる吉良を見ながら、完全復活…とまでは
いかないが、復活した瞬がつぶやいた。

一輝の技…『鳳凰幻魔拳』ほうおうげんまけんは、相手の心の中に潜んでいる恐怖心を
増大させることで、相手の神経にダメージを与え、幻覚や悪夢を見
せて精神を破壊する技…。

精神をズタズタにされた相手の体には、力はほとんど残らない…。
一輝はこの技を使い、吉良がこうなってしまった原因を探るととも
に、少々…にしてはやりすぎのお仕置きをしたのだった。

「問題はない。手加減はしておいた。

それに…こいつは絶望の塊だ。……そう簡単に精神崩壊するのなら、
とっくになっている。

それよりも……」

一輝は氷河の方を見た。

……はつきり言くと、瞬や吉良より氷河の方が生死をさまよっていた。

氷河は黒炎の十字架にくくりつけられていた。

……カミュ同様、氷を操る彼は暑さに非常に弱い。……拷問だった。

「氷河！！……瞬、この死神は好きにしろ。」

小宇宙を高め、ごくごく普通の光速拳を繰り出し、黒炎を吹き飛ばす一輝。

「うう……」

「大丈夫か？……おい、お前！よく俺の血のつながった兄弟を……」

その相手の顔を見た途端、一輝は固まった。

相手も固まった。

「俺？」「」

声がはもる。……誰の目から見ても……まるで双子のように同じ顔……

「お前……なにものだ？」

「俺は……ハーデス……いや、アーン様に仕える冥闘士……」

天暴星・ベヌウの輝火。かがほ……貴様こそ何者だ……聖闘士よ。」

「俺は不死鳥座の一輝。……ベヌウだと？何者だ？」

……まあいい。俺の兄弟を苦しめた罪……しっかりと受けるがよい！
！」

「……フェニックスだと……？聞いたことがないぞ……」

第四十一話：蠍と戦闘狂の乱舞

第四十一話：蠍と戦闘狂の乱舞

「……………なんだ？もうしめえか？」

やけにニヤついた笑みを浮かべる更木…。
カルディアの動きは止まってしまった。

……………あの眼帯を外した瞬間から……………奴の力が一気に跳ね上がった。

「なんで平然と笑っていやがるんだ!？」

そう…更木はすでにスカーレット ニードル15発中14発受けているのだ。

それも、通常版ではない。

カルディアの心臓が発する高熱の小宇宙をこめて放った特別版『カタケオ』なのだ。

冥界三巨頭最強と謳われる…つまり、冥王ハーデスの腹心の人間のなかでは最も強い男…

ラダマンティスでさえ、その高熱に耐えることが至難の業だった。

15発撃った時…敵は体内から燃え上がる…

そんな攻撃を14発も受けているのに……………奴は笑みを崩さない。

熱もまるで感じてないみたいだ。

苦しみもしない……………なんて…ありえない。

「あぁん？そりゃ面白れえからだろうが。」

ぼろぼろの日本刀をカルディアにむける更木。

「その、15発目を撃った時、俺は死ぬんだろ？」

「だったら、撃たせる前に俺がテメーを斬りやいい話だ。

俺は死ぬのは嫌だからな。」

「だからってなあ……お前はもう14発くらってるんだぞ!？」

「ってか、戦い好きならなんで死ぬのが嫌なんだよ!？」

カルディアには分からなかった。

自分自身、戦うのは好きだ。……だが、死ぬのは嫌ではない。

心臓の病のため余命が少ないせいもあるかもしれないが……

「俺は限られた命を戦いの中で使い切りてえ。

だから死ぬのなんて嫌でもなんとねえよ!」

「おめえの論なんて知るかよ。

そんなの決まってるんだろ？俺が死にたくねえのは、死んだらもう誰

も斬れないからだ。」

「……そうか……いいねえ……だが……ここでお前も俺も死ぬんだよ!!」

最後の1撃で幕引きとしようぜ……更木剣八!!」

小宇宙を……可能な限り限界まで高めていく……

それとともに心臓からつくられる熱も熱さを増していく。

「……いくぜ! スカーレット ニードル・カタケオ・アンタレス!!」

「!

最後の攻撃を仕掛けるカルディアだったが……

「おせえよ。」

「ぐわああ!!」

剣八の腕が振り下ろされ、カルディアのニョキっとのびた爪を折ってしまった。

「これでしめえだな。……ぐっ……」

突如、更木の全身を焼き尽くすような痛みと熱が内側から駆け巡っていく。

「……へっ……ようやく膝ついたな……」

弱弱しい…されどしつかりと通った声のカルディアはうつすらと笑みを浮かべていた。

「剣ちゃん!!!!」

少し離れたところで観戦していた幼女…草鹿やちるが叫んだ。

「……バカな…最後の一発は……」

「よく見るよ……」

下を向くと…カルディアの左手の人差し指が…更木を刺していた。

「……まさか…右手はダミーか……」

「そう。本命は心臓近い左手だ…これで…終わりだな。」

更木からふらつくように離れるカルディア。

すうつ…と心臓から冷やしたように熱が抜け…鼓動が収まっていく…
更木は膝をついたまま小刻みに震えていた。

「つくははははは！！！！！！！」
「！？」

がばつと起き上がる更木。

「まさか、こんなに身体が内から燃えるなんてな。
おもしろかったぜ、蠍座！！」

「ばかな！？なんで…」

「どうした？まだやらないのか？俺はまだいけるぜ？」
「……………」

冗談抜きで化け物か！？と疑うカルディア。

カルディアは最後の力を振り絞って一步前へ踏み出したが…

「くっ…」

力が入らなくて倒れてしまった。視界がかすんでいく…

「ッち…終わりがよ…飽きたな。

いくぞ、やちる」

「待ってよ剣ちゃん！」

ピョンっと跳ねるようにして更木に近づくやちる。

「待て…とどめは…ささねえのか？」

ふらついた足取りの更木は振り返った。

「そりゃ簡単だろ？」

俺は戦いを楽しみたいだけだ。たたかえねえ相手にとどめさす事が目的じゃねえ。

それに…ちったあ強くなって、また戦いに来るかもしれねえからな。

「…………それは無理だな…………」

いつになく弱気になってしまふカルディア。

自分でも心音が徐々に弱まっていくのがわかる…止まるのは時間の問題だ。

「カルディア!!!!!!」

遠くから声が聞こえる。

「デジエ…ル？そっちは終わったのか？」

水瓶座のデジエルが心配そうに近づいてくる。

「ああ。話ができるように頭以外を凍らせているから問題はない。それにしても…あ奴…お前の攻撃を受けてもなお…………」

恐ろしいものを見るように更木を見るデジエル。

更木はまた、ニンマリと笑った。

「そうか…朽木は負けたか…次は俺と命の取り合いをしようじゃねえか!!」

「…カルディア…お前の敵は私が撃つ。」

「…………まだ…俺は死んでいないんだけどな…………」

両手を前でクロスさせるデジエル。

更木はふらつき気味だったが、しっかりと刃をデジエルに向けた。
デジエルは小宇宙を静かに高めていった。

「オーロラ……」

「まてい！……！！！」

二人の間に割り込む2つの影……

はたして味方が……それとも……

第四十一話・蠍と戦闘狂の乱舞（後書き）

（死神図鑑ゴールデン聖域）

十六回目・天蠍宮

コン「……あのさあ…俺様…アポとってたよな？」

ござござ

ミロ「ああ。四日前に教皇様から聞いたぞ。

『聖域と尸魂界の親睦のため、ウラハラという男の代理が来るので、各宮の主はちゃんと迎えるように。』

また、そいつは人間外生命物体なので殺さないように
って言ってた。」

ござござ

コン「……じゃあさ…つまり…四日もあったんだよな？

人が来るってわかるまでに…なら…

なんで掃除しておかねんだ!？」

ばしいっと手にしていた化学雑巾を床にたたきつけるコン。

ミロ「でもよお、手伝って言ったのはあんたの方だぜ?」

コン「うぐわう…」

そう…この宮はまるで魔窟のように汚かったので
コンはおもわず

『掃除しろよ！ちよっくら手伝ってもいいから』
と言ってしまったのである。

コン「まったく…本気に受けるなよ…まあ…」

『もっとも気性の激しく・黄金一位の単純バカであり、冷徹漢カミ
ユの唯一の友人・蠍座のミロ』

…だから、しかたないか…」

ミロ「そうそう。俺はカミユの唯一の友人だ。」

にににっつとするミロ。

コン「つつこみどころそこかよ!？」

ミロ「?他にあったかツツコミ箇所なんて?」

コン「…もういいよ。」

ミロ「あのさあくなんか、すっげえ勢いで老師(童虎)が宮を抜けて
行ったけど、
なにかあったのか?」

きらきらした目でコンを見るミロ。

コン「ああ…シオン殺した」

ミロ「…ああ…またか…」

コン「またって…前にもあったのか？」

ミロ「しよっちゅうあるぜ。あの二人ってよく喧嘩してるんだよ。なんか『約240年間、滝眺めている以外なにも仕事してなかったのじゃから、もっと書類をため込まないで仕事せえ!!』とか…『お前っ！ワシのいない間に天秤宮を改造するでない!!』とか…」

コン「改造？」

ミロ「ああ。って言っても大方はアイオロスだけだな。事の発端はまずムウが

『どうせ老師は天秤宮に帰ってこないで、遊び場に使うてもよろしいですか?』

ってシオン様に言ったのが始まりだな。

シオン様ってムウに甘いから、承諾したんだよ。

んで、その日以降…俺とリアとカミュとムウとアルデバランとシヤカで遊んでたんだ。」

コン「自分の宮で遊べよ…」

ミロ「俺たちもそうしたかったんだけど、各宮にいる従者が

『もう片づけが大変なのでやめてください!!』

って泣きついてきたんだよ。

だから、従者のいない天秤宮で遊ぶことにしたんだ!

いわば、秘密基地って感じのノリで!!」

コン「………いつたい何してたんだよ………」

ミロ「でもさあ、なんかシヤカがデカイ仏像持ち込んだり、マンガラっていうの持ち込んだり、よくわからない説法したり…まあ…説法はいつもか…」

で、『ここは私的な空間じゃなくて、みんなの空間だ！』
ってことで喧嘩になっ…

そうこうしているうちに、アイオロスが秘密基地（天秤宮）を

『そうか！新しいトレーニング施設をつくらうとしてるんだな！！』
って勘違いして…天秤宮が…地獄のような宮になっちゃったんだ。」

コン「……そうか……で、誰もまた近づかなくなったと…」

ミロ「ああ。だから老師が帰ってきた日、老師は
『宮に休まるところがない！！』って切れてた。

まあ当然か。岩が降ってきたり、槍が飛び交ったりする宮になっ
たんだからな。」

コン「……まさか…人馬宮（アイオロスの宮）もそんな感じなの
か…今でも？」

ミロ「それよりひどいって！！」（顔青い）

コン「マジで!？」

ミロ「聖衣なしじゃ命が…」

コン「……」

まじで帰ろっか…と思ったコンなのでした。

く
続
く

こちらのオマケの更新がのんびりですみません…

第四十一話・聖域の異変（前書き）

たぶんこれが最終章です！

あと少しですが、よろしくお願いします！！

第四十一話：聖域の異変

第四十二話：聖域の異変

戦闘開始寸前の更木とデジエルの間割り込んできた二つの人影…

「おお！懐かしいのおくデジエルにカルディア！」

「お前は…童虎か！？」

デジエルの目が大きく見開かれた。

そこにいたのは、天秤座の黄金聖衣を纏った青年…童虎と見知らぬ褐色の肌の女性…。

「…邪魔だ、四楓院 夜一。」

「邪魔をして悪かったのお更木。」

だがのお、ぬしの戦つべき相手は聖闘士ではない。」

そういうと、カルディアに近づいていく夜一。

カルディアは警戒心MAXで、夜一をにらむ。

「そう警戒すんな小僧。…童虎、説明はお前からした方がいいじやろつ。」

儂はこいつの治癒をするからの。」

「わかった。」

…さて、単刀直入に言うが、実は今代のアテナ様が連れ去られたんじゃないよ。」

「連れ去られた…だと？」

ありえん！現にアテナ様はこの虚圏なるところに、ハーデスにより
幽閉され…

わずかに残された小宇宙で私たちを復活させ……」

「それは嘘じゃよ水瓶座。」

夜一が口をはさむ。

「おそらく、お前たちを復活させたのは、斬魄刀『黄泉丸』の能力
じゃろう。

あれは、使用者の寿命を半分に削る代わりに、死者を復活させる能
力があるんじゃない。

……もし、アテナ…サーシャを見たのだとすれば、それは霖の坊主
の作り出した幻覚じゃ。

……サーシャは前聖戦のアテナだからの。」

「！？どういうことだ!？」

「つまり……」

――回想シーン――

春麗の見舞いをおえ、一時十二宮へと帰ってきた童虎は、ある異変
に気がついた。

なんとなくだが、荒ぶる小宇宙を感じる…

急いで十二宮を駆け上がる…が、だれも宮にいない。

「ラ・ユータ戦栗!!!!」

「つく…クリスタル ウォール!!」

アテナ神殿が見えてきた頃のことだ。

上（神殿）から響いてくる女性の声と…シオンの声…

「シオン!？」

神殿へ駆け込むと、童虎は目の前の光景が信じられなかった。

「アルデバラン!？ムウ!？」

まず目に入ったのは、この二人だった。

牡牛座のアルデバランと牡羊座のムウが、童虎の足元で倒れていた。目をそむけたくなくなるようなひどい傷だった……まあ、聖闘士だからこの程度では死なないと思うが……

「一体…なにが…」

「来たか…童虎…」

声のする方を見ると、そこにいたのは、やっとの思いで立っているアイオロスとシオン…その前に立っているのは、露出度の高い女性…

「…新手か…」

「何者じゃ!？」

「アズマ達が言っておった破面だ。」

そんなことよりも、一大事じゃ童虎よ。

霖と名乗る者が黒サガを復活させただけでなく、アテナ様を連れ去ったんじゃない!？」

「なに!？」

「すでに、そこまで重症でなかったシャカが追っている。」

お主も追え、童虎よ!！」

「だ…だが、こっちは…」

「心配するな。教皇と、元・教皇候補がいるんじゃないぞ?」

「安心してください、老師！」

傷つきながらも笑顔を浮かべる同僚…童虎は唇を噛みしめると、十
二宮を駆け下りた…

――回想終了――

「…ッというわけで、虚圏に来たんじゃよ。
で、さっきこの四楓院 夜一と会ったのお…一緒に行動してたんじ
ゃ。」

どこからか取り出したお茶を飲みながらいう童虎…

「すまん、緊張感がまるでない。」

「戦の前に茶を飲む余裕がなくてどうする。」

…まあ、この小宇宙の感じからするに、黒サガはカノン達とやりあ
っているようじゃから…

ワシらはこのまま、先に進み、星矢・アテナ様 + 救出と霖殺害を
するようになるのお。」

「…そうじゃの。…わかったか更木？」

「…ようするに、この先にいったほうが強え奴と殺しあえるっとい
うことだろ？」

残忍な笑みを浮かべる更木。

「…まあ、そんなところじゃ。」

「そんなところなのかよ!？」

回復したカルディアがツッコむ。

「よくわかんねえけど、ようすんに、俺たちは騙されてたってことか？」

「そうじゃの…聖戦なんてとうの昔に終わってるし…」

ハーデスが今更そんなことしたら、聖闘士と海闘士だけでなく、冥王軍の一部からの反乱もあると思うしのお…」

「一体どんな時代なんだよ…」

「…とりあえず、私はテレビ念話でこの話を皆に伝えるぞ。」

「…じゃあワシも鬼道で死神たちに伝えようかの…」

「やっと見つけたぜ！強そうな奴！！！」

声のする方をみると、水色の髪の男…腹に穴が開いた…

「なあ…こんなかで一番強ええ奴は誰だ！？」

第四十一話：聖域の異変（後書き）

（死神図鑑ゴールデン聖域）

十七回目・天蠍宮　？

ミロ「……おい、先に進めコン！」

コン「？なんでだ？まだ、3分の1も片付いていないぜ？」

ミロ「実は……今、サガからの念話で

『客人に手伝わせるとは何事だ！？

それにまだ4つも宮が残っているんだぞ？

あまり遅くに教皇の宮を尋ねたら……教皇の機嫌が悪くなって

『うるたえるな小僧ども！！』 連発したらどうする！？

後片付けが大変ではないか！！』

って言われてな。」

コン「……そうか……

なら、俺はいくぜ？」

ミロ「おう！」

……あつそうだ！！一つ忠告してやる。

カミュの前では決して

『氷河』 『アイザック』 『シベリア』 『師匠』 『弟子』

つといった言葉を言うな。」

コン「?カミュって水瓶座だろ?なんで?」

ピン…ときていないコン…

ミロ「…あのな…奴の宮に行けばわかると思うが…
アイツの前でそのキーワードを言うと、
軽く3・4時間は奴の話を一方向的に聞く羽目になる。」

コン「さ…3・4時間!?!」

ミロ「ああ…昔はあんな奴じゃなかったのに…
カムバツク!!弟子を採る前のカミュ!!!!」

なんか悲しんでいるミロ…
というか…暑苦しいほど泣いている…

コン「あ…ああ…わかったぜ…気を付けるから、お前もがんばれよ。」

コンはそれだけ言うと、次の宮…
アイオロス筋肉馬鹿の住まう人馬宮へと向かった。

〜続く〜

第四十三話：虎と豹

第四十三話：虎と豹

「なんだ…あれは…腹に穴が…」

デジエルが唾然としている。

「……報告通りじゃのお…四楓院殿、ここはワシに任せてくれんか？」

よっこらせと立ち上がる童虎。

「四楓院殿はこれから死神たちへ連絡をしないとらんしのお。デジエルも他の聖闘士に連絡があるし、カルディアはまだ完全回復とは遠いからの。」

「おい、俺は？」

「更木隊長もカルディアと同じ理由じゃ。」

「はあ！？俺はまだまだ…」

「強がるんじゃないのお小僧。」

夜一がバシィと更木を叩く。更木はふつとばされてしまった。

「蠍の毒をすべて浴びた上に、身体の中が燃えているんじゃない？それで万全のわけがあるのか？」

「ちっ………」

「というわけで、ワシが相手をしてやるぞ小僧。」

「小僧！？何言つてやがる。お前の方がガキだろ！？」
「護とあんまり変わんない年頃が生意気言っんじゃねえ！！」

刀をすらりと抜き放つと童虎めがけて突っ走ってくるグリムジョー。

「！？」

グリムジョーは前に進めなかった。……童虎が指一本で自身の刀を
押さえている。

「ほっほっほ……こう見えてもワシは今年で261歳じゃよ。」

「マジで！？」

事情を知らないデジエル&カルディアが目を丸くした。

「お…俺より年上じゃねえか……」

「見た目は変わらないのにな…アテナ様の術かなにかの影響か？」

あんぐりと口をあけたまま硬直気味のカルディア(22)と
冷静に分析するデジエル(22)。

「さすがデジエルは『知の聖闘士』とよばれるだけあるのお。

実はサーシャ様に「MISOPETHA-MENOSミソペサメノスという仮死の
術を施されたのお…」

「なんやかんやで肉体は18歳のままなのじゃよ。」

「……なんやかんやって……」

「ほれ！ワシには構わず先にすすむのじゃよ！」

パンパンと手を叩く童虎。

「…………ふざけやがって…………」

相当イライラしているグリムジョーがそんな童虎を睨んだ。

「どつちが格上か教えてやるぜ！！」

軋れ！『豹王』！！！！」

グリムジョーは、そう言いながら指先に霊圧を溜め刀の刃を引つ掻くと、解放された霊圧が旋風を巻き起こした。

旋風がやみ…………現れたグリムジョーはまるで豹…

右頬の仮面が消え、額に仮面が形成される。顔つきも鋭い牙、猛獣の鬣を思わせる長髪、獣の様に尖った耳など、獣人の様に変化していた。

「その背中の剣を抜かしてやるぜ！

『豹王の爪』！！！！」

両の爪から霊圧で十本の青色の巨大な刃を両手に創り、童虎にむかって振り下ろされた。

「童虎！！」

夜一は思わず叫んだ。爪が切り裂いた個所からは土煙があがり、生死は判別できなかつた。

「…………なかなかやるのお。」

煙がはれ…童虎の姿が見えた…………が、

「なにやっつてんだよ童虎！？」

カルディアが呆れ交じりの声をかけた。

……童虎は剣こそ抜いていたが、黄金聖衣の上半分を脱いでいた……
……ようは上半身裸だった。

「なめてんのか？ 聖衣もまとわねえで、俺にそのちっぽけな剣一本で挑もうつていうのか!？」

「最強の聖衣も最強の剣も己の慢心が生み出すもの……」

童虎がじわり……じわり……と小宇宙を高めると、彼の背に虎の顔が浮かび上がった。

「もともと、お前にはこれ一本で十分だったんじゃよ!」

笑顔で剣をグリムジョーにむける童虎。

「言ってくるじゃねえか! 次で仕舞にしてやるぜ……」

『豹王の爪』デスファロン!?!?!」

「」「童虎!?!?!」「」「」

巨大な爪が十本同時に童虎に襲い掛かる……が……

「ば……ばかな……」

爪は童虎の前で止まっていた。九本は童虎の威圧に抑えられ……
最後の一本は童虎が片手で持った剣で……

「ようは力を一点に集中させればいいのじゃよ。」

力のみで押すばかりでは、成長せんぞ。」

「ぐううう」

「これで終いじゃ。『廬山百龍霸』!!」

龍の形をしたオーラが無数に手から放たれ、グリムジヨーを襲う。

「ぐわあああ!!」

見事にはるかかなたに吹き飛ばされるグリムジヨー。

「命はとらんよ……おそらくお主も騙されていたけどさ……」

……

さて、もたもたしないで行こうかのお。」

「あっぱれじゃな、童虎。」

ほれ、更木もデジエルもカルディアも突っ立ってないで行くぞ?」

並んで歩き出す童虎と夜一。

「なあ……更木って言ったか?あの夜一って女の年齢って……」

「なにか言ったかのお〜カルディア?」

物凄く嫌な感じの気配がする目を向けてくる夜一。

カルディアはぶんぶんと頭を振った。

「いえ!!なにも言ってますん……」

三人も(一人は慌てたように)童虎と夜一の後続いた。

――その頃――

「こっから先は通さないよ。」

一護という少年のオレンジ頭が遠くに見えた！！と思った時だった。

シユラの前に現れる二組の男女…

「通してもらわんと困るのでな……
カづくでも通させてもらう。」

エクスカリバー
聖剣を構えるシユラ。

「うふふ…はたしてうまくいくでしょうか？」

二人の男女も斬魄刀を引き抜いた。

番外編：私達も力に…（前書き）

今日…7月15日は黒崎 一護の誕生日です！！おめでとう一護！！
つてことで、番外編です。時は一護が浦原さんと話した少しあとで
す。

一護主役なのに……なんか、ちょっとずれた感じがしますが、一護主
役です！！

それではどうぞ。

番外編：私達も力に…

番外編：私達も力に…

「えっ！？遊子ちゃんと夏梨ちゃんが！？」

胡桃色の髪を持った少女：井上 織姫は悲鳴に近い声を上げる。
一護は友人たちには黙ってアテネに行こうと思ったのだが、啓吾のせいで、仲間たちに伝わってしまったのだった。

「だめだよ黒崎君！危険すぎだよ！！」

「そうだ。君には今、力がない。敵に対する力がなければ、相手の思いつぼだ。」

眼鏡の少年・石田 雨竜がくいつと眼鏡をあげて言った。

「大丈夫だって！俺たちで一護さんを護るからな！」

星矢が笑いながら言う。

「…む…そう言えば…お前は誰だ？」

191?の巨人：茶渡 泰虎…通称チャドが星矢を見下ろす。

「俺は星矢。こっちは瞬。アテナの聖闘士やってんだぜ！！」

「セイント?…あっ！！あの、銀河戦争の!？」

すごい！本物の星矢君と瞬君なんだ！」

目をまん丸くさせる織姫。

顔もスタイルも抜群の織姫に見つめられて真っ赤になる星矢。

「でも、まだ中学生なんだよね？だめだよ、危ないことに首ツッコんじゃいけないよ！」

「井上……聖闘士をやっている時点で、危ないことをしているんじゃないか？」

チャドが困ったように指摘する。

「よし、決めた！！私も黒崎君と一緒に行く！！春休みだしね！！私……黒崎君の力になりたいの！！」

「は！？」

「井上さんが行くなら、僕も行く。危ないからね。」

「……一護は俺の友だ。……俺も力になる。」

「ちょ……石田にチャドまで……」

行く気満々の三人……一護は、自分を心配してくれる仲間がいてなんとなく嬉しかったが……

「でもよ、お前たち……パスポート持つてるのか？」

「……」

黙り込む三人……

「大丈夫だって！！俺だってパスポートないし！！」

星矢が笑顔で言う。

「じゃあ、どうするつもりなんだよ？」

「そりゃ〜海を走るに決まってるんだろ!？」

「……はいいい!？」

あんぐり口を開ける一護とその仲間たち……

一護はおそろおそろ尋ねる。

「あ……あのさ、星矢……海の上を走るってほんとか？」

「ほんとだぜ。だって俺や瞬は光の速度を会得してるから、世界一周なんて造作もないし、

沈まないように足を動かし続ければいい話だろ？」

「バジリスクかよ!!!」

「あのさ、星矢……僕たちは出来るけど、織姫さん達はフツ〜の人間なんだよ？」

そんなこと出来るわけじゃないじゃないか。」

瞬が星矢を諭すように言った。

……織姫・石田・チャドも人間外の力を持っているが、さすがに、海を走れるような能力はない。

「そっか……うつかりしてたぜ……なら、沙織さんに自家用ジェット機出してもらえばいいじゃん？」

ほら、まだ海を走って渡れなかった時に、ギリシャに行ったときに使ったアレ!!」

「あ……あれか……あの頃は、僕たちだけなら泳いでギリシャまで行けたんだけど、

沙織さんがいたからジェット機になったんだよね？」

「泳いでって……死神と比べものにならないな……」

「涅マユリなら、やりそうな気がするぞ？」

石田の脳裏に浮かぶ…異形な死神のニヤリと笑う顔……

めずらしい実験材料が手に入ると聞いた彼なら、それこそ地獄の果
てでも、平気な顔して行けそうな気がする。
いずれにしろ、人間業ではないことは確かだ。

「よし！さっそく電話すんぞ！！」

携帯を取り出す星矢。

「……もしもし……なんだ辰巳かあ……んでさあ……<説明中>……つ
て事でジェット機使わせてほしいんだけどいい？」

交渉中の星矢。一護的に言うと、そういう役は瞬の方があっている
気がするが、ここは何も言わないで置く。

「いやあく楽しみだなあギリシャ！！」

「一度、行ってみたかつたんだよ、僕も。」

「盛り上がっているところ悪いのだが……」

暗い感じのチャドが『100%アテネに行ける』と思っている石田
と織姫に言った。

「飛行機に乗れたとしても、どっちにしろ入国審査でパスポートの
ない俺たちは無理なのではないか？」

「………僕としたことが………そんな初歩的な事も忘れてたなんて
………」

ずううん…と落ち込む石田……。

「でも、星矢君たちは平気だったんでしょ？」

「いや……実は、星矢は忘れていたみたいだけど、僕も星矢も本当はパスポート持っているんだ。」

「えっ……………」

「それぞれの修行地（大方海外の秘境）に行くためには、否応なしにパスポートが必要でしょ？」

でも、脱走しないようにパスポートは、それぞれの師匠に子供たちを引き渡した後、城戸家に保管されることになったんだ。

聖闘士候補生で小宇宙に目覚めていたのなら、盗みで飛行機代を稼ぐなんて楽なことだしね。

……………もつとも、聖闘士レベルになると、海を泳いで渡れるから、飛行機なんていらんだけど……

実際に僕は飛行機で日本に戻ってきたけど、星矢は泳いでギリシヤから戻ってきたみたいだからね。」

申し訳なさそうな笑みを浮かべながら言う瞬。

……………結局、星矢の辰巳説得もうまくいかずに、織姫たちはギリシヤに行けないことになってしまった。

——空港にて——

「一護……土産はいらん。気をつけるよ。」

「黒崎君、お土産はいらないからね。甘いモノとかいらんから。無事で帰ってきてね。私達ここから祈ってるから。」

「ボロボロで帰ってきたら僕が許さないぞ。おおきな土産は邪魔になるから、買うなら

日常的に使える消費品にしてくれ。」

「お前らなあ……」

結局土産が欲しいんじゃないかねえか！！！！！！」

成田空港に朝っぱらから黒崎少年の音が響き渡ったのだった。

四十四話：ジャミールの復讐（前書き）

これから、ちょっと合宿やらなんやらで、かなり忙しくなるため更新がかなり遅くなりますが、よろしくお願いします。

四十四話：ジャミールの復讐

第四十四話：ジャミールの復讐

「……もしかして…ムウの一族か？」

シユラはレイナとブレンの特徴的な麻呂眉毛を見て言った。

「僕（私）の前でムウの名前をだすな！！！！」

物凄い形相で叫ぶ二人……

「忘れもしない……私たちはジャミールでムウにひどい目にあっただから！！」

「しかも僕たちの方が先輩なのに……」

「だいたい師匠シオン様が、ちよつとばかし力があるからって

甘やかすからよ！！！！」

「うう……思い出したくもない……」

なんというか……敵前で苦々しい思い出に浸る二人……

「ムウといえば、いつか『シオン様が村へ行って食糧買ってこいて言っていましたよ』」

って澄ました顔して、ウソいつてたよね……」

「ああ……それで、嘘だと知らない私たちは亡霊がわんさかである坂を『ひいっ！！』って言いながら下り……

そこで、ばったり聖域から帰還したシオン様と鉢合わせ。

『ムウがウソなんてつくはずなからう！！脱走しようとしたな！！』
『！』
『つて決めつけやがって……』
『うるたえるな！小僧ども！！』
『をやられたっけ……』
「うう……姉ちゃん……僕……吐き気が……」
「涙ぐむな！弟よ！！」
「……………」

なんか……攻撃を仕掛ける気にならなくなってきたシユラだった。
ムウは『黄金聖闘士一番の腹黒』で知られている。
だから、目の前の敵が言っている事はおそらく本当の事だろう……
……ものすごく気まづくなってきた……

「だいたいさあ……ぐすん……ムウの奴、聖衣修復のときだって
自分から血を出さないで、いつも僕たち攻撃して手に入れてたよね。」
「……………」
「ぐすん……言わないで……………」

完全に自分の世界に入ってしまったっているようだ……
シユラは、こっそり横を通り抜けようと一歩前にでた時だった。

「……………」だから、この力を……聖闘士になる道を捨てて手に入れた……………」
「……………」私たちは旦那のため……………」ムウをケツチョンケチョンにする
ため……………」
この戦いに勝利する……………」やれ、ブレン。」
「いくよ……………」天より戻れ『黄泉丸』！……………」

ブレンの斬魄刀が変形する……………」漆黒の短刀に……………」

「黄泉帰れ……………」前聖戦の魚座の聖闘士……………」アルバフィカよ！！！！」

そのまま地面に短刀を突き刺すと、そこを中心に漆黒の沼のような空間が、足元に広がっていく……
そこから人が現れた……

「アフロ？」

そこにいたのは、水色の髪と泣きほくろを持った女性……に見えるが、魚座っていつていたので、同僚のアフロディーテ同様・男性なのだろう……

「うう……ここは……」

「姉ちゃん！ いまだ！！」

はあ……はあ……と荒い息をしながらブレンはレイナを見る。

「分かっているわ。操れ『マリオネット魔術人形』」

いまいち状況のつかめていないアルバフィカの黄金聖衣の内側から
守り袋が飛び出した。

「ふふふ……この魔術人形は相手の最も大切なモノを喰らうことで、
その相手を操ることが出来るの。」

最も、目に見えるものだけ……例えばそれは黒猫のぬいぐる
み……亡き妻の形見……弟子の写真……幸せだったころの写真……」

パクリつとアルバフィカの守り袋がレイナの刀に現れた口に含まれ
た。

「ぐわあああああ……！！！！！！」

突然頭を抱えてうめくアルバフィカのアルバフィカだったが…数秒後にはダラリと腕を垂らしたまま動かなくなった。ニタリと笑うレイナ。

「さあアルバフィカ。その山羊座の聖闘士を殺して!!」

アルバフィカの虚ろな目がシユラを捕える……

「つく……聖闘士同士で…しかも魚座とは戦いたくないが、やむおえん……お相手いたす!!」

エクスカリバ
聖剣の拳先をアルバフィカにシユラは変えた。

四十四話：ジャミールの復讐（後書き）

〔死神図鑑ゴールデンエン領域〕

十八回・人馬宮

コン「うぎゃあああああ……！」

コンは走っていた。

後ろを振り返らずに……ひたすら前へ前へ……
そうでもしないと……

ゴロゴロゴロつと転がってくる大岩によって、押し花のようにされてしまうからだ。

コン「あのヤロー……！会ったらぶん殴ってやる……！」

岩からやっこの思いでのがれたコンは……

コン「……いい加減にしゃがれアイオロス……！」

目の前に広がるは急流……なんかすごい音を立てながら、その音に
ふさわしい勢いで流れている……

コン「……これを渡れってか……？」

……ふざけんな……！さっさと出てこい……！

『なぜか夜中に聖衣もつけない雑兵姿でアテナ神殿の周りをウロウ
ロしていた上に、』

弟に無罪の罪をなすりつけたまま赤子のアテナを助けた英雄……
だが、本性は誰もが認める天然筋肉馬鹿……射手座のアイオロス」
「！！！！！！」

アイオロス「ははは！なんか俺の紹介文って他の奴より長いな！（笑）」

いつの間にか後ろにアイオロスが立っていた。

コン「……怒ってるのか？あんな……俺の方がずっとー」

ロス「いや、怒ってるわけないだろ？
褒められてうれしいなっ！！って感じだ！！」

満面の笑みを浮かべる聖域の英雄……

コンは言葉を失った。

コン「……まあいいや……ここから出せやコラ！！」

ロス「？自分から入ったんじゃないか？」

コン「事故だよ！！」

『あ、これがミロの言っていたアスレチックの入り口か』って
思っただけなら、そのまま足を滑らせちゃったんだ！！」

ロス「うんうん。最近の若い奴で自分から俺のアスレチックに入る
奴なんていないからな。見上げた根性だっと思っただぞ。

俺はお前のその根性が気に入った！！この後のアスレチックもがんばれ！！！！」

コン「事故って言うてんだろぅが!!!
っーか、この後もこんな感じで続いたら死ぬ!!!」

ロス「大丈夫だ!!俺は死ななかつた。

他にも俺の弟のアイオリアなんて4〜5歳の内に入れたが、

一週間ほどして出てきたぞ!!!

……まあ……なんだかわからないけど、なぜか聖域に流れる川の下
流で

気を失った状態で見つかったが……」

コン「確実にここで溺れて流されたんだろ!!!

ってか、そんな幼いガキに過酷すぎだろ!!!」

ロス「何言つてんだ?これくらい出来ないと聖闘士になれんぞ?
ほら、コンも行け!!!」

コン「俺は聖闘士になるために来たんじゃないやねえつての!!!」

ロス「何言つてんだ!ほら行け!!!」

ポイ

バツシャ~~~~ン!!!

コン「お…俺!泳げねえのに~~~~!!!」

コンの悲鳴が洞窟中に木霊した。

〜続く〜

〳〵更新延期のお知らせ〳〵

〳〵更新延期のお知らせ〳〵

……恥ずかしながら、作者（九条）の、この話のストックがなくなってしまう……

なので、しばらく更新を延期させてもらいます。

再会予定は一応、今夏後……ですね。なるべく九月には再開したいと思いますが……

まだ、未定です。どんなに遅くなっても、秋には絶対更新します！！

294

もしかしたら、一気に投稿するかもしれませんが。

また、『聖域の死神』のストックがなくなっただけで、他の作品のストックは、残っているので、

そちらは、これまで通り、続けていきたいと思えます。

楽しみにしていただいている人、本当にすみません！！！！

第四十五話：人形停止と霖の目的（前書き）

久々の投稿です！！

あとわずかですがよろしく願いします！！！！

第四十五話：人形停止と霖の目的

(……………とはいっても……………)

シユラはアルバフィカが投げってくるバラを聖剣で切り刻んでいた。
額には汗がにじむ……………
エクスカリバー

以前、アフロディーテの奴が言っていた……………

古来から魚座は魔宮薔薇と共存できるように、血が猛毒に染まっていたのだと……………

アフロディーテの前の代で、新たな耐毒の薬が発明されたことで、彼は人と交わる事が出来るが、目の前のアルバフィカは……………触れた瞬間、毒が触れたところから体内に入ってくるのは明白だった。

……………このまま逃げ続けてもらちがあかない……………

ちらりと笑いながら観戦している麻呂眉姉弟を見る……………

あのアルバフィカを…他の聖闘士や死神を操っている姉の方を殺せば、術は解けるに違いない。術というのは術者が死んだら効果を失うものがほとんどだからだ。

だが……………近づくのは容易ではない。……………バリアーでも張ればよいのだが……………

ん？バリアー！？

その時、シユラの脳裏に、とある光景が浮かんだ。

「手があるじゃないか！」

「何をしようと無駄だ……………クリムゾン・ゾーン……………！」

毒に染まった血の雨がシユラに降り注ぐ。

「あはは！……死んだ！……死んだよ！……山羊座の聖闘士！……！」

「……あのさ……少しテンション落としなよ……疲れる。」

ブレンは、はしゃぐレイナを見てため息をついた……が……

「……えっ……」

隣に座っていたブレンは声を出せなかった。……目の前で何故か姉がまっ二つに……

「動くな」

のど元に突き付けられる聖剣とシユラの鋭い目がブレンの動きを止めた。

「な……なんで……？」

「この血の雨に降れないように、一定量の小宇宙と霊力を放出し続けているだけだ。」

……もつとも、アイツが使っていた方法を真似ただけだがな。

さて……霖とやらの目的を教えてもらおう……」

ブレンは震えた目でアルバフィカの方を見た……が、すでに洗脳は解かれているらしく、ポカン……と突っ立っている。

「……旦那の……目的は……」

真の崩玉の完成と、藍染様を…助け…ることだ。」

――その頃――

「うっ…ここは……」

「目が覚めたか？黒崎一護？」

目の前に霖が立っていた。

一護はくらくらする頭を必死で回転させた。

「…遊子…と夏梨は？」

「安心しろ。彼女らはもう空座町の自宅にいる。……もちろん、五体満足精神良好だな。」

「よかった……」

「って……なんで俺は拘束されているんだ？それに、その女は？つか、星矢までなんで……？」

「簡単な話よ……全ては崩玉のため……藍染様のため……」

霖は漆黒の鏡を手にした。

鏡の延長線上には…小さな…片手に収まるくらいの珠があった。

「なにを……？」

「僕にとって藍染様は……神だった…私の…神……」

何かを思い出すように、遠くを見る霖……

「あの六車隊長よりも…他の隊長よりも…ずっと…ずっと…神だから、あの人の役に立てるよう、僕はアノ人の崩玉を強化する…いや、それすらも凌ぐ崩玉を作ろうと思った…」

そして、数十年前、その答えを見つけた……」

「答え？」

「そうだ……魂を与えるだけではない……」

神の力を得るモノを作るには神の力が必要だ……それから、成長には絶望を……」

最後の味付けとして崇高な霊力と小宇宙を……」

面白そうに一護を見た。

「並々ならぬ絶望を得るため…数年…いや、数十年の月日を費やした。」

あの頃から影が見え始めていた隊長の妹・アズマの支えを全て奪う

…そしてかなりの月日が経ってから、そこに一筋の光を差し込み…

…一気に闇へと落とす……」

それで絶望は完璧よ。単純な奴ほど絶望に落ちやすい……が、神の力と小宇宙というのが手に入れるタイミングが分からない……」

「へっ……死神の管轄外だからな……」

「だが、僕はそれをクリアした。」

ジャミールという場所にいた落ちこぼれの姉弟の力を借りてな。

まだ未完成だったが崩玉の力で死神の力を与えた……そして、時を待った……」

神であるアテナが真に降臨するときを……そして常に彼女の傍らにいるという神殺しの小宇宙をもつ者を……」

そして、ついに時は来た……」

霖の顔に邪悪な笑みが広がった。

「王鏡にため込んだ絶望と、崩玉に与える……!!
そして……お前たちの霊力・小宇宙を全て、崩玉に与える……!!」

「くっ!!」

意識が……せつかく戻った意識が、力と共に……抜けていく……

俺は……せつかく……力を取り戻したのに……

俺は……俺は……

一護の意識が再びとんだ。

「ふふふ……はははは……!!!!!!」

青い光が崩玉に注がれる……

「これで……藍染様……のお力になれる……!!」

「そこまでだ!!」

霖の背後に現れる影……

「ああ……来たんだ……

アズマ……」

第四十五話：人形停止と霖の目的（後書き）

〔死神図鑑ゴールデン聖域〕

十九回・磨羯宮

コン「……はあ……はあ……俺って……よく死ななかつたな……」

コンは杖を突きながら上の宮を目指す。

コン「……ああ……確かここは、『アテナに忠実……とかいいながらアテナを殺そうとした、いつも年中組の尻拭いをさせられる聖闘士……山羊座のシュラ』の宮だよな。」

シュラ「……………」

コン「オッスー!!」

俺はコンっていうんだ。じゃあ俺は上に行くぜ。」

シュラ「待て待て……俺だけ扱い酷いんじゃないか？」

コン「……だってよお、お前は本編でも活躍してるじゃねえか？」

シュラ「それは話が話だからだろ！」

それを言うのなら、ムウやシャカの扱いが悲しいと思っぞ？」

コン「仕方ねえんだよ……!!」

九条の奴が完結へ向けてラストスパートしてるんだからな……!!

後何話だよ！？考えてみやがれ！！

残りの話数で『教皇の宮』まで行かないといけねえんだぞ！！」

シユラ「……………」

コン「だから俺はいくぜ！！あばよ！！」

シユラ「……………次の宮では『白鳥』『イカ』類の言葉を口にしない方がいい……………」

コン「はぁ？」

シユラ「『弟子』というキーワードも口にするな。

そうしたら早く抜けられるはずだ。

くれぐれも下手にしゃべるな」

コン「……………おう？」

コンは忠告（？）を聞くと、上を目指した。

コン「ミロから聞いた限りだと、上の……………宝瓶宮の奴は気がいいと聞いたんだけどな……………」

一抹の不安……………それが数分後に現実になるとは……………

コンにはまだ分からない事だった……………

く続くく

第四十六話・予期せぬ出来事

「…………この霊圧は…………」

京楽は遠くを見ると、悲しげな顔をした。

「どうした!？」

肩で息をしているアイオリアが尋ねる。

「いや…………アズマちゃんがとうとう霖の所に着いたな…………って思っ
ね…………」

そろそろ終わりにしないかい?シジフォス君?

弓を構えている射手座の聖闘士…………シジフォスに向かって京楽が言う。

「終わり?私はアテナ様のため…………最後まで戦い続けるまで!」

「だから、君たちは騙されているんだって。」

「問答無用!ケイローン…………」

ドッシャーん!…………

間に割り込むように、何かがふつとばされてきた。

「…………っ!師匠!…………アレ?」

飛ばされてきた人物とアイオリアの目があった。

「俺!!!?」……って言うてる場合じゃないや!!!」

アイオリアとそっくりな獅子座の聖闘士……レグルスは小宇宙を高め直す。彼の視線の先に映るは……

「黒サガ?」

「知り合いか?」

「……ああ……しかし……アイツはアテナ様の力で消滅したはずでは……まあそんなことはどうでもいい!!!京楽!悪いが俺はあいつを倒す!!!」

「……好きにしろ」

返事を聞くや否、アイオリアは小宇宙を高め始めた。

(俺の小宇宙に似てる……)

レグルスは頭の片隅で感じた。それと同時に、この男に対抗心がわいてきた。自分も小宇宙を高める……

「ふん……獅子座レオの小僧共が……」

黒サガは不敵に笑う……

「……ライトニング・プラズマ!!!」

光速の拳が炸裂する!

「な……何が起こってるんだ?」

満身創痍で… かるうじて立つことが出来ている恋次は息をのんだ。
… 実際は、アイオリア・レグルスが光の速度で億単位の拳を放っているのだが… 黒サガに襲い掛かる光の洪水… 恋次の目にはそう映っていた。

「… 勝負… あったか？」

「いや、この程度であの男が死ぬわけがない。… 最後に大きいのをかますぞ。準備しろ小僧！」

「小僧じゃない、日番谷隊長だ。」

カノンの言葉で、ピキツツと額に筋が浮かぶ冬獅郎… だったか、言われたとおりに霊圧を高めていく…

「ギヤラクシアン・エクスプロージョン！！！！」

「竜霰架！！！！」

「狒骨大砲！！！！」

ズドオオオオオン！！！！！！

辺りに黒い煙が立ち込めた。

「…………崩玉のために…こんなことを…………」

アズマは振るえる刀の先を霖に向ける…………が、霖は平然としていた。

「知らないの？真の崩玉の力を？」

「…『崩玉の周囲にいる者の心を崩玉の意思によって具現化する力』
…だろ？」

「つまり、…………願を叶えることが出来る力…………ということだ。

簡単に言つと、七つ集めなくても願いがかなうドラゴンボール…と
でも言つておきましようか？

もつとも、ドラゴンボールとは違い、かなえることができる願は一
度つきりですがね。」

「一度つきり…………なら、その一度を阻止するまで！！
卍か…………」

ズシイイン

突如、身体が重くなる…冷や汗が湧き出ているのがよく分かった。

霖の仕業…………かと思つたが、そうではないようだ。霖自身も何が起
きたか分からないようだ。

「いったい…………！！？」

…………目に映つたのは想定外の光景…………

「グオオオオオオン！！！！」

……虚圏に響き渡る咆哮……それは1人の少年の叫び……いや、少年だったもの……といったほうが正しいのかもしれない……

「…死神…代行？」

「グオオオン！！」

バリン！！と音を立てて…まるで紙を引きちぎるかのように、鎖から解放される一護……だったもの……

彼から発せられる、まがまがしい霊圧は……虚そのものだった……いや、霊圧だけでない。2本の角と仮面紋のついた仮面…白い肌…胸の孔……そして、オレンジの短髪は長髪になっている……

「どういうことだ？説明しろ、霖！！」

「…まずい……霊圧を吸い取りすぎたか……」

元々、アテナの血の力で一時的に力を戻した急ごしらえのモノ……内なる虚まで抑えることは出来なかったか……

まあいい！今ここで願を叶えればいいまで！！僕の願いは……」

霖の言葉が言い終えることはなかった……

「嘘……」

アズマは一步も動けなかった……目の前で深紅の光が炸裂した……もちろん、霖の姿は跡形もない……

コトン……

崩玉が地に落ちる音がむなしく響いた……

「うう……ん……な……なんだあれ？」

目を覚ました星矢が目を丸くしている。
一護がゆっくりと、鎖につながれた星矢を見た。

「まずい！！こつちだ！！死神代行！！」

このままでは、動けなくて戦う術がない星矢は、あつという間にお陀仏だ！

「破道の三十三『黄火閃！！』」

黄色い閃光が一護に向かって放たれた……が

「……やっぱりか……」

下唇を噛むアズマ……一護は攻撃を片手で消滅させてしまった……
この程度の霊圧では……鬼道では倒せない……
でも……生憎ともう卍解を使える霊力は……

「絶望的って奴かな？」

アズマは斬魄刀を構えなおした。

第四十六話・予期せぬ出来事（後書き）

（死神図鑑ゴールデン領域）

二十回・宝瓶宮

コン「…で…着いたんだけどよあ…入るのが怖いんだよなあ…」
ここに来る前、シュラやミロから、何度も念押しされたことが頭の中をグルグル回る…

コン「そんなにヤバいのか？…まあ確かに『自称クール』とはいいつつ弟子の事になると性格豹変する水と氷の魔術師・水瓶座のカミユ』って聞いたことはあるけどな…」

コンは頭を振った。

コン「…いやいや、こんなところで立ち止ってたまるかよ！！
このまま辿りつかないまま最終回、お疲れ様でした〜ってなるわけにはいかねえし！！」

勇気をもってコンは今！宮に足を踏み入れたのだった！！

コン「…さむい…」

第一声はそれだった。

「コン」……さむい……」

第二声もそれだった。
が、なんの変化もない……

「コン」……さむいって言うてんだよ……温めやがれ……この弟子は
かが……」

あつ……コンは言うてから後悔した……

「カミュ」……そこで何をしている？」

この宮の主が現れた。

～続く～

第四十七話：殺すべきか生かすべきか

もし…あの頃に戻れるのなら……この地の果てまででも……

私は全力で走り続ける

この世界を照らす一筋の光を求めて…

もし…あの頃に戻れないのなら……

私は闇になろう

すべてを拒絶する漆黒の闇に…

第四十七話：殺すべきか生かすべきか

「雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ 縛道の六十一」
六杖光牢』！！」

六つの帯状の光が胴を囲うように突き刺さり、一護の動きを奪ったかのようにみえたが……

パシイン

「っち……ちゃんと詠唱しても、この程度か……」

いとも簡単に拘束を解く一護を見ながら、次の対処法を考えるアズマ……。

「グオオオン!!」

雄たけびを上げると、一護は深紅の光を作りだす。

「やばい!虚閃か!?!…縛道の八十一『断空』」

防御壁を作りだし、身を守る……が……

「っ!なんてパワーだよ……」

八十九番以下の破道を完全に防ぐ防御壁が……アズマの霊力不足もあるかもしれないが……とところどころにひびが入っている……。

「あぶねえ!!」

「えっ……!?!」

星矢の叫びに近い声……あわてて振り返ると……真後ろに一護が……

「瞬閃!!」

あわてて飛びのくアズマ。さっきまでアズマがいたところには大きなクレーターが出来ていた。

「アブないな……」

荒い息をしながら瞬閃を解く。足元がふらついているのがよく分かる。でも……

「負けるわけには…いかないかな。」

もう一度だけ…刃を一護に向ける。……一護は…刀を振り上げ……

「オーロラ・エクスキュージョン!!!」

「次の舞『白蓮』!!!」

オーロラを思わす凍気と白い雪の塊が、瞬時に一護の腕から全身が固まらせる。

「く…朽木に……カミュ？」

朽木ルキアとカミュが、構えている……それだけではない。更木も夜一も童虎も……なんか服に14個の刺されたような穴が空いている。碎蜂と蜂紋華ほうもんかを刻むところが他にないくらい刻まれている。ミロもいた。

「なんだよ、あの化け物!? さくつと殺して……」

「だめだ!! あれは一護…私の仲間なのだ!!」

赤く光る爪を構えるミロを制止するルキア。

「一体どうしたのじゃ？」

「霊力を吸収されすぎて、力が暴走したらしい。」

「ふむ……それは少し困ったのお……」

「グオオオオオン!!!!!!」

対策案を考えるうちに、自身を拘束していた氷を破壊する一護。彼の咆哮が虚圏中に響き渡る。ビリビリっつと空気が震えた。

「つく!?なんだこれは…?」

「へっ!!面白いじゃねえか!!!」

更木が切りかかっていく……が……

「待て更木!!」「よさぬか、死神!!」

夜一と童虎が二人がかりで更木の動きを止めた。

「何を……」

「アレは一護なのじゃ。助ける方法を……」

「くだらねえな。アレはもう立派な虚じゃねえか。」

「だからといってだなあ……」

「殺すにしろ殺さねえにしろ、致命傷を負わせねえとマジイだろ。」

更木は強引に二人を振りきると、刀を振り上げて一護に切りかかる。一護の方も斬魄刀で対抗する。

そのスピードは……黄金聖闘士クラスだった……

更木は一護の速度に対応していないためか、浅い傷が全身に……深い傷だっっていくつも刻まれていた。

「……どうしたら……」

その時、足元に忘れ去られていた小さな珠を見つけるアズマ……

(その手があるじゃん!!!)

冷たいそれを手に取ると、アズマはスウ〜と息を吸い込んだ。

第四十七話：殺すべきか生かすべきか（後書き）

〈死神図鑑ゴールデン・イン・聖域〉

二十一回 宝瓶宮？

コン「……………」

カミュ「…それで、この写真はだな、氷河が初めて生肉を食べられるようになった日の事で……………」

コン「あゝもう分かったって……………」

もう、氷河の写真はいいから。見飽きたってレベルじゃないから！」

ここ2時間ほどエンドレスで氷河の写真を見せつけられていたのだ。好きでもない…しかも男の写真を見せつけられぬのは、かなりしんどいモノがあった。

なんと意識が行きそうになったか……………そのたびに、部屋の温度を下げられて、目覚めざる負えない状況になっていったが……………

カミュ「…そうか？しかしすまん。すぐに用意できるのは氷河のモノだけなのだ。」

コン「…どづいうことだ？」

カミュ「ふむ……………氷河には悪いが…本当に悪く甲乙つけるのは良くないことだが、

氷河は二番弟子なのだ。一番弟子のアイザックの成長記録は、しっかり奥の部屋いっぱい……はみ出るくらいあるのだ。さすがの私でも、すべて話したら、明日の執務に差し支えることになるからな。」

コン「……もう、何も言わねえ……」

カミュ「お前がどうしてもと懇願するのなら……」

コン「俺は興味ないからいい。」

カミュ「遠慮するな。ちょっと待ってる。」

奥の部屋へ歩んでいくカミュ……

コン（よし……この機会に……逃げる……）

ゆっくり……気が付かれないように動くこととする……が、現実そううまくいかない。

カミュ「ダイヤモンド・ダスト！」

カキーン……！

コン「なっ……！」

足元だけが凍るコン……

カミュ「逃げるのは早いぞ。

さてと……これだ！これはアイザックが初めて小宇宙に目覚めて……

…」

説教より辛い、弟子の自慢話を永遠と聞き続けると思っていると、脱力感が一気にあふれ出てきた……

コン（帰りてえ〜）

そつとため息をついたのであった。

〜続く〜

第四十八話：最後の一手

第四十八話：最後の一手

なんで思いつかなかったんだろうか……と、手の中に納まっている小さな珠を見てアズマは思った。
死神代行の暴走を止めるために……これの力を使えばいいんじゃないか!!

アズマは、すうーつと息を吸い込むと……

「グオオオオオン!!!!」

「つつ!!?」

突如、一護のあげた雄叫び(?)の衝撃波が周囲を襲う。

カラン……

「あつ!崩玉が!!」

手から転がり落ちる崩玉。慌てて後を追うアズマ。
目に映るのは崩玉だけ……あと……数センチ……

「よし!!」

小さく冷たい感触が手に戻ってきた。ほっと息をついたとき……

「何をしている！ボサつとするな！！」

気が付くと、いつの間にか来ていたシュラが、アズマを先程とは別の場所に移動させていた。

「何が……………」

無言で先程までアズマがいたところを見るシュラ。それでアズマも納得した。

先程までいた場所には巨大なクレーターが出来ていた。……………どうやら、この崩玉を握っている間は、霊圧探知も小宇宙探知もおろそかになるようだ。……………早めに終わらせないと……………これが、最後の一手かもしれないのだから……………

「崩玉！私の願いを聞いてくれ！！私の願いは……………」

その時、視界の端に映ったものを見て、この先に出た言葉は全く別の言葉になってしまった。

「つく！！どうすればよいのだ……………」

ルキアが苦痛の色を顔に出した。袖白雪が生み出す氷は薄っぺらいモノ……………一護の体を覆うことは出来ても、動きを止めることは出来ない。だからといっても、ルキアの扱える縛道でも袖白雪と同じことだ。

「一護……たわけ！！私を忘れたのか！！お前は……お前は虚に飲み込まれるほど、弱い奴だったのか！？」

「だめだ、死神！！今の一護を挑発すんじゃねえ！！」

ジャリつと体を拘束している鎖をならして……確かペガサスの聖闘士だったと思う……が叫んだ。

「黙れ！一護は私の仲間だ！！」

「それを言うなら俺の仲間でもあるぜ！！」

でもな、今の一護は一護じゃねえんだ！化け物に身体をのつとられ……」

「いい加減にしろ、小僧！！乗っ取られても乗っ取られても、一護は元に戻ってきた。今回も……呼びかければ必ず……」

「いい加減にするのはあんたの方よ、朽木。」

パンっという乾いた音を立てて、ルキアは何者かに平手打ちされた。

「！？松本副隊長！？」

そこにいたのは松本 乱菊だった。腰に手を当てて、ルキアを見下ろしている。

「私も認めたくないけど、今の一護は一護じゃないわ。それに……死神の力だって急ごしらえの一次的なもの……。それすら全て奪われたのだから……。虚の力を普通の魂魄が抑えられるわけない。」

「ですが……。！？」

物凄い殺気を感じ、ルキアは冷や汗をかく。見てみると、一護がルキア達に向けて、虚閃を放とうとではないか！！！！

ルキアは避けようとおもったが……

「つくそ!!何だよこれ!?オリハルコンか?……これさえなければ動けるのに……」

「あきらめてはなりません、星矢。きつと方法が……」

「そんなこと言ってる暇があるなら、この鎖を解くことを考えよ、沙織さん!!!」

そう、ルキアと乱菊は避けることができるのだが、このままだと星矢と沙織アテナが動けぬまま……おそらく彼らの灰もその場所には残らず、大きなクレーターが出来るだろう。

「唸れ『灰猫』!!!」

乱菊が斬魄刀を始解化させると星矢たちの前に躍り出た。

乱菊の斬魄刀の刀身が灰になって宙を舞う。その刀身はまるで乱菊達を護るかのように宙を舞っていた。

「なら私は……」

ルキアは乱菊の隣に立つと、袖白雪を構える。

「『樹白』!!」

刀で地面を刺した場所から地面が凍っていく……一護に向けて……虚閃が放射される前に……一瞬でいいから……一護を凍らせることで、少しでも時間を稼ごう。そしたら……何か打開策が浮かぶかも知らない……

しかし、現実にはルキアを裏切った。

「グアアアアン!!!」

氷が到達する前に、虚閃を放つ一護。ルキアは思わず目をつむった
……

「……？」

「まったく……何が起きたんだ!？」

目を開けると、目の前にいたはずの一護がない……というより……
…誰かに抱えられている。

「!？お前…どうやって……」

ルキア・乱菊…そして沙織を抱えていたのはペガサスの聖衣ではなく、
黄金に輝く……羽のついたプロテクターを纏った星矢だった。

「まったく……感謝しなよ、アンタら。」

苦々しい顔をしているのはアズマだった。手にはヒビだらけで崩れて
いく珠を握っていた。

「一体……」

「霖特別性の崩玉は一度だけ願を叶える……本当は、死神代行を元
に戻そうって願おうとしたんだけどな…」

だが、それを願っていたら……お前ら、死んでただろ？

だって……ようやく唱える状況になった時には、虚閃が放出される
寸前だったんだからな。」

「そうか……だからいきなり鎖が粉々になった上に射手座の黄金聖衣が……」

手をグーパーさせる星矢。

「分かったなら戦うぞ。…まあその前に、動ける星矢とシユラさんでアテナを安全な場所へ。」

松本副隊長と朽木は少し離れた場所から鬼道でサポートを…」

「待て、俺は…」

「シユラは、この中で一番動けるだろ？だからボロボロの星矢の付添だ。」

とはいっても、私もつらいから、早く戻ってこいよな。」

「……………ああ。行くぞペガサス。」

「おうー!!」

「グオオオオオ!!」

二人を追おうとする一護。

「行かせるかよ!!破道の八十八ひりゅうげきぞくしんてんらいほう『飛竜撃賊震天雷砲』!!」

アズマは手のひらから光線を放った。見事一護に命中。

(確か……あのツノを折れば、元に戻る…んだよな?…よし…………)

アズマは一護に狙いを定めたが…

「グアアアアアアアン!!!」

一護がいきなり長い爪を伸ばしてきた。不味い!!避けないと!!…
っと思った……………が…………

「あれ？」

巨大な霊圧が一気に近づいたことで、今までの疲労が一気に押し寄せてきた。思ったように動けない……

「ぐはぁ……！」

閉まったと思う時にはいつも遅い……

アズマの身体を一護の……虚の五本の爪が貫いていた。

第四十八話：最後の一手（後書き）

〈死神図鑑ゴールデン聖域〉

二十二回目 双魚宮

コン「いやあ〜助かったぜ!!」

アフロ「礼には及ばないよ。」

コン「いや、マジだつて!!だつてあそこでお前が向かいに来ていなかったら、俺は二・三日位さあ、あの寒い宮でお泊りすることになつてたぜ……」

ホントにありがとうな『カこそ正義!!』つて言っていた聖闘士の美貌の持ち主だけど、アニメ版の扱いはひどく、Y A H O!の人氣投票の映像も、あれだけ見たら誤解されそうなキャラNO.1! 魚座の黄金聖闘士のアフロディーテ』!!」

アフロ「……紹介文、長すぎじゃないかな？」

というより、かなり悪口が……」

コン「今更つつこむなよな!!」

アフロ「……まあ、それは置いておいて、じゃあ、とりあえずローズティー入れるから、入れたら、さっさと飲んで先に進んでくれないかい?」

コン「はい？なんで？」

アフロ「……はあ………君はわからないのか？

九条が終わらせようと必死な事に………」

コン「……九条………って………ああ………作者か。望実じゃないよな」

アフロ「だれだ？」

コン「アニメオリキャラだよ……！」

アフロ「………そうか。まあ私には関係ないのだが………

分かったならとつと行け。

滅多に出番のない教皇様シオンが首を長くして待っているぞ。」

コン「………それを言うなら、お前も出てないんじゃない………」

アフロ「それを言うなら、シャカの方が出ていない。」

コン「………確かにそうだけどよぉ………俺だって疲れてるんだ……！」

アフロ「疲れるのは皆同じことだ。

分かったならさっさと進め。早くしないと『ロイヤル……』」

コン「お邪魔しました……！！……！！」

アフロ「ディーテが白バラをちらつかせるのを見た瞬間に走り出す」
ン。

せっかくここまで生きてこられたのに、最後で死にたくない……！！

猛スピードで走っていくコンなのでした。

この先に待っている地獄を知らずに……

〈続く〉

第四十九話：Wake up!!

第四十九話：Wake up!!

(あれ?なんでだろう……視界が……端から暗くなっていく……)

ボタン……と倒れ込むアズマ……

「六車四席!?!」

「アズマ!?!」

真っ先に駆け付けた夜一が傷の具合を確かめる。

「……!?!?これは……」

「どうしたのじゃ?」

「……残念だが……」

この先の言葉は、一護の咆哮によって聞こえなかった。

童虎はポキ……ポキッと腕を鳴らした。

「お主には悪いが……この子を傷つけるわけにはいかないので……
なにせ、大事な友人の妹じゃからの。」

童虎の脳裏に浮かぶのは100年以上前に出会った友人の顔……

「『もやんちやくじやう廬山百龍霸』!?!?!」

何体もの竜が一護に襲い掛かり、一護の手足が食い千切られた。

「一護!?!」

「案ずるな嬢ちゃん。四肢を無くして、動きを止めただけじゃ。

それに…今の少年は虚…自然治癒が出来るはずじゃ。」

「ってことは、少ししたら復活ってことか!?!」

「……ミロ…少ししたらじゃない。」

カミュの額には汗がにじんでいた。

「もう回復している。」

「はい!?!」

見ると実際に一護は完全回復していた……なんか、さらにヴァージョンアップした状態で…

「っ!?!不味いじゃねえか!?!」

さっさと一発で殺らねえと……」

ミロが赤く輝く爪を……

「止めてください!?!…一護は……私の仲間です!?!…」

ルキアがミロの前に立ちふさがる。

「じゃあ、嬢ちゃんはアレをどうする気なんだ?」

「嬢ちゃんだと!?!?たわけ!?!…私はお前なんかより、ずう〜と年上だ!」

分かったかクソ餓鬼!?!」

「クソ餓鬼！？何言ってやがるんだっての！！！！お前の方が……」

「待て待て三口……喧嘩している場合ではないぞ。」

「すまなかつたな、死神。この男は口が悪い……」

「っな！！」

「分かればいいのだ……とにかく、一護を殺すことは……」

「ペガサス流星拳！！！！」

ペガサスの聖衣を纏った星矢が一護に拳をあびせた。

「貴様！！そ奴は……」

「一護さん！！俺だよ！星矢だ！」

力の限り叫ぶ星矢。

「あんと俺は直接拳を交わしたことわない……でも、俺の小宇宙を感じたことはあるだろ？」

俺の小宇宙を忘れたのかよ！？」

ゴボゴボと音を立てて再生する一護の反応に反応はなかった。

「忘れたってのか？それなら、思い出すまで、俺は諦めねえぜ！

魂まで……忘れるわけがないんだからな！！

『ペガサス流星拳』！！！！」

星矢は再生途中の一護に向かって、もう一度技を放った。

「やれやれ……あきらめが悪いのお……」

朽木、お主……命を懸ける気はあるか？」

夜一が言う。

「もちろんです!!」

「それなら……これを使い。」

手渡しされたのは……

「これは……六車四席の斬魄刀？」

「そうじゃ。アズマの斬魄刀……御先狐は時空を操る力を持つておる。これにはすでに先程、アテナの霊血を数滴かけてもらってある。

あとは、あの時と同じように、お主の霊力を、この刀を媒介に一護に流し込むことで、御先狐の効果で一護の中の時間を、死神の力が戻る前の状態まで戻すことで、一護を安定させることができるのじや。」

ルキアはウンとうなずいて、一護に向き合った。

そう……姿かたちは変わっても……星矢が言ったように、魂は小宇宙を……霊圧を忘れない……はずだ。

そして……走り出すルキア。

もちろん一護の方も、止まっていたはくれない。ルキアに向かって虚閃を……

「させるかよって! 『リストラクション』!!」

ミロが指先から光速の攻撃を相手の中枢神経にうちこみ、一時的に一護の体をマヒさせた。

「すまん!」

「礼には及ばん。」

「よっしゃ!俺だって……『ペガサス流星拳』!!」

「こらー!! 傷つけたら……」

「だって、今は再生するから少しくらい平気なんじゃ……」
「ぼやっとするな。『カリツォー』!!」

再生途中の一護の周りに氷の輪が出来た。

「行け、死神！」

「分かっただる!!」

ルキアは瞬歩で一気に入護に近づいた。

「目を覚ましてくれ……一護!!」

脳裏に浮かぶのは、一護に死神の力を渡した時の事……

「!?!」

「グオオオオオン!!」

目の前に来たとき、一護が易々と氷の輪を破壊した。一護の手がルキアの喉元をとらえる。

「つく……(い……息が……)」

意識が朦朧としてくる……そんな時……

「エクスカリバー!!」

一気に身体が楽になるルキア。

「ゲホオツ……ゲホオツ……」

咳をこみながら見ると、一護の腕が綺麗に落ちていた。
一護は少しうめいていた。

「お前は……」

「早くしろ……」

「分かっておる……」

ルキアは、一護に向かって深々と御先狐を刺した。

第四十九話：Wake up!!（後書き）

～死神図鑑ゴールデン in 聖域～

二十三回目 双魚宮 ？

コン「……………」は……………」

目を覚ましたコンを覗き込んでいるのは……………

コン「貴方が助けてくれたんですか！？
綺麗なオネ～サン……………グホオツ！！」

コンの顔面が、その人物の足によってつぶされた。

？「まったく……………私の顔を忘れたのか？」

コン「…そ…その声は……………アフロディーテ！？」

アフロ「ようやく思い出したか？」

コン「あれ？俺って…この宮を出たんじゃ？」

アフロ「お前…忘れたのか？お前は、ここから確かに出た……が、
魔宮薔薇の毒の香りにやられて、案の定、倒れていたのだ。」

コン「あ〜…確かに…倒れたんだって……」

嫌な記憶がよみがえる……

コン「？そういえば、なんで星矢は教皇の間に行けたんだよ？
あんなバラにみんなやられちまうぞ？」

アフロ「そんなのは、ある一定以上の小宇宙を持っていれば簡単な
ことだ。」

もつとも……ペガサスは彼の師匠に助けられたから、生き残れたの
だがな。」

コン「……そうか……ん？でも、どうやって、あの毒の中で……」

アフロ「女性聖闘士の仮面をガスマスク代わりに使ったんだ。」

コン「……！？じゃ…じゃあ……星矢は魔鈴の素顔を！？」

アフロ「見なかったそうだぞ？」

コン「…おいしいな……そうだったら、魔鈴にも、シャイナにも…
仮面云々ではないけど）アテナにも愛されて……星矢の奴はハーレ
ムじゃねえか……！」

ちくしょお……！ずるいぜ……！」

一人泣くコンなのでした……

）続く）

最終話・Return and Advance(前書き)

最終回です！いままで読んでくださり、ありがとうございました！！

最終話：Return and Advance

深々と一護に刺さる斬魄刀：そこからは眩いほどの光が溢れだしてきた。

「戻れ…一護!!」

光の洪水の中で叫ぶルキア。

光はルキアをのみ込み…遠巻きに見ていたシユラやミロ・夜一らをも飲み込み…

眠るように倒れているアズマと、その傍らで星矢たちの安否を気遣うアテナをのみ込み…

髪の色が元に戻ったサガのそばで休むカノンや恋次たちをのみ込み…

意識が戻り状況の把握が出来ない吉良と、虚圏の奥へと向かった兄を追いかける瞬も飲み込み…

永遠のように湧き出てくる虚の相手をしている死神たちをも飲み込み…

ついには虚圏全域を光が埋め尽くした

最終話：Return and Advance

「うう……あれ？」

ガバリッと起き上がる一護。

キョロキョロと辺りを見わたす。

宿題が置いてある机：CDプレイヤー…以前ルキアがいた押入れ…
どこからどう見ても自分の部屋だった。

「俺は…ギリシヤにいたんじゃないかねえのか？まあ、ギリシヤっつーよ
り虚圏って言ったほうがいいのか？」

「あっ！！お兄ちゃん起きた！！」

部屋に入ってきた遊子が満面の笑みを浮かべ、抱きついてきた。

「お…おい！！ゆ…遊子！？」

「よかったよお〜お兄ちゃんが起きてくれて…」

「落ち着けて…それより、お前たちも大丈夫か！？夏梨はどうした！？」

「私ならここにいてるって。」

夏梨も部屋に入ってきた。

「一兄、大丈夫？どこも変じゃない？」

「俺は全然平気だ…ってか、俺のせいで怖い思いさせて悪かったな。」

そう……俺（一護）のせいで…俺をおびき出す『餌』として遊子と
夏梨が誘拐されたのだ…

しかし、夏梨も遊子もキョトン…としていた。

「?なんのこと?」

「お兄ちゃんこそ大丈夫!?お兄ちゃんは、もう3日も寝てたんだよ!」

「3日!?!」

「うん。あのね…」

「黒崎君!」

織姫・石田・茶渡が部屋に入ってきた。

「やっと君は起きたのか。」

くいつと眼鏡を上げる石田。

「大丈夫?いきなり学校で倒れちゃったから心配したんだよ!」

「学校で倒れた!?!」

一護にはそんな記憶がない。最後におぼえているのは…霖とかいう死神が…

「!?!そくだ!?!星矢たちは無事なのか!?!」

「セイヤ?誰の事?」

「はあ?みんな会ってるだろ?」

しかし、皆思い当たる節がないらしい。

「星矢だよ!?!俺と似たような声の奴で…ほら!グリムジョーの奴が遊子たちを攫ったときに、いた奴で…」

「はあ……黒崎…君は夢と現実の区別もつかないのか?」

呆れたように言う石田。

「夢？」

「そつだよ！そんなことないよ、黒崎君！！」

……夢だったのだろうか……死神の力をもう一度手にしたことも……

皆が部屋から出て、一人になり……窓を開けると、ジンチョウフ沈丁花の甘い香りが部屋に入ってきた。

夢じゃない……そう思うけど……でも、みんながそういうなら、夢だったのだろうか？

（せつかく……みんなとまた戦えると思ったんだけどな……）

ふっ……と一護は青い空を見て笑った。

「お茶はまだかね？」

「早く支度したまえ」

「ああもう！！分かってる！！！！！！」

「兄さん……落ち着いて……」

思わず二人の乙女座に攻撃を仕掛けようとしている一輝を押さえる
瞬……

「なぜシャカが二人いるんだ？」

今朝、五老峰から来たばかりの紫龍が星矢に尋ねると、星矢は面白そうに笑った。

「この間さあ、なんか理由は知らねえけど、昔の黄金聖闘士が蘇ったんだよな。」

一輝は吉良っていう死神を倒した後、アスプロスって言ったかな？とにかく双子座と戦った際に異次元に飛ばされたんだよ。んで、シヤカとアスミタのお蔭で戻ってこられたんだけどよお……

その代償として、一日こき使われる契約をさせられたんだよ。」

「……哀れな……」

というか、だから小さなアイオリアがいたり、ミロとミロが口論していたり、蟹の死骸が二つあったりしたんだな……」

「紛らわしいよな……老人は老師とシオン様だけでいいっての！！」「俺は別にかまわないぞ。わが師が2人になった気分だ。」

氷河が、ふつと笑った。先程もカミュとデジエルの二人に稽古をつけてもらったばかりだった。

「そついえば……一護の奴……元気かな？」

「さあ……元気なんじゃないかな？」

虚化が収まると同時に、死神の力も消えた一護……。

今回の事件は『聖闘士』に関係するモノ……ということ、一般人に戻った一護とその仲間たちの記憶から、この件は抹消させる方針だった。

だから……一護は、星矢たちを知らない。会いたくても……会えない……

「死神と言えば……あの人は？今日も修練所？」

「……みたいだね。今日の被害者は……」

「甘い!!」

「つく!!これならどうだ!!」

「背中が、がら空きだぞ、馬鹿者!!」

眼にもとまらぬ速さで戦い続ける二人がいた。

「なあ、そろそろ俺と代わってよ!!」

レグルスが声をはり上げると、二人の動きが止まった。

「あれ?もうそんな時間か?」

「……確かに予定より、20分たってるな……」

シユラが時計を見ると、汗をぬぐった。

「すまん、レグルス。」

「いいって!!俺は、アズマに稽古つけてもらえたら、それでいいんだ!!」

レグルスはアズマを見てニコツと笑った。

「お前:Mか?」

「Mって?」

「……なんでもない。」

アズマは苦笑した。

彼女に死神の力はない……霊力の源である鎖結さけつと魄睡はくすいを破壊されたので、もう死神として生きてはいけなかった。

だが、それと引き換えに膨大な小宇宙：黄金聖闘士クラスの小宇宙に目覚めたのだ。

だからアズマは今、長年の戦闘経験と小宇宙をいかし、黄金聖闘士中心に、聖闘士の武術指南役になっていた。

「でもさ、いくらなんでも休ませてくれないか？せめて5分。」

「え〜！？俺は20分も待ったのに？」

「我慢しろ、レグルス。」

お前だって、疲れていないアズマと戦いたいだろ？」

アイオリアがポンポンっとレグルスの頭を叩いた。

「そりゃ……うん。じゃあ、俺は待ってるからな！」

レグルスが太陽を思わず笑顔を浮かべる。つられてアズマも笑った。

「アズマ……」

「なんだよ、シユラ？」

「……レグルスが終わったら、俺ともう一戦してくれるか？」

「はぁ……なんで、ここには戦闘マニアがゴロンゴロンいるんだ？」

だが、ため息をつきながらも、アズマは、どこか活き活きとした表情だった。

アズマは空を見上げた。

……透き通ったような青い空……

どこか、尸魂界を思い起こすような、澄んだ色をしていた。

「…………五分たったよ!!」

「はやっ!!…………あと三分待って!!」

「え〜!!…!!約束破るの!?!」

「あきらめろ。約束したんだからな。」

「はあ…………かばってくれないじゃん…………」

ゴキリ…と腕を鳴らすアズマ。

「じゃあ…………かかってこい!!」

「じゃあ…………『ライトニングプラズマ』!!!!」

光の閃光のように見える拳を避けるアズマ。ぴょんつと空高く…
太陽を背に飛び跳ねた。

太陽のまぶしさに、思わず目をつむりかけるレグルス…

「戦士たる者…いかなる時も目をつむるなよ!!」

『エクスカリバー』!!」

アズマは手刀を振り下ろした。

e n d

最終話：Return and Advance（後書き）

（死神図鑑ゴールデン聖域）

最終回：教皇の間

コン「やったぜ！！ついに無事に……ここまで来られた！！！！」

ガッツポーズを決めるコン。

ちなみに、また魔宮薔薇の園で倒れる危険性が高かったので、アフロディーテに送ってきてもらったのだった。

コン「うう……思い起こせば……」

ボロ雑巾のようになりつつも……よくここまで生きてたよな……俺。

「

遠い目をするコン……だったが……

コン「はっ！！そうしている場合じゃねえな！！」

最後までらい、しっかりかつこよく決めてやるぜ！！

おい！！目ん玉見開いて、俺の勇士を見とけよ！！！！

お邪魔するぜ！！『童虎とは違いMISSOPETHA-MENOS
を使わないで200年以上生き続けた化け物……てか、妖怪ジジイ
で麻呂眉の、前教皇＋前牡羊座のシオン』！！！！」

そこには、玉座に座った青年がいた……のだが……

コン「……えつと……」

青年は……いらいらしているようだった。

シオン「……遅い……」

コン「だってよお……いろいろとハプニングがあっただぜ？
作者だって、本当は、このコーナーを15回で終わらせる予定だったのに、20何回まで続いて、驚いてるんだからな。」

シオン「黙れ！他人の事情なぞ、知った事かい！！」

コン「……」

シオン「何か言わんかい！！
そうじゃ……これから帰るのじゃろ？なら、ワシが直々に送ってやるう。(ニタリ)」

コン「……最後の笑いが気になるな……
でも、いいや！…お願いするぜ！…やっぱりあれか？『スターライ
ト』……」

シオン「『うるたえるな！！小僧！！！！！！！！』」

コン「『うぎゃあああああ……！！！！！！』」

こうして、シオンの『ちゃぶ台返し』で、白羊宮までもどったコン……

コン「いてて……もう来るもんか!」

シオン『おい、コン!』

念話が送られてきた。

コン「ああ?」

シオン『お主の馬鹿者!!なぜ、アテナ様にはお会いしないのじゃ!』

コン「だってよ……それ以前に、お前がここまで俺をぶつとば」

シオン『早くもどってこんかい!』

コン「かんべんしてくれええええ!」

コンの十二宮を上る旅は、まだまだ続く……かもしれない。

く終わりく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3761t/>

聖域の死神

2011年10月9日02時18分発行